
LOVE OF BLOOD

hisa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE OF BLOOD

【Nコード】

N2567B

【作者名】

hisa

【あらすじ】

この気持ちはなんだろう？お互いの存在に依存していた双子のカイトとユウは、次第に依存以外の感情に気が付いてゆく。大切な存在が血を分けた姉弟で、それでも諦められないものがあると知り…

<1>プロローグ

運命は、産まれた瞬間から決まっていたんだよ。

一緒に産まれて来れたことが至上の幸せです。

同じ血が流れていたことが、同じDNAを持ち合わせていた事が、同じ罪を重ねた事が――

背徳という名の罪に溺れる快感を味わう事は、もう二度とないの
だろうけれど、それでももう一度願いが叶うなら。

一度でいいから、あなたに逢いたい――

＜2＞伝わる気持ち

気が付けば早いもので、季節は木枯らしが吹く人肌恋しい季節になった。

校舎から正門までの道程は、黄色い葉も残り僅かとなった、銀杏の樹が寒風に揺られている。

緩んだマフラーを巻き直し、風に髪を靡かせたユウは隣を歩く双子の弟のカイトにちらりと視線を寄こした。

寒さもなんのそので、鼻歌を口ずさむ弟は双子なのにあまり似ていない。軽い髪がふわふわと風に踊らされても一向に気にする様子もない。

正門までのそんなに長くはない道程。

一緒に歩くのは久し振りである。

「ユウ。帰りに寄り道」

突然鼻歌を止めたカイトは幼げな笑みをユウに向けた。見慣れている、真夏の青空の様な笑顔。寒さで冷えた心が少し温まった様な気がした。

「どこに？ まっすぐ帰らないの？」

「だって、腹減ったし。何か食ってこうぜ」

カイトとは対照的な大人びた笑顔をユウは向け、穏やかに微笑んだ。

了解の意を受け取ったカイトはまた、小さく鼻歌を口ずさんだ。

ユウとカイトは一卵性双生児ではない。だから、双子と言ってもあまり容姿は似ていなかった。だけど、双子特有の共通箇所はいく

らでもある。まったく同じではないのだけれど。でもそれが、お互いに安心する為の安定剤になっているのは自覚がある。

産まれたときから二人は何をするにも一緒であり、大変仲の良い双子で有名だった。それは今でも変わらず、二人でいる時間は穏やかに流れている。

ふうわりとした、薄茶色の髪が印象的でぱっちりとした瞳に長い睫。ユウよりも遥かに高い身長のカイトは同級生からも人気があった。

カイトの横顔を眺めながら、ユウは小さな溜め息を吐く。

ユウはと云えば、どちらかというと大人びた印象を併せ持つ子である。平凡な顔よりは美人よりなのだが、何よりも本人はカイトと対照的に低い身長がコンプレックスだった。

いくら双子とはいえ、まったく同じではない。

それでもユウは、カイトに焦がれた視線を送ってしまう。そんな視線には気付かないカイトは、

「マック食べたい」

「あたしも」

さっそく双子の特有の意思疎通を発揮し、駅前のマックへ二人は向かった。

そんな微笑ましい二人の背中を、銀杏の木が優しく見送る。

二人の後には金色が敷き詰められた道が続いていた。

「お持ち帰りで！」

「え！ やだ、どうせなら食べて行こうよ。寒いから冷めちゃうじゃない」

素晴らしく以心伝心する時もあれば、意見の食い違いもよくある話である。以心伝心のタイミングが絶妙で、吉となるか凶と出るか

は運次第である。

大抵の場合は、優しさ滲み出るカイトが折れる羽目になるのだけ
れど。

結局今日もユウに負けたカイトは二人分のハンバーガーが乗った
トレイを手に、二階の窓際の席を確保した。後ろから大人しく着い
て来たユウは無言で席に着き、窓の外を眺めていた。

ほくほくのポテトを口へ運びながら、カイトもユウと同じく視線
を下界に落した。

＜3＞伝わる気持ち

駅前位置するマツクのある通りは様々な人が行きかっている。ぼんやりとカイトはポテトを摘む手を休める事無く、ユウと共に人並みを眺めていた。

次第に冷えた体が温まってきた頃、不意にユウがカイトを見据えた。

「あそこにいる、一年生。知ってる？」

投げ掛けられた言葉にカイトは窓の外を探し、そこに同じ制服で佇む生徒を見付けた。緩いパーマを掛けた子が、駅の改札口で佇んでいた。人待ち顔で立たずむその生徒は、カイトは見た事もない子だった。

「知らない子だけど。あの子がどうしたの？」

さも関心のない様な返答に、ユウは少しだけホッとした様な気がして、そんな自分に少し焦る。そんな感情は、自分の奥深くに仕舞い込み、

「カイトの事気に入ってるんだって」

「へー。いい子じゃん」

試すような口調で告げたユウに、挑むような視線でカイトは返した。真剣じゃない口調。

心の底から安堵したのがどうかばれません様に、とはユウの胸裏。そして、どうして気に入られてるだけの人を話した事もないのに「いい子」だって言えるのと、悪態を吐いた。

カイトが付き合う子は、あたしが認めた子じゃないと許さないから。

以前言った言葉をカイトが覚えているかどうかは謎だけど、それは冗談ではなく本気で言ったのは確かだった。

産まれた時から、自分の片割れであるカイトを嫌な子だけには渡したくない。

それは、片割れだからこそ。

ただ、それだけの感情。別に、誰かに嫉妬している訳じゃないのだと、ユウは心の中で呟いた。

「ユウのコンポタ冷めてる」

「あ！ 勝手に飲まないでよ！ いつも人の取るのやめてよね」

「少し、元気でした？」

「……」

こういう不意打ちが家の弟は狡いのだ。

嬉しくて、ついにはにかみそうになる顔を思わず逸らした。

確かに、今日は気分が落ち気味だったのは否めない。

なんでそんな気分になったのか、大体見当は付いている。ユウはそっと窓の外の一年生に視線を向けた。丁度待ち合わせの友達が現れて、問題の彼女は笑顔で話し込んでいた。

「相坂 万里」

というその一年生は未だ初々しい感じでとても可愛らしかった。マリがカイトの事を気に入っているらしいと、ユウは昼休みに仲間内でお弁当を広げている時に聞いた。

自分と正反対の容姿を持つ彼女に、不安を煽られたのは言うまでもない。もしかしたら、カイトが取られてしまうかもしれない。彼女は小さくてもバランスよく顔も可愛らしい。

そして、そんな感情を持ってしまう自分に疑問を持ちつつ悶々とした気分で過ごしていたのだ。

だけど、それを誰かに分かって貰おうとは思っていなかったユウは、普段と同じ様に平然と過ごしていたのだ。見破られるとは、カイトはやっぱり侮れない。

嬉しいような悔しいような気分でユウはカイトに小さくピースを送った。

ユウの中の悲しい不安は、ぬるくなったコンポタに少しだけ暖められて。

カイトの暖かい眼差しの中、カイトが双子の弟で良かったと心から思った。

<4>依存する香味

軽やかでそれでいて、少ししつこい。

甘いようでやっぱり少しさっぱり。

味は——如何なんだろう？

最近ユウはお気に入りティーカップに、何だかい香りのする紅茶を朝から飲むのが習慣になっている様で、カイトはカップを口に運ぶ様子を観察しながら味の予想をしていた。

妙に甘い香りが鼻に衝く。だけどそれは嫌な気分ではなくて、少しホッとする様な感覚。

ユウがカップを置いて朝食の食パンに手を伸ばした瞬間に、カイトは狙ったかの様な速さでユウのカップを手にし、

「ああ！ また勝手に飲む！」

「あ、甘い。やっぱり甘かった」

「文句言うくらいなら勝手に飲まないでよ。いつも言ってるでしょ」

朝から勝手な弟を軽く睨みつけユウはカップを取り返した。

唇を尖らしたカイトはそばにあったお茶に手を伸ばし、お口直に一口啜る。

ユウが飲んでいた紅茶は香りと同じく味も甘かった。その味を思い出し、カイトはくすりと暖かい笑みを零す。ユウにぴったりの紅茶だと思う。砂糖の甘さも一際。

「二人とも、あんまりゆっくりしてる時間ないんじゃない？」

そんな様子をキッチンから覗いていた二人の産みの親、母——加奈子は少し慌てた声色で言った。ユウに似た顔でお皿を洗いながら首だけこちらへ向けている。

二人は母の声と同時に壁掛け時計を見やる。
時刻は着実に進んでいた。

「やばい。もう行かなくっちゃ」

ユウは食べかけのパンを皿に放り出し、椅子に掛けてあったマフラーを手に急いで立ち上がった。もっと早く教えてくれればいいのに、とのんびり屋の母の後姿に思う。

「あ、残すなよ！」

急ぐユウにカイトは残されたパンを自分の口へ放り込んだ。たいしてよく噛みもせず、よく喉に詰まらせないもんだと、妙なことに関心しながらもユウは靴を履く。隣で同じく靴を履き終えたカイトは下駄箱の上に置いてあった自転車の鍵を手にし、「行ってきたーす」とやる気のない声で叫んだ。奥からカナコの声が返って来るのを聞いてから、ユウは戸を閉めた。

玄関の側に置いてある自転車に鍵を差し、錠を外す。

隣のユウが小首を傾げ、無言でカイトを見ていた。

「今日は自転車で行くの？」

「だって時間ないだろ？ 駅まで自転車で行こうぜ。後ろ、早く乗るなよ」

心持ち固い表情のユウに疑問を抱くも、カイトはさっさと自転車に跨りユウを促した。無事ユウが腰掛けたのを重みで確認するとカイトは快調に自転車を進めた。

カイトの背中。

見慣れているのに、なぜか胸が締め付けられる様な感覚にユウは

顔を顰めた。いつかはこの背中も誰かのものになってしまふ時が来る。双子の弟が選ぶのは一体どんな子なのだろう。それを考えると何故か心中穏やかではいられなくなってしまう。自分の片割れを独り占めしていられるのは何時までなのか。

良くない。依存し過ぎだわ。

自分を戒める様にユウは瞳を固く閉じた。

冬に差し掛かろうとしている秋風に乗って、ふわりとカイトの匂いが運ばれて来る。細波の様に押し掛けていた不安が少し穏やかになり、優しい匂いに安堵する。

カイトの匂い、眼差し、なんでここが一番落ち着く処なのだろう。弟なのに――やっぱり双子だからなのだろうか。でもそれじゃあ、依存なんて一生治せないじゃない。と、ユウは優しい香りの中で小さく呟いた。

駅まではこの背中も匂いも独り占めだというのに憂いの表情で俯き、カイトが前を見ている事が有り難かった。

<5>それが好きな理由

西校舎の三階に位置するのは二年生の教室である。その下の二階に一年生の教室が並び、東校舎が三年生である。そして、購買部や食堂などが東校舎の三年生の管轄——違う言い方をすれば陣地——に置かれている。要するに、学校で一番学年が上の先輩が一番美味しいポジションを占めているのである。二年生、一年生がお昼休みに食堂に脱兎の如く駆けつけたところでそこは既に上級生で犇めき合って良い席は残っていない。

朝急いで家を出てきたユウは、お弁当を持ってくるのを忘れ、久々に食堂へ足を向けた。

隣で券売機に並ぶ、ユウの頭一つ分位は背のある榎木まゆは端正な眉を顰め、自分よりも低い位置の小さな頭を見下ろした。そして徐に溜め息一つ。

「ユウ。まだ迷ってるの?」

弾かれた様にユウは隣にいるマユを見上げる。そして傍から見ても困った表情で、

「どうしよう。オムライスかカレー? 決められないんだけど……」

「いい加減さあ、毎回の事なんだから迷わないでくれる? ほら、もうすぐ順番だからね」

「マユ、決まったの?」

「ユウみたいに優柔不断じゃないからね」

姉御肌のマユの台詞に頬を膨らませ、それでもユウの思考はオムライスとカレーで占められている。そんなこんなの中に順番はやって来て、マユは颯爽とハンバーグ定食の券を片手に先に行ってしまう

った。

慌ててお金を入れて、しなやかな指先で押したのは――オムライス。

そしてユウは小さく溜め息を吐く。

食堂に來ると毎回繰り返される行動パターンに自分の優柔不斷にユウは嫌気が差す。小さな食券を見詰め再度溜め息を漏らした。

オムライスとカレー。どちらがユウの好物かと聞かれれば、それはカレーと即答出来る。

それでは何故オムライスとカレーで迷うのか。

ユウの中の答えは単純でいて、それは親友のマユにも言えない理由がある。

オムライスはカイトの好物だったりするからだ。ユウ的にはカレー。だけど、オムライスを前にしてしまうと――

受け取ったトレイを両手に、既に上級生で埋まった席の間をユウは情けない面持ちで歩く。先に行ってしまったマユを見つけ、そっとその向かいに腰を下ろした。

それまで大きな瞳を綻ばせユウに手を振っていたマユの表情が、明らかに呆れの色に侵食されてあからさまな視線を投げかける。

「で、結局オムライスなんだ？ てゆうか、いつもカレーとオムライスで迷うけどユウがカレーを食べてるとこ見たことないんだけど」

マユがちらりとオムライスに視線を投げかける。そこには呆れの色が滲み出すと言うより溢れ出ている感があった。

「そ、それについては触れないで」

「結局オムライスなんだから迷わなきゃいいのに」

「ごもっともです……」

マユの言葉に些か小さくなりながらユウはスプーンでふわふわの卵をライスと共にすくい上げた。ふわふわ卵に包まれた温かなご飯。ユウの好物ではないけれど、オムライスを食べるとカイトの幸せそうな顔が瞼に浮ぶから——ちょっとだけ、ユウは幸せを分けて貰うのだ。

「おいしい」

「幸せそうで、なにより」

そんなに美味しいのかと、ユウの心根を知らないマユは少し勘違いをしているが、親友の綻ぶ顔に優しい眼差しで答えた。

マユとユウは小学校からの同級生で、高校まで一緒に進学する程仲が良い。ユウと一緒にそれはカイトと同じ歴史を刻んで来た訳でもあるのだが。そんな長い時間を一緒に過ごしては来たのだけれど、流石にオムライスの話だけはマユにも言えない。だってそれは、いくら双子とはいえ理由が異常だしと、ユウはマユのきらきら光る艶のある長い髪をぼんやり眺めながら思う。

ちよつとばかり、過剰な依存。麻薬にも似た片割れ中毒。そんな感情の名にユウが気付くのはそんな遠い話ではないのだけれど。

ほんのりとオムライスの味が、けども着実に確実にユウの心に味を付ける。

<6>好きと嫌いと白い翼

他愛のない話にユウとマユは夢中になりながら、昼食を終えた。

日当たりのいい席は上級生に取られてしまっているの、昼食をさっさと終えて二人は教室へ移動しようとしたその時。不意に聞きなれない声にユウは呼び止められた。

ユウが振り向いたそこには、上級生の「間宮咲」が爽やかな笑顔をこれでもかと言うほどに浮かべて立っている。

ユウは一瞬困った様な表情を零しそうになったが、咄嗟にそれは偽善的な笑顔へ変貌する。

「こんにちは、サク先輩。どうしたんですか？」

少し身構える。

間宮咲。一学年上の先輩で、ユウが入学した時からなにかある事にちょっかいを出す存在。要はサクのお気に入りに入れてしまったのだが、正直ユウは余り良い思いはしていなかった。最近は余り構って来なかっただけに、ユウの警戒心が過剰になるのも仕方がない。そんなユウの気はいざ知らず、サクはだらしない笑顔で、

「ユウちゃん、今日お暇？」

「えっと、今日はちよつと……」

突然のお誘いに少々戸惑い気味で、ユウは慌てて隣のマユに視線を送る。

仕方がないな、と言う感じでマユは眉間に軽く皺を寄せ、助け舟を出した。

「ごめんなさい先輩。ユウは今日あたしに付き合ってくれる約束し

てるんですよ」

「おっと、マユちゃん。先約か、別に俺はマユちゃんも一緒でもいいんだけどな？」

「そりゃ、残念です先輩！今日は、ユウと二人っきりでお買い物なんです。また今度誘って下さいね？」

さらに、それはそれは華麗にマユはサクの誘いを見事にかわした。ユウはこっそりと安堵の溜め息を吐き、

「先輩また誘って下さい」

軽く一礼してマユと共にその場をそそくさと逃げ出したのだった。

「ユウさ、その気ないんだったらちゃんと態度で示さなきゃダメだよ？あの人はあんな曖昧な態度じゃかわせないから」

「だって、何か言われた訳じゃないのに」

「言わなかったてあからさまに分かるでしょー！入学した時からだし。しかもサク先輩人気あるけど、軽くて有名だし。遊ばれたくないならちゃんと意思表示しなきゃダメだって。いつもあたしが側にいるとは限らないんだからね？」

少し厳し目にマユ。

そんなマユの意見はご尤もで、ユウには反論の余地がない。かと言って、別にサク先輩が嫌いなのでもないのだが、だからと言って好きな訳では勿論ない。だから正直余り興味のない存在。そんなこんなで、強く押しのけたり出来ないでいるのだが。

「ねえ、マユ？マユって好きな人いる？」

教室の窓の外を、白くて綺麗な翼の鳥が一羽横切った。窓際の席から身を乗り出すユウの肩越しにぼんやり視界の片隅に納めながら、マユは突然この子は何を言い出したのかと疑問に思う。真剣な表情で、少し視線が泳いでいる。

親友の突拍子のない発言と、何故だか初々しい態度にマユは思わず笑いが込み上げて来る。今まで誰かと付き合った事がない訳でもないのにと。

「突然どうしたの？」

「別に、何かあった訳じゃないんだけどね。あたし、今まで本気で好きになった人って実はいなかったんじゃないかとふと思って。何か、前に付き合ってた人達もサク先輩も同じ感じ？」

「それって、別に好きでもないし嫌いでもない？ って感じ？」
「うん。そんな感じ？」

二人して疑問符を飛ばしまくりながら、それでも何となくユウの言ってる意味がマユは理解出来る気がした。なぜならそれは、以前のユウを見て何となく感じた事があったから。だからどちらかと言えば納得。

マユは小首を傾げながら手を顎に押し当てて考える。端麗な顔が難しく歪んでしまった。

いつかユウにも本気で好きになる人が現れるのだろうか。

でもそんな相手が現れるまでは、きっと分からない。

本気で好きになれる人が現れば、ユウの気持ちも白い翼を持ってさっきの白い鳥の様に飛び立って行くのだろう。

そしたら、きっともっと強くなって優柔不断だって治るかもしれない。

少し、それも寂しい気がするのにはマユがちよっとだけユウよりお

姉さん気質だから。だけど、ユウの事を一番応援してるのも、白い翼を早くあげたいのも本当の気持ち。

「本当の好きってどんなだろうね？」

マユは優しい笑みを湛えながらユウを見た。

<7>それぞれの心曲

東校舎と西校舎を繋ぐ渡り廊下は二つ。一階に、雨を凌ぐ程度に設けられた屋根のある吹き抜けの渡り廊下。そしてこれまた二階に位置する雨曝しの渡り廊下。一階の渡り廊下は直接中庭にも出る事が出来る造りだ。

寒くなってくると、2階の渡り廊下の利用者は減る。理由は簡単で、一階より風が強くて寒いから。でもそんな2階の渡り廊下がユウは好きだったりする。

何となくそこから眺める中庭が好きだ。緑がいっぱいあって、その真ん中に位置する気持ち程度の池にあんまり大きくない鯉がいる。お世辞にも等間隔とは言えない感覚に置かれた古びたベンチに、お喋りする学生。自分だけ、違う空間から眺めている様な感覚を覚える。いつもはその景色の中に溶け込んでいる自分。だから、少し不思議で取り残された様な、でも特別な様な。ユウのお気に入りの場所。

「でも、来るんじゃないかなあ……」

そんな特別な場所で、ユウは声にならない眩きを零す。

真っ直ぐに中庭を見詰める瞳は、ゆらゆらと揺れている。綺麗に整えた眉尻を下げ、唇を噛み締めた。

見たくない。

でも逸らせない。

自分の視線を釘付けにするのは、そこに自分の片割れがいる事実か。それとも、一緒にいるのがマリという事実か。はっきりした理由が分からず、そんな自分に戸惑う。知らずにもやまとした不安にも似た不快感がユウを苛む。

楽しそうに、可愛らしく笑うマリがそこにいて、傍にいる事が全

く違和感のないカイトが自然な笑みを零す。

何を話してるのかな――

二人の会話までは聞こえて来ない。だからその表情で、感情を垣間見ようと必死に目を凝らしていた事に気が付き愕然とする。

やめよう。

何だか分からないけど、こんな事してる自分が嫌だし何だか苦しい。締め付けられる思いに耐えられそうにない。ユウは、顔を逸らし校舎の方へ足を向けた。

早くこの場を去りたかった。

視線を足元に落したまま、俯き加減でゆっくり歩く。誰もいなかった筈の渡り廊下に、不意に俯いた視界の中に上履きの先が入り込んできた。小さく驚いたユウは弾かれた様に爪先の持ち主を見上げる。

「サク先輩……」

其処には無表情で校舎の壁に寄りかかった状態で、無造作にポケットに両手を突っ込んだサクが立っていた。昼間の笑顔が嘘に様に無表情で、心なしかユウの内心が冷やりとする。

「いつから、其処に？」

「ずっと、いたけど？　なんならユウちゃんが来る前からね」

壁に寄り掛かった姿勢を正し、サクは含んだ表情を見せる。ユウの中で、危険な警報がなっている気がした。

「今日は、マユちゃんとお買い物は？こんな所で何してるの？」

「……別に、何も」

「そんなに、弟が気になる？」

「そんなんじゃない……！」

「じゃあ、何でそんな辛そうな顔してるの？何か、俺分っちゃたわ。ユウちゃんが靡かない理由。ちよっと、依存し過ぎなんじゃないの？いくら双子とはいえ、相手は弟だし。俺、ちよっと納得いかないしそんなの。他に好きなやついるって言うならまだしも、それって一種のブラコンだろ」

真剣な眼差し。今までにない迫力、今までにない冷めた感情、剥き出しの敵対心。ユウの中の警報は鳴り止まない。見た事のないサクがそこにおいて、強張る顔を隠すことが出来ない。

そして言われた事を理解する為に、もう一度頭の中で反芻する。

——依存し過ぎなんじゃないの？

他人から見ても分ってしまう程？

——いくら双子とはいえ、相手は弟だし。

そんな事言われなくなったら、一番良く分ってる。

サクの言葉を噛み締め、思わず歯を食いしぼる。なのに、反論の言葉は喉に支えて思った様には出て来なかった。

悔しくて涙が出そうになるのを、睨みつける事で無理やり堪えてユウは何も言わずにサクの横を通り過ぎた。

依存し過ぎな事なんかとくに分かっている。だから、こんなに悩んでいるのに。

動揺しすぎて、上手く呼吸が出来ない。悔しくて堪らなかった。誰かに心の内を見透かされた事も、何も言い返せなかった自分も。サクの表情は無表情だったけど、声音は少し怒っていた。からかってユウに言い寄って来ている訳ではなかったのだと、初めてユウは理解する。無表情のサクは、いつものサクとは違って背筋がぞく

りとする程怖かった。ただ、背後から照らす夕日の翳が擦れ違いざまのサクをととも綺麗に彩っていて、何かを考える事を拒否する頭はその映像だけを睨った瞼の裏に描いた。

カイトの声が聞きたいと、無性に思った。

<8>それぞれの心曲

他愛のない話。突然声を掛けて来たのは、昨日マツクの二階から見かけた一年生。

無視するわけにもいかず、心此処に在らずといった感じで、それでも相手に悟られない様カイトは心にもない笑顔を浮かべ耳を傾けていた。

端から見れば和やかでいいムード。

そんな気のないカイトは微塵も思ってはみないのだけれど。

目の前の彼女は愛らしい花の様な笑顔を浮かべて笑っている。確かにそこら辺の女の子に比べれば飛びぬけて可愛いのだろうとカイトは思う。だけど、やっぱり大した興味は湧いては来なかった。

「カイト先輩？」

そんな彼女が小首を傾げる。さっきまで笑っていた彼女はふと逸らしたカイトの視線に気が付き、そちらに視線を流した。右斜め前方。二階の渡り廊下。そこにいたのは、

「あ、ユウ先輩ですね。カイト先輩のお姉さんですよ？」

カイトは声なく頷いた。

艶のある髪が夕日に反射していきらきらと輝いてとても綺麗だったのに。また、なんだか悲しそうな顔をしている。最近のユウは物憂げにしている事が多いようにカイトは感じていた。中庭をぼんやり眺めているユウはこちらの存在に気付いているのだろうか？

カイトはそんな事を思いながら、一年生に視線を戻した。

そろそろ開放して欲しいなと思う。そして、この子の名前は何だったっけ？と思いながら相手には伝わらない程度の愛想笑いを浮か

べた。

ユウの思い詰めた様な顔が頭から離れなかった。片割れのそんな表情を見るとカイトはついシンクロしてしまう。一体何かあったのだろうか。不安が雨雲の様に膨れ上がる。ユウにはいつでも笑って欲しいのに。

「ねえカイト先輩？ 聞いてます？」

ついぼんやりしてしまったカイトに一年生は小さく頬を膨らませた。しまったと内心ぼやきカイトは慌てて遠くに行っていた思考を手元に引き戻す。

「ごめん。もう一回言ってくれる？」

「やっぱり聞いてなかったあ！」

「ごめんごめん、で、どうしたの？」

「今度どこか連れてって下さい」

いつからこんな話の流れになったのだろうと、カイトは一瞬きよんとする。心此処に在らずのうちに話がおかしな方向に行ってしまった様だ。一年生は輝かせた瞳を懸命にカイトに向け返事を待っている。

困ったなと思い、また視線をユウがいる筈の二階の渡り廊下に向けた。

「あれは…」

返事を心待ちにしていた一年生もカイトの視線を追う。

「ああ、サク先輩ですね。それより、先輩どうですか？」

「ああ、じゃあまた今度な」

そう言ってカイトは一年生の顔も見ずに答え、踵を返した。

一瞬見えたのは擦れ違う、サクとユウの横顔だった。お互いに何とも言えぬ顔をしていたが、サクは兎も角ユウはカイトには泣いている様に見えて仕方なかった。適当にあしらう訳にもいかないと思っていた一年生に、思わず適当な返事を返しカイトはユウが消えた西校舎へ駆け出していた。

確かサクは以前ユウに言い寄っていたのを覚えている。最近はずつと沙汰がなかっただけに何かあったのだろうか。ここ最近のユウは不安定でカイトの気持ちでもかと言うほど乱す。悲しい顔をするのは何故？ 儚げな視線は何を見ている？ なんでこんな不安な気持ちになる？

ユウが分らない事がこんなにももどかしく、そして少し寂しい。

オレンジ色の夕日がユウの物憂げな表情と重なり心に沁みた。

<9>それぞれの心曲

校庭から賑やかな声がする。それは、運動部の掛け声だったり、声援だったり。風に乗って流れてくるそれらが無意識に捉えた聴覚を無視し、マユは半ばぼんやりと教科書を鞆に仕舞った。

化粧ポーチに、携帯に教科書とぎっしり詰め込んだ鞆を手にし、誰もいない教室に佇んでいた。

「本当の好き……かあ」

昼間のユウとの会話を思い出す。マユだって本当の焦がれる好きはもしかしたら経験していないのかもしれない。しているとは思ってても、実はもつともつと大きい気持ちがあるのかな、と。

どんなだろう？

オレンジの暖色が差し込むこの教室の様に、暖かい気持ち？それとも、この暖色に混じる澄んだ冷たい空気のように少し寂しい気持ち？焦がれてしまえば、五感が麻痺してしまうのかもしれない程の——それ程だったら、まだ未経験。

小さくくすりと笑みを漏らす。ユウの質問にはやっぱり答えて挙げられそうにないけれど、一緒に発見して行く事なら出来るかもしれないなど、少し嬉しく思った。

暖かい気持ちになったところで、帰ろうとマユは教室のドアを開けようとした途端。それは反対側から勢いに任せて開かれた。余りの勢いに圧倒されたマユは思わず立ちつくし言葉を失くしたが、目の前の人物は呆ける時間を与えてはくれなかった。

「マユ！ ユウ知らない！？」

走ったのかな。

まず、思ったのはそんな事。

カイトの乱れた髪と、頬を上気させ上がった息を抑えようともしない様子を呆気に取りられながらマユは思う。

「ユウならホームルーム終わってすぐ帰ったと思うけど。もう、結構前に教室を出たよ」

「それなら知ってる。さっき二階の渡り廊下で見掛けたから。て事は、教室には戻ってないのか」

苛立たしげに、乱暴に髪を掻き揚げた。しかめっ面さえ様になるなんて、ユウの弟ながら小憎たらしいなとマユは思う。悪意は籠ってなく、寧ろ親愛の意味合いで。

「あんた達さあ、いつまで仲良しこよしよ？ ユウだって一人で帰る時だってあるでしょうよ。いつも一緒にいるんだからたまには良いじゃない」

少し意地悪な発言。

いつもカイトはユウを独り占めしているんだから、たまにはいいかなと軽い気持ちで。だって、仲良しこよし依存の双子にはこんな小さな意地悪が、なんの意味をも持たないのを知っている筈だから。依存の双子の絆には敵わないけれども伊達に幼馴染しているわけじゃない。

「いや、そうじゃなくて。さっきサク先輩と一緒にいたから。しかも何か思い詰めた様な顔して見えたから。あ、マユ何か聞いてねえ？」

ほら、やっぱり意味を持たない。

「今日の昼にサク先輩に誘われてたけど？　でも、あたしが断ったんだけどな」

「そっか。サンキュウ。もう少し探してみるわ！　マユも気を付けて帰れよ」

思案顔のマユを置いて、カイトは慌しくユウを探しに行ってしまった。登場も退場も慌しいやつ、とマユは呟やいた。

あんなに慌てて、息切らして、ユウの事を探して。

あれ以上にサク先輩はユウの事を想っているのだろうか。カイトが傍にいる限り、ユウに本当の好きは訪れないのではないかとふと思った。だって、あんな大きな依存の愛情に包まれていたらきっと居心地良くて、本当の好きは見落としてしまうかもしれない。

双子の依存と、本当の好きと、どちらの絆の方が強いのだろう。想いの大きさは量れないけれども――

でもそのどちらも、夕日の暖色と同じ様に暖かいのだろうか。きっと、暖かい筈。

<10>それぞれの心曲

胸を締め付けられる。重苦しい気持ちで一杯で一人にはなりたくないのに、でも一人で居たくて――ユウは西校舎の屋上にいた。

寒風吹き荒むこの時期の屋上は、お気に入りの渡り廊下より断然寒くて思わず身震いする。吐いた白い息が、上空に向かう前に風に攫われて消えていく。寒くて凍えそうなのは身体だけではなかった。

サクが言った言葉がユウの頭の中をぐるぐると思考を掻き乱し、思うように感情が付いていかない。カイトの声が聞きたくて聞きたくて仕方がない。小刻みに震える身体を自分の両腕で抱きしめ、ユウはその場にしゃがみ込んだ。

行き場の見付けられない感情が、静かに溢れ出し、ユウの白い頬を音もなく伝った。

依存――

ユウは依存する事の心地よさを知っている。

お互いにそれで心の平穏が得られるのなら、それでもいいと今まで何度も思ってきた。だけど、ユウの中の何かが否定する。このままじゃ、危険。先程サクに感じた危険信号よりも危険で、それでいて甘美な罠。それに嵌まってしまったら、一貫のお終い。

判ってはいるのに、サクに言われなくなっただって自分が一番おかしいって気が付いている。こんな感情は抱いてはいけないのだ。依存以上の感情になってしまったら、その感情の名前は何と表わすのだろうか。

でも、どうすればいいのか判らなくて。ユウの心の面積を半分以上埋める片割れの、所有面積の消し方をユウは見付けられないでいる。カイトの顔、声、視線、なにかも1ミリの狂いもなく思い出せるし、目を瞑っていたって存在を感じる事が出来るのに。

こんなに心地良くて、暖かい存在。
カイトしかないのに。

「ユウ？　こんな寒いところにいたら風邪引くよ？　お家に帰ろう」

背後に感じた暖かさ、やっぱりカイトだ。どうしてこんなに卑怯なタイミングで現れるのだろう。

双子の以心伝心の成せる技なのだろうか、ユウは伏せた視線を上げもせずと思う。しゃがみ込んだままカイトに背を向け、一向に立ち上がるとはしなかった。

こんな顔は見られたくないのに。

でもカイトに会いたい、声が聞きたいと望んだのは自分で。

きつと探しに来てくれたのに違いなくて、凄く嬉しいのに、でもそれを素直に喜べない自分がいるのも否定出来ないでいる。

矛盾する自分の気持ちが解らない。

「なあユウ。お前最近大丈夫か？　なんか心配事とか悩みとかあったりする？　最近不安定じゃん」

ふわりと綿雲の様に心が穏やかになる。

自分の些細な感情だってカイトは見逃さない。誰よりもユウの事を理解して、一番に心配してくれるのだから。こんな安定剤を簡単に手放せる訳がない。

「ユウ？」

頑なに無反応。これはどういった反応なのだろう。

カイトは一瞬だけ逡巡したけど、自分だったらきつと、こう。

ユウの横に同じ様にしゃがみ込み、そっと髪を撫でる。小さい子供にする様に。いい子いい子。

「……子供扱いしないでよね。仮にもあたしの方がお姉ちゃんなんだから」

「そうだった。ユウが泣き虫だから忘れてた」

「ひどいっ！」

「あ、やっと顔上げた！」

またやられた。

悔しい気持ち半分、嬉しい気持ち半分、その隙間に戸惑い少し。

ユウは泣き笑いの様な顔をして、カイトの視線を誤魔化した。

そっと、手が伸びる。

冷たくなった頬に、冷たくなった涙の後をなぞる様に暖かい掌が拭っていく。どうして、この手を手離さなきゃならないのだろう？ 視線をカイトの顔から逸らせず、ユウはぼんやりとそんな事を思う。

いつからこんなにカイトの暖かさの虜になってしまったのかな。

少しずつ落ち着いて来た頭で、帰ったら取り合えず暖かい紅茶を飲もうと思った。

「でさ、一体どうしたの？」

手を止めたカイトが問う。真剣すぎる程の眼差しに、一瞬呼吸が止まりそうだった。その瞳に吸い込まれそうで、何もかも話してしまいたい衝動に駆られる。慌てて、ユウは頭を横にぶんぶん大きく振った。カイトは拒否の反応に小さく溜め息を吐き、

「分かった。何も聞かない。でも、辛くなったら絶対言えよ。約束だからな！」

無理やり指切りげんまん。

思わず噴出したユウに、やっとカイトは安堵の息を吐いた。お願いだから、辛そうな顔をしないで――

いつでも安心出来る場所でユウには笑って欲しいのだから。

それはカイトの勝手なわがままなのだけれど。それでも少しは叶えられる様努力する事は、諦める事より簡単だから。大事な大事な自分の分身為。

暖かい心地の中で、甘い甘い、安定剤をどうぞ？

<11>知ってはいけない心

大きな電子音。光るディスプレイには見慣れたというより親しみのこもる文字。ちかちかと点滅する着信を知らせる小さなライトを、うつすらと開けた寝ぼけ眼で見つめる。そして、

「うるさい……」

余りの眠気にユウはそのまま電話を切って、携帯を掌に握り締め、そのまま再び幸せな眠りの森へ迷い込もうとした、その瞬間。

もう一度けたたましい電子音。早速、マナーモードにしていなかった事に後悔すれども時遅し。先程と同じ動作を繰り返し、今度は仕方なく大きな息を吐いて光る通話ボタンを押した。

「起きて、起きて！ 寝過ぎだつてばユウちゃん」

「うー、今日学校休みなんだけど……」

「だからって、こんなに寝てばつかいたらもったいないじゃん。出掛けようぜ。俺、映画観たい映画！」

「えいが……」

朝のユウは低血圧。そして対照的に朝から元気なカイト。双子の相違点である。いつまでも寝てるユウに携帯にて朝からこんなやりとりはざらだったりして。

でもでも、何よりそんな事よりユウの心を占めたのは、カイトの発した映画という単語。

映画というユウの中での認識は男女で行くデートコースの一環である。

小さい頃家族では一緒に行ったけれども、カイトと二人で映画館は行った事がないと気が付いた。

何だか少し照れくさくてうつすらと上気した頬を枕に埋める。電話越しだからカイトには見えてないというのに。

「ユウ？ 聞いている？ おーい、また寝ちゃったの？」

「ううん、聞いている。準備するから待ってて」

瞼を擦りながらも、もうすでに眠気は遠く彼方まで飛んでいってしまっている。

どうしよう。カイトと映画だって――

「姉弟で映画って、別に普通か……」

何故か浮き立っている心を鎮めようと敢えて声に出してみる。少し、自嘲気味。

上半身を起こし捲った布団から暖かい温もりが逃げていく。冷たい外気に触れ、少し落ち着いて来たような気がした。

何で心が浮き立つのか。

どうして頬が熱くなるのか。

まだ、考えてはいけないような、認めてはいけない何か。そして、サクの一言が唐突に蘇る。

――ブラコン

「だから何よ、仲が悪いよりいいじゃない」

思い出して、ユウはいらいらと爪を噛んだ。気にしている事なのに、そんな簡単に他人に傷を抉られたくはなかった。ユウは気持ちを振り払う為大きく伸びをして、寝巻きのまま階下の洗面所に顔を洗いに降りた。

階段を降りるとリビングから賑やかな明るい笑い声がする。カナコとカイトの声が冷たい空気の張り詰めた廊下に賑やかに響いて和やかな雰囲気醸し出す。ささくれ立った気持ち少し和らぐ。

家族の明るい笑い声に軽くなった足取りでさっさと洗顔し、ユウも意気揚々とリビングに入って行った。

「おはようユウちゃん」

母、カナコが二児の母とは思えないあどけない笑顔で迎えてくれる。テーブルを挟んで向かいに座るカイトはユウが起きる遙か前から起きていた様で、身支度は完璧に済んでいた。

完璧な笑み。チクリとした痛みがユウの胸を締め付ける。

なんで――

なんでそんな優しい笑顔をするのだろう。

誰にでも、そんな顔をカイトはしているのだろうか。もし、しているのであれば、それさえも独り占めしたい衝動に駆られユウは焦る。だって、それはもう依存の一言では片付けられない。

この感情が表わす的確な表現を自分自身が見付けられないように、大事に大事に心の奥深くに仕舞い込む。それに気が付いてしまったら、この関係は終わってしまうから。

「ユウ、早く映画見に行こう？」

真夏の太陽の笑顔。

くしゃつと歪んだ端正な顔に浮ぶ笑窪。どれだけ、ユウの心を掻き乱せば気が済むのだろう。ユウはカイトの笑顔と対称的に追い詰められた小動物の様に引き攣った笑顔をカイトに返した。

心の奥の深い深い処に、本当の気持ち隠して。

誰にも、自分にも知られないように――

＜12＞それが嫌な理由

こんなものってありなのだろうか。理不尽にも限度っていうものがあるのに、さすがに双子の大事な片割れと謂えども許せる事と許せない事がある、という事をユウはひしひしと身に感じていた。

眠い中、カイトに誘われ半ば有頂天で出掛けて来た自分への罰なのだろうか。それとも、そんなカイトへ過剰に依存してしまった自分への戒めか、はたまたそれは単に神様の意地悪なのか。

そんな事を顔中引き攣らせてユウは思う。

ニットの帽子を深く被り直し、不満一杯で渋面だ。

意気揚々と、カイトがペダルを漕ぐ自転車の後ろに跨り、自宅から十分程の距離にある映画館へやってきたまでは良かった。でこぼこ道のおかげで振動がお尻に響き、若干痛かったけど、そんな痛みにも幸せを見出せる程に。

知らずと鼻歌を口ずさむ程に。

それまでは、良かったのだ。

「あ、先輩！　こんにちわ」

一瞬で頭が真っ白。

なんで、この子がここにいるのか本当に分からなかった。

映画館の駐輪場に自転車を停め、チケットを買う為に館内に入ろうとしたその時。マリが目の前にいた。偶然鉢合わせしたただと始めは思ったのだ。それだけでも、この間の渡り廊下から見たカイトとマリの和やかな様子を思い出し、裡の中は穏やかではなかった。

併せて思い出したくない事まで思い出し、先程まで煩いほどに賑やいでいた胸の内が、重石を乗せられたかの様に沈んで行くのが分かった。

そして、とどめを刺したのはユウの中での絶対の存在。

「ごめん、待った？ ユウも連れてきちゃったけどいい？」

「は、はい！ ユウ先輩はじめまして。一年の相坂万里です」

「どおも……カイトの姉のユウです……って知ってるよねえ」

待ち合わせしてたなんて聞いてない。

これっぽっちも、聞いていない。依りによって、何故マリなのか。ぐるぐると回る頭の中は、真っ白で働かないのにユウの心は素直であからさまに判る程意気消沈していた。

朝から一喜一憂忙しい。

どうにもこうにも恰好付かない返事と呆けた顔で、ユウはマリと挨拶を交わす。くりっとした大きな瞳が愛らしい小動物のようで、確かにかわいい。小さな顔に思わず触れてみたくなる柔らかそうな髪。ユウは失礼な程マリを凝視して観察したが、余計に落ち込む要因しか見出せずがつくりと項垂れるしかない。

なんだって、家の弟は他人とのデートに姉を連れてくるのか。

さすがに以心伝心で知れる自信も湧いてこない。カイトは一体何を考えているんだろうと、ユウは隣に佇むカイトを訝しげに見上げたが、ユウの視線に気が付いたカイトは憎たらしい程の優しい笑みを返すばかりで、何かを考えている様には見えなかった。

何だか、ここまで来ると色々悩んでいる自分が莫迦らしくなり、逆に何も考えていなさそうな弟に腹が立つ。沸々と湧き上がる怒りを抑えながら、ユウは二人に笑顔を向けたが確実にその目は笑ってはいなかった。

「マリ、見たいの決めたの？」

館内に張り出されている映画の時刻表と睨めっこしながら、カイトはマリに問う。マリは小首を傾げながら、

「これがいいです。カイト先輩はこれ、いや？」

「いや？ 別にこれでいいけど」

そんなやり取りを後ろから眺め、ユウは何だかやり切れない思いと激しい怒りと悲しい気持ちの狭間でとても不愉快な気分一杯だ。この空間に自分がいる必要性を感じない。きっとマリだってユウの事を邪魔に思ってるのは明らかなかわけだし。だって、ユウだってそう思っている。

——邪魔？

なんで、邪魔だと思うのだろう。

ユウは口内に溜まった唾液をぐくりと嚥下する。マリにとってユウが邪魔なのは、マリがカイトの事を好きだから。それは至って自然な事で不自然な事なんかこれっぽちも無い訳で。

じゃあ、ユウがマリを邪魔だと思う理由は？

出せない答えにユウは絶句するしかない。こんな感情馬鹿げてる、在り得ない感情に囚われて自分を見失ってるだけだ。これ以上は否定するしかなく、今のユウには拒否するしかない。だって、そんな勇氣はないから。

カイトを独り占めにしたいと一瞬でも思ったなんて、何が何でも認められない——

この世から、独占欲なんて言葉が消えてしまえばいいのに。
心の底からユウは思った。

<13>こんな現実

「俺、ジュース買って来るからそこで待ってて」
見たい映画のチケットを買って直ぐにカイトは売店の方へ行ってしまった。

映画館の端に羅列されている椅子にユウとマリは腰掛けていたが、微妙に嫌な空気が流れている気がしてユウはとても居心地が悪くしょうがない。

お互いに警戒している様な。そんな、空気。

最初にその空気を破ったのは、マリだった。
しかも、大分棘のある言葉で。

「ユウ先輩。なんで来たんですか？」
「は？」

呆氣に取られてユウはポカンと口を開けたままマリの顔を見た。
一瞬咄嗟には何と言っているのか理解出来なかった。なんて事を言う子だろう、仮にも思い人の姉に向かって。しかも、マリは心底嫌悪感を抱いているのか眉間に深い皺が寄っている。

「普通いくら弟だからって、女の子と遊ぶのにわざわざ姉が付いてなんかこないですよ？ わたし、結構がっかりだったんですけど」

オブラートに包む様子も見せない、マリの物言いにユウは顔と頭の同時に血が上って行く音が聞こえた気がした。

なんで、あたしが悪い事になってんのよ――

怒り心頭で、動悸が激しい。仮にも、ユウのが先輩だし、なんだこいつ。

「そりゃ、残念でした！ カイトがあたしを誘ったって事はあなたの事なんかこれっぽちも何とも思っていないって事なんじゃない？」

勝気にユウ。もう、これでは売り言葉に買い言葉である。先程とは比べ物にならない程の張り詰めた空気。一触発の睨み合い開始である。

若干背の高いユウの方が少しだけ上から見下げる角度で睨みを効かす。カイトが戻って来るまでが勝負だ、きつと。この子は絶対カイトが戻ってきたら猫を被るはずだから。

「よく、そんなひどい事言えますね。もとを糺せばユウ先輩が悪いんじゃないですか！ 弟のデートに付いて来るなんて普通じゃないし！」

「だから、知らなかったって言うてるでしょう！ あたしだってカイトに誘われたんだから」

「何それ、自慢ですか？！」

「は〜？ もう、意味わかんないし。何が自慢なのよ」

「誘われた事に決まってるじゃないですか！」

なんて下らない口論なのだろうか。年下相手に激しくなるつもりはなかったのに、少し反発出来ない位に冷静沈着な態度で撃沈させたかったのに。

そんな自分の意思とは裏腹に熱くなる自分を抑える事が出来ない。だって、誰かにカイトを渡すのもいやなのに、こんな子には死んでも渡したくない。絶対に嫌だ。

「帰ってくださいよ、先輩」

「なんで、あなたに帰れなんていわれなきゃならないのよ？ 嫌ならあなたが帰りなさいよ」

絶対に負けない。

固くユウは心に誓う。こんな子にカイトを渡すものかと。

「あたしが始めにカイト先輩と約束してたんだから絶対に帰りません」

「あたしはカイトに誘われたんだから、あたしだって帰らないわよ」

お互いに一步も譲らない。交差した視線が激しく熱い。ユウは絶対に逸らすものかと、一段と眼力を込める。同じくマリも負けてはいなかったのだが。

とんだ、猫被り。

見た目が可愛いだけに質が悪い。これでは誰だって騙されてしまふとユウは心中ごちた。カイトだって、絶対に気付いていない筈である。どうやって、この子をカイトから遠ざければいいのか考えるが、普段温厚なユウには正直方法が思い当たらない。

心の中で盛大な溜め息を吐き、これからの事を考えると何だか泣けてくる。うんざりした気分でユウは早くカイトが戻って来る事を祈らずにはいられなかった。

口論から一步も譲らない睨み合いへステージを移した二人は無言の第二ラウンドへ。勝敗はカイトが戻ってくる前に着くのだろうか？

<14>こんな結果

ああ、失敗した。

まず理解したのは自分の選択が間違っていた事。正直にばらすと、そんなに深く考えていなかったという事と、女の恐ろしさを侮っていたという事実。

カイトは紙トレイに乗せた三人分のジュースを持ったまま咄然と立ち尽くしていた。冷静に事態を把握しようと努めるけれど、事態の険悪さに元から楽天家のカイトは苦虫を噛み潰したようである。だって、こんな事態。

正直、面倒くさい。

いやいや、ちよつとばかり面倒くさいけれど、大事な片割れが困っているのだからやっぱりそれは、救い出さなければならぬのが道理というものであって。

そもそも原因は自分にあるのだから。

でも、ユウが困っている様にはカイトには見えなくもないのだが、原因を作ったのにそれを知らん振りするわけにはいけないのである。

カイトは人で溢れ返る映画館のフロアを縫うように歩きながら、ユウ達の近くまで行き、足を止めた。

周りの空気の色までも変えて仕舞ったのではないかというオーラ。余りの険悪なムードに入り込むのをついついしり込みしてしまう。

こんな風になるなんて、まったく予想だにしていなかった。

ただ単に、映画ならユウと見たいと思っただけなのに。

渡り廊下でユウを見掛けたあの時、不覚にもしてしまった約束。流石に反故する訳にも行かず、後日しっかりと映画の約束をマリにさせられてしまった。大人しく、マリと二人で来ていればこんな事態にはならなかったというのに、どうしてもカイトはユウを誘いたかった。

理由なんて見当たらないけれど、どうしてもユウと一緒に良かったのだ。むしろ、マリが居なくても。理由なんて、特にない。ユウと一緒に良かっただけ。

それでも、ユウに嫌な思いをさせてしまったのだから。いつでも笑って欲しいと思っているのに、苦痛の顔をさせてしまったのだから、自分がなんとかしなければ。

「お待たせ」

何事もなかった様に、けれども威圧感を込めて。

カイトの声に弾かれたように両者が声の主を見上げた。ここで第二ラウンド終了である。どうやら勝敗はつかなかった様で、ユウは綺麗な顔をふて腐れた様に歪め、これまたマリは不自然な位に明るい笑顔をカイトに見せる。

女って恐ろしい――

改めてカイトの背筋を冷たい何かが伝う。あれだけ激しい口論をしていたのに、今は底抜けに明るい笑顔を瞬時に引き出せるなんて、女は女優と言うけれどあれは本当だと思う。カイトは平然を装いながらもマリの本性をしっかりと確認した。

「それじゃ、そろそろ行こうか。もう中入れるみたいだし。ユウ、ホットの紅茶で良かった？ シロップいっぱい入れてきちゃったけど」

にっこり笑って、カイトは座ってるユウの手を引いて立ち上がらせる。繋いだ手が冷たくて、カイトの中をちくりと痛いものが走る。手が冷たくなるほど嫌な思いをしたのかもしれないと思うと、何故

だかその手を引き寄せて抱きしめたい衝動に駆られた。慌ててそんな邪心を振り払う。ユウは双子の姉だし、とても大事な存在だから、今の感情は気のせいだ。

自分自身に言い聞かせるのは、大分前からこんな気のせいや気の迷いや勘違いが多い様な気もするから。

だって本当の気持ちを認めてしまえば、ユウの全てが欲しくなるに決まっているから。幸せを取り上げて、茨の棘だらけの道を一緒に歩かせるなんて、そんな酷な事出来やしない。いつでも笑って欲しいと望んだのはカイト自身の希だから。

「マリは、ウーロン茶でいいんだよね？ 寒いからホットにしたけど」

「ありがとうございます、嬉しい！」

ユウを背中に隠す様な立ち位置で、カイトはマリの方へ向き直った。マリはあんな裏があるとは思えない華やかな笑顔で小さく頭を下げた。そんなマリに向けて、カイトも至上の笑みを返す。もちろんその瞳の奥はほんの少しの暖かさも籠っていない、冷たい瞳。

「それと、あんまり家の苛めないでくれると嬉しいんだけどな？」

ユウには聞こえないように、カイトはこっそりマリに釘を刺す。冷たい瞳に冷たい声、笑っているのは顔だけでそれは十分に効果を発揮する筈だから。

自分が原因を作ったのは重々承知。それでも、こっそりお仕置きするくらいなら神様もきつと許してくれる筈。だってそれは、大事な大事なユウの為だから――

＜14＞こんな結果（後書き）

いつも読んでくれてる皆様、そして初めて読んでくれた皆様。お付き合い頂きありがとうございます！

更新ペースが大分遅くなりがちですが（汗）出来るだけ早くUP出来る様努力しますので、気長にお付き合い頂けたら嬉しい限りです！ご指摘やコメント、感想評価ございましたら宜しくお願いしますね。それでは、また次話で！

<15>許せる範囲

真っ暗な暗闇の中で、目の前に広がる大きなスクリーンに、大音響で迫り来る迫力の音。

だけど意識がそれらに集中できない原因と理由は、自分の腰掛ける座席の隣とまたその隣だったりする。一個飛ばして隣の要注意人物——マリ。映画が始まって、もう半分くらいまでストーリーは進み、話は大分盛り上がりを見せているというのに、ユウはマリとの小一時間前の遣り取りに囚われて映画なんて右から左へ素通りで。それはまた、聴覚だけではなく、それらを捕らえる視覚ですら何の機能も果たさなかった。

それほどまでに、不愉快でそしてショックは大きかった。

だって、こんな子今までに見た事ない。

それまで、ユウの周りを取り囲む環境や友人たちに恵まれていただけと言ってしまうえば、それまでなのだが。

正直、衝撃が大き過ぎた。

そして、隣に座るもつと心を掻き乱す存在——カイト。何で、マリとの約束にユウを連れて来たのかも、それを黙っていたのかも、疑問符が飛び交うばかりで、ちっとも冷静になれない頭じゃなにも思い付かないけれど。

でも、悪気があってもなくても、何だか辛い。辛くて辛くて、心臓は潰されそうだし、頭は靄が掛かった様だし、スクリーンを映し出す瞳は霞んでよく見えないし。

もう、最悪。

鼻の奥がツンとする。溢れるのが涙なんて絶対に認めたくないのに。

具体的にどれが嫌で、何が嫌なのかももうよく分からなくて、そんなもどかしい気分が余計に拍車を掛ける。混乱した頭で、それでも思うのはカイトは絶対に渡したくないという事実。ユウは映画のスクリーンをキツと見据え、膝の上で拳を握り締めた。カイトの行動にも腹が立つけれど、それでもカイトの事を許せてしまうのは同じ血が濃く通う双子だから。

だから、そういう事にして、許してしまおう。

このまま縛れ縛れ喧嘩になるなんて、まっぴら。許してしまえる理由が他にあるなんて具体的に気付いてしまう前に、この血の所為にしてしまおう。

霞んだ涙を堪える為に、ユウは何度も瞬きをした。

だから、カイトは許せる。

そんな理屈は誰も通らないって反対したって、自分とカイトの中では正論だから。それでいい。どんなに悔しくっても、悲しくっても、カイトを嫌いになったり恨んだりなんてユウにはとても出来ないのだから。

納得出来ない事も多いけれど、自分がそうするしか出来ないのだから、それはカイトの所為ではないから仕方がない。けれども、マリだけは許せない。目上に対する無礼な態度とかじゃなくて、あのカイトを欲しがる剥き出しの感情。それを上手く操る狡賢さ。

ああ、本当にいや！

考えれば、考えるほどじつとなんかしていられなくて、今すぐにも隣に座るカイトを引っ張って帰ってしまいたい衝動をユウはグッと我慢する。今更だけど、大人な態度で相手を撃沈させたいし、余裕のない姉だなんて思われたくないから。後々、不利になる様な行動は慎まなければ。マリになんか、カイトは絶対に渡さない。

そう、固く心に誓う。

隣のカイトをこっそり見上げれば、その瞳は真剣に映画のスクリーンに見入っている。本当は二人っきりで来たかったのにな、とユウはまた不覚にも涙ぐみそうになってこっそり浮んだ雫を拳で拭いた。

このまま映画に見入って欲しいと思う。その優しい瞳が、自分を捉えてしまったら、堪えられる涙も堪えられなくなってしまいうから。

だから、何も見ないで。

その優しい瞳で、マリなんか見ないで。きっと胸の深い深い処に隠した嫉妬心が隠しきれなくなってしまうから。

まだ、このままで居させて――

何時の間にか進んだ映画は、ラストシーンを迎えようとしていた。

<16>譲れない事

気が付いた時には、もう映画は最後のエンディング曲が流れていて、気が早い人達が最後まで見ず暗い中を帰って行く。最後までエンディング曲を聞かない人達と、そこにいてスクリーンはジッと眺めてはいるけど、何も頭に入って来ないのだったら、さっさと帰るのと同じ事だな。なんて、ぼんやりと考える。

本当は、そんな事考えてる場合じゃないのに。

ユウはぼんやりと自分の中を分析するけれど、それでもやっぱり現状を意識して捉えても思考能力を欠いた頭で考えられる事は、そんな事しかなくて、小さく溜め息を吐く。

この映画が完璧に終わって、暗かった場内が明るくなって、そしてたら一体どんな時間が待ち受けているのだろうか。

出来るだけカイトの傍にいて、マリの言動を見張らなければと思うけど、それに伴う精神的労力を考えるとそれだけでぞっとした。

感動的なエンディング曲が終わったら……、等と考えているそばから隣のカイトが肘掛に乗せた肘でユウの腕を小さく二度突付く。

そして、内緒話をする様に形の良い唇をユウの耳に寄せ、

「これ終わったら帰ろう」

にっこりと微笑む。暗がりでも、良く見えないのが残念だったけれども。

だけど、そんな事より何よりもこの後このまま帰れるという事にユウはびっくりして拍子抜けした。わざわざマリと約束して映画をカイトは見に来たらしいと言うのに、終わったらこのまま帰るなんてユウは全く想像していなかったから。

そしてそういえば、映画館に来てから今日の出来事や話が「らし

い」と言う憶測や推測ばかりで本当の事はカイトの口から何も聞いていない事に気が付いた。

「帰りに、どっか行きたい」

だから、きちんと話を聞こう。少し口先を尖らせてユウはカイトを見ずに言う。

「二人っきりでね」

そんな仕草が可愛らしくて、カイトは思わず言ってしまった。

「先輩！ もう帰っちゃうんですか？ あたし、美味しいパスタのお店知ってるんで行きましょよ！ ね、ユウ先輩も一緒に！」

どの口が言うんだ。とは、ユウの心内である。この豹変振りが何と恐ろしい事か、媚びた声音が耳障りで、正直不愉快で堪らない。

「ごめんね、マリちゃん。あたしパスタって苦手なの。また今度違うものを食べに行こうね。今日はこれから家の用事があるから、帰らなくっちゃ」

不愉快な気持ちはとびっきりの最上級の笑顔で隠して、ユウはマリに対抗すべく全精力を使って応対する。帰らなくっちゃ、の処で敢えてカイトの顔を見たりして。でも、そんな仲睦ましい様子がマリの対抗心を刺激するって事に気付いていないユウはやっぱりまだまだカイトの庇護が必要だったりするから、カイトはユウから目が離せなかったりするのだ。

「じゃあ、パスタは止めましょ。ユウ先輩は用事があるならカイト先輩だけでいいですよ。先輩は何が食べたいですか？」

「マリちゃん？ 話聞いてた？ 家の用事があるの。家って事はカイトもって事なんだけど」

「そうなんですか？ カイト先輩も？」

なんて手強い。あっさりと、言いやがった。「カイト先輩だけでいい」って。

聞き逃す訳もなく、頬がひくりと引き上がってしまうのをユウは止められなくて、少し小馬鹿にした様な口調も隠し通す事が出来なかった。それなのに、マリはいつまでもかわいい子ぶりっ子で、敵の戦略は乱れる事がない。女同士の戦いは、恋愛の駆け引きより難しいのでは無かろうか、と思うのはそんな遣り取りを見ているカイト。

「まあ、そういう事だからさ。飯はまた日を改めてにしようぜ？」

取り敢えず、この場をまとめたくてカイトが締める。こんな冷や汗たっぷりの昼ドラみたいな遣り取りは心臓に悪いから、テレビの中だけにして貰いたいと思う。

もちろん、こうなった原因は自分なんだけれども。

「分かりました……また、次回。カイト先輩約束ですよ？」

しゅんとした表情で、それでもマリは確りと次回の約束を取り付けるべくカイトを上目使いで見上げた。約束の中に、ユウが入れないようにカイトしか見ていない。

「うん。次は飯ね」

本気か適当か分からないような返事をして、カイトは「じゃあ」と手を振って踵を返した。ユウも慌てて置いて行かれないように後を追った。

大きな背中。

今まではカイトの事なら何でも分かつてる気がしていたのに。最近のカイトは良く分からない。いつも見続けていた背中は何時の間にか変わってしまったのだろうかと思うと、胸の奥ら辺がギスギスと痛い。

本当に、食事に次回は行くのだろうか。次回はマリと二人つきりで？

聞きたいけど、自分がそれをカイトに聞く理由とカイトがそれに答える筋合いが見付けられなくてユウは黙ってその背中を追う。

駐輪場に差し掛かる曲がり角で、ユウは映画館の入り口を振り返った。

そして、そこにマリがもう居なくて少しほっとした。

あの子にはカイトを渡したくはないのだけれど、きっとカイトを思う気持ちは真剣で純粋な思いなのだろうと思うから、少し冷静になつてくると、悪い事をしたかなと思う。それでも譲れないものがあるから、良心が痛むのも仕方がない。兎に角、其処にマリが居なくて良かった。泣いてなんかいたら決心が鈍ってしまうんじゃないかと不安になってしまいたいそうで。

人の気持ちを拒むというのは勇気がある事だと思う。当事者に関係がなければ尚更だ。それは間違いなくその相手を傷つける事になるのが分かり切っているから。

ユウは気持ちを振り払う様に、映画館から視線を逸らし、もう一度カイトの背中を見た。

それでも、人には譲れない事があるから――
傷つけても、傷ついても、渡したくない人だから。

<17>君を想う黄昏時

冬の日暮れは恐ろしく早い。夕方になれば、あっという間に明るかったお日様は傾き始め、気が付けば山の向こうに沈んでしまう。秋の夕焼けは綺麗なのに、空気が冷たくなったこの季節の夕暮れはなんだか物凄く物悲しい気持ちになってしまう。

身も寒ければ、心まで寒くなってしまふ冬。人肌恋しくなってしまう要素があるのは、冬の寒さだけじゃなくて色んな処に潜んでいるのではないかとユウは思う。冷たくなった手を誰かが温めてくれたら、それだけで心も温かくなる、そんな瞬間に実は寒かったのは手だけじゃなかったと言う事に気が付いたり。

そんな存在がいれば、寒い冬も暖かく過ごせると思う。その相手にカイトは誰を選ぶのだろう？

「ユウ？ 寒くない？」

「寒いけど、平気。でも、平気じゃない」

平気じゃないのは、心の方だけれど。

映画館に向かう行ききの自転車は、幸せの振動を運んで来たのに、帰りの振動はユウの心の鏡のようで、ガタガタとただの振動しか伝えない。

久々にぐったりとした倦怠感を伴って疲れたと体が訴えている。小さくほうっと息を吐くと、白い息が夕暮れに消えていった。

「これ、しとけよ。もう少しだからこれで我慢して」

前から放られたのはカイトがしていた白いマフラーだった。落さないように受け取りながら、自分の首に巻きつけてそこに顔を埋めると、カイトの香りに包まれてささくれ立った気持ちが少し楽にな

った。

世界で一番鎮静効果がある匂い、それでもって幸せな気持ちも運んでくる。双子って、こんなに精神依存するものなのだろうか、考えるけれどそれ以上先は頭が考える事を拒否してしまう。

もやもやした気持ちは夕焼けにくれてやって、ユウは自分が被っていたニット帽をカイトの頭に勢い良く無理やり被せた。驚いたカイトが自転車のバランスを崩してよろける。

「危ない、ユウ！ てゆうか、帽子取ったら意味ないじゃん！ 自分で被っとけて」

「いい。カイトに貸してあげる」

背中に当てられた手が感触的な事じゃなく擦ったくて、与えられた帽子の暖かさに思わず笑みが零れてしまう。後ろにいる、姉に謝らなければならない事がある。こんな優しさに浮き立ってる場合じゃない心を叱咤して、緩んだ表情を引き締めた。

「今日はごめん」

後ろは見ずに、ただ真っ直ぐ前を向いて告げた。

たった一言だけど、本当に申し訳ないと、気持ちは十分に声音に籠っている。今、ユウはどんな顔をしているのだろう。

少しだけ、ユウの顔が見えない事にカイトは安堵する。辛苦に歪んだ顔をしていたら、自分が抑えられなくなりそうで。怖かった。

少しの沈黙の後に、背中に添えられた手に力が籠る。

「あたしは、何にも知らなかった」

「うん。ごめん」

「あの子と約束してたのに……」

「うん」

「どうして……」

ユウの疑問には全て答えるつもりでいたから、カイトは言い訳はしないと決めていた。

——どうして、の後に言葉が続かないユウの言いたい事が分かるから、カイトは正直に伝えた。

「ほんととはユウと映画が見たかったから」

「……それって、あの子と何の関係もないじゃない？」

「そう、何も関係ねえな」

「だったらどうして、映画に行く約束なんかしたの？」

そこでカイトはグツと詰まる。全て答えるつもりでいたのは嘘じゃない。でも、そうなった因果を話せば芋蔓式に、渡り廊下でユウとサクを見ていた事も話さなければいけなくなってしまふ。その後、ユウを探したことも、泣いていた原因がサクとの遣り取りにあるんだろうなと勘付いていた事も、何も知らないユウが気付いてしまふ。

あの時ユウは、泣いてる理由を言わなかった。それは、話したくないからと言うのは明らかで、そうなった因果の一端をカイトが何となくでも知っていたらそれは本意だと思う。泣いていた理由が知りたくないと言えば嘘になるが、あの時ちゃんと約束をしたのだから。言いたくなったら言うって。

どうしても、その約束を尊重したいから。

「毎日、教室まで押し掛けられて。あんまり毎日で断り切れなかった」

「……毎日って……」

「うん、毎日。休憩時間や昼休みや放課後や。あんまり押しが強すぎてそのまま押し切られた」

カイトは眉間に皺を寄せ、自転車をゆっくり漕ぐ。緩やかな上り坂に差し掛かり漕ぐ足に力を入れた。

毎日マリが押し掛けて来ていたのは、嘘ではなかった。ただ、少し始めの切っ掛けを省いただけ。だから、嘘ではない。これ以上無駄にユウに嫌な思いをさせたくないかったから、この際隠し事の一つや二つは見逃して欲しい。

「うん……分かった。何だか、腑に落ちない点がある様な気がするけど、それで納得しとく。でも、あの子も一緒だったなら始めに言ってくれば良かったのに！」

「ほんとごめん。言ったらユウ来ないかと思って」

長い息を吐き出して、少し声音の大きくなったユウの一言にホッとす。嘘は言っていないけれど、隠したい事実がそこにあったから。黙ってる事があって、少し後ろめたいのは否めないけれども、ユウと一緒に映画を見たかったのは紛れも無い事実だし、マリに執拗に迫られて押し切られたのも紛れも無い事実だ。

今回の事に関しては全てに置いて自分に非があるから、それ位は耐えなければ。

背中に添えられた手が暖かくて、先程まで籠っていた力が抜けている事にカイトの心は一杯になる。何時の間にかとっぷりと暮れた夕闇に、声にならない声でもう一度ごめんと呟いた。

<18>君を想う夜

——ほんとユウと映画が見たかったから。

と言われて、沈んでいた心が一気に舞い上がった。

——あんまり押しが強すぎてそのまま押し切られた。

と聞いて、心の底から安堵した。

自分で思っていた程、事態はそんなに深刻ではなかった事をユウは知って漸く一安心。やっぱり、「らしい」の魔力に囚われてしまったのが一番の原因だったのではないだろうか。

ユウとカイトは違うクラスだから、マリが通い詰めていたのかは分からないけれど、正直あの子なら有り得る話だと納得出来る。それに、カイトが嘘を吐くとは思えない。

約束した挙句ユウを誘った理由との辻褄はまったく合わないけれど、自分が思っていた事と同じ事をカイトが思ってくれていた事に舞い上がってしまった頭では、そんな矛盾や辻褄はどうでも良くなってしまった。カイトと映画に行きたいと思っていたのは、自分だったのに。まさかカイトも思っていたなんて、正直驚きで疑問でもある。

それにマリが無理やり誘ったのだったら、カイトはマリの事を今はこれっぽっちも何とも思っていないのだろう。もうそれが分かっただけで満足だというのに。

たった一言で、冷えた心も身体も熱を発しそうな勢いで温まってしまう。カイトの言動全てに翻弄されて、上がったり下がったのテンションは保つのが難し過ぎる。今日一日で何回アップ・ダウンしたのかと、諦めに似た溜め息をユウは吐いた。

「ごめんな、ユウ？」

思案して黙り込んだユウがまだ怒っていると思ったのか、前からカイトの困った不安色を含んだ声がした。

カイトが漕ぐ自転車は、緩やかな上り坂から唯の坂に変わって進むスピードが大分遅くなっていた。その上、ユウを乗せているものだから少し息も上がっているかもしれない。ユウはそっと自転車から降りてカイトの隣に並んだ。

「もう、いいよ。そういう事なんですよ？」

そんな優しい目で見上げてくるから、カイトは一層申し訳なくって胸が鷲掴みにされる思いでこくと頷いた。

そこからは自転車を二人で黙って押して、坂の上まで歩く。お互い思う処があるのだろうし、嫌な沈黙ではなかったからユウもそのまま押し黙って坂を上る。初めて通る道で何処に繋がっているのか分からず、カイトが何処に行こうとしているのか少し楽しみだったりする。

周囲は鬱蒼と生い茂る木々に囲まれているから坂の天辺は公園とかな、と想像してみるのも楽しかったりして。つい先程まで、考える事を放棄していたのと同じ頭とは思えない程フル回転。

カイトの一举一動でユウの心を生かすも殺すも自由な辺り、相当きてる。そろそろ依存だけで片付けられなくなりそうで正直自分が怖い。

「怖い……」

「え？ 何が？」

ぽつりと呟いた一言は、自分の事から連想し不意に認知した周囲の事。よくよく見てみれば、とっぷり暮れたお日様の替わりに少し頼りないお月様が周囲をほんのり照らしてはいるけれど、それだけ

では灯りが足りなくて鬱蒼と聳える木々が不気味に見える。

「何か、この道不気味じゃない？」

「そう？　でも後少しで着くから大丈夫だよ。帰りは下り坂だから、びゅんと降れちゃうし！」

「カイトって楽天家だから、こういう不安ってないんだろうね……」
「何だよ、それ」

姉の一言に拗ねてみたり。

何だかんだとしている中に、気が付けば天辺だ。

「ここに、自転車置いてくの？」

「そう、ここからは歩いて直ぐだから」

大きな公園が目の前に広がる。木製のベンチが点々と設置されたその公園は仄かな街灯と月明かりに照らされ静寂の中でも、自然と怖さはなかった。

先を歩くカイトの背中に着いて行く。そんなに進む事無くその目的地には着いた。

「ほら、ここ！」

公園の周りに張り巡らされた背の低い木製の柵を跨ぎ、目の前に広がる光景を目にし声にならない声で感嘆した。

「……！」

公園は小高い丘になっていた様で、ユウの目前に広がるのは街の夜景。街に灯る一つ一つの明かりがきらきらと揺れていて、とても幻想的。色んな色の灯りが冷え渡った空気の中澄んでとても綺麗だ

った。

だけでも、一番感動したのはそれだけじゃなく。

「凄い……！ クリスマスツリーみたい！」

夜景の前に、自分たちの前に一本の大きな木。もみの木ではもちろんないのだけれど、葉と葉の間から夜景の灯りが零れ見えていて、とても大きなクリスマスツリーの様で綺麗。

葉の間からきらきら揺れる灯りが、不思議でとても幻想的だった。赤、黄、青、緑――

息をするのも忘れそうな景物。

自然と文明の織り成す美の饗宴に感動して胸が詰まった。

隣のカイトを思わず見上げると、そこに優しい双眸がユウを見下ろしていた。

「ね？ 綺麗でしょ？ 怖いけどあの坂登って良かったって思えるでしょ」

「うん！ 凄い綺麗。こんなの見たことないよ……」

ユウはほうっと小さく息を吐く。目の前の光景は余りに綺麗で、壮大な感じで今日一日自分が悩んでいた事が余りにちっぽけで笑えてくる。この瞬間をカイトと一緒にいられる事がこの上なく幸せだ。

そして、感動するユウの表情をみてカイトは優しく微笑む。夜景の灯りがユウの瞳に反射して、きらきらと輝く。自然のクリスマスツリー以上に綺麗だと思った。

ここを見つけた時、真っ先にユウを連れて来ようと思ったのは他の誰よりも真っ先にユウの顔が浮んだから。

「クリスマスまで、もう後少しあるけど」

「クリスマスの日、晴れるかな？」

「晴れるといいな」

「そしたら、またここに来たい！」

「雨が降らなかったらね」

ユウが喜ぶのなら、何度だってここへ連れてくるし、何処へだって行く。

ユウが喜んでくれれば、カイトだってこの上なく嬉しいのだから。思わず獲得出来たクリスマスの予定。ユウがまだ特定の誰かと予定を入れてなかった事にホッとし、その隣を今年も自分が確保できた事を神様に感謝。

聖なる夜に、ここに来れる様に。

聖なる夜に、一緒にいられますように。

——帰ったらテルテル坊主を作ろう。

<19> 舞い降りる疑惑

朝から寒い寒いと思っていたら、案の定乾いた街に白雪が舞った。白い粉を分厚い雲が惜しみなく舞い散らす。

風はあんまり強くはなかったから吹き付ける雪ではなく、それはほんとに深々と降り積もる雪で心温まる柔らかい雪。

こんなに深々と降り積もる雪は久しぶりで、手足は凍える様に冷たくなっているのにも関わらず、心が躍ってなんだか妙にそわそわしているのはカイト。

「な、マユ！ 雪だるま作りたい！！」

親友の年甲斐もない発言にマユは奇異の目を向けた。

そんな視線を物ともせず、カイトは窓にべったりと張り付いてはしゃいでいる。まるで大きな子供の様で。

「マユ！ あたしも作りたい！！」

しかも、意気投合なんかしちゃって、この双子。こんなところで意思疎通しなくてもマユは肩を落す。こんな寒い中、わざわざ校庭まで出る気にはなれず雪だるまとはしゃぐ双子の背中を見送った。

それが、ほんの少し前の話。

「あの？ ユウ先輩いらっしゃいますか？」

教室の入り口の、珍しい来客に思わずマユは首を傾げた。

一年生が上級生のクラスに訪ねて来るのは以外に珍しい上に、確かこの子はカイトの事が気に入っていると噂の、可愛い子だとマユ

は気付き更に疑問を深める。カイトに用ならまだしも、何故ユウ？
疑問符が頭上に飛び交ったまま首を傾げたマユは、

「ユウは校庭に行ったけど。何か用なら伝えようか？」

自席に掛けたまま問う。

それににっこりと笑み返し、マリは緩く頭を振った。

「大丈夫です。校庭ですね？ 行ってみます」

ふわふわの髪が揺れる。小さくお辞儀をして踵を返す様子は、女のマユから見ても十分に愛らしかった。突然の珍客の訪問と、ユウ宛てに來た理由が検討もつかずマユは秀麗な顔をぽかんとさせたまま教室の入り口を見ていた。

雪の降る放課後。

なんでみんな帰らないんだろうとマユは教室内を軽く見渡す。教室の彼方此方に数人クラスメイトが残っていて、帰り支度をしながら談笑しているようだ。そんな様子をぼんやり眺めてから、窓の外へ視線を移動。

眼下に広がる銀世界に、ユウとカイトの後姿を見つけた。背のバランスが釣り合わない二人の並んだ姿は逆にしっくりくる程に見慣れているから、簡単に見つけられる。掌に救った雪をお互いの背中に入れようとしてじゃれてる姿も小さい頃のままの様で微笑ましくって。思わず吹き出した処で視界が真っ暗に。

「どっち、見てるのかな？」

突然闇に覆い隠された視界は、確かに暖かい温もりを保っていたからそれは直ぐに掌だと分かる。ただ、質問の意味が理解出来ない。

「どういう意味ですか？ サク先輩」

今日はお客さんが多いな。小さく息を吐いてマユは視界を覆っていた掌に手を当て光を取り込んだ。振り向きざまに見上げた、サクの表情はおどけた様にも意味深にも取れて。ますます何だろう。

「マユちゃんが見ていたのはユウちゃんか、それともカイトかと。そーゆう事」

サクから返って来た返答は更に意味が分からない。マユの机に片手で体重を預けて、サクはマユから外の二人に視線を移した。

何だろう。今日は珍客が多い上に、訳が分からない事ばかりだ。

「あたしが見ていたのは幼馴染ですよ？」

「マユちゃん上手だね。俺はてっきりカイトかなと思ったんだけど？」

「どういう意味ですか？」

本日二度目の質問。意味が分からない上に、誘導尋問に掛けられている様で、何だかあんまりいい気がしない。それに、マユがユウを見ていようがカイトを見ていようがそれはサクにはどうでもいい事だと思うから。

それでも、サクの表情は意味深で少し挑戦的でもある様に感じられる。不敵な笑みの中で漆黒の瞳だけが笑ってなくて、言い様のない雰囲気だ。

「あの二人ってさ、自覚してるの？」

「何を？」

間がじれったい。

「惹かれてる事。だって、異常でしょ。依存で片付けてしまうにはさ」

そんな天変地異みたいな事、あっさり言わないで。

＜20＞降り積もるのは

真っ白に塗り替えられた校庭は、普段なら部活動に励む学生の声に溢れかえって賑わっているけれど、今日の校庭は深々と降り頻る白雪で白銀の世界に包まれている。

吐き出す呼吸がいつも以上に真っ白で。何て事でもないのに、妙に浮かれた気分でわざと息を吐き出してみたり。その白さに更に気分が高揚しはしゃいでしまうのは、隣にるのが一番安らげる相手だからなのか。

「ねーカイト！ こっちの雪綺麗だよー！ すっごい大きい雪だるまにしよう」

真綿の様な雪を踏締め、ユウは校庭の端の方へ走って行く。

ちよっと転ばないか心配になったりして、ヒヤヒヤしながら後に続く。だけどカイトも実は楽しくて仕方がなかったりする。こんな処はさすが双子で意気投合。

掌に載せた雪の塊を少しづつ大きくしていきながら、ユウは満面の笑み。

それが本当に微笑ましくて、心を弾る。

胸が締め付けられる様な、それでいて奥底から湧き上がる欲求。

いい加減にしてくれよ、これ。

都合の悪い感情には蓋をしたけれど、湧き出るものが途絶えなければそれはいずれ決壊してしまう事は分かってる。もう、この蓋もそろそろ限界が来てるんじゃないか。今にも決壊しそうな蓋に自信をなくし、カイトは柔らかい雪の上にばたんと力無げに倒れこんだ。見上げた上空は白い雲に覆われていて、惜しみなく白雪を振舞う。

まるでカイトの蓋が壊れてしまった様な空だった。

「雪空って、寝転がって見上げた事ってそういえばないねえ」

そう言ってユウはカイトに倣うべく、隣に寝転んだ。

「なんか、不思議な感じ」

「綺麗な眺めだけど、ずっとはきつい。顔の熱で雪が溶けてびしょびしょになる」

「あは、ほんとだ！ 顔洗ったみたい」

空から隣のカイトへ顔ごと向ける。そして、あまりの顔の近さにお互い少しびっくりし、妙な沈黙が生まれる。ユウの真っ直ぐな視線。噛合う視線を逸らそうにも、何故だか逸らせなくて、ますます妙な感じだ。逸らしたいのに、お互いの視線に絡み取られてお互いが逸らせないような。そんな感じ。逸らしたいのに、逸らしたくないとも思っているような。

姉弟で、この絡み合いはおかしいだろ！

心臓が必要以上の血液を送り出し、そろそろ限界。カイトは自身に突っ込みを入れる事で漸く我に返った。あわてて逸らした顔は、濡れた頬の雪が蒸発してしまいそう。

「雪……！ 雪だるま！ 作ろう」

「そ、そうだね！！」

ぎこちない会話に、今度は合わせられない視線。何もかもが自然なお互いが意識し過ぎているからで。でも、お互いにそんな核心に触れる事も気付かない振りをするのもこの関係と安全なポジションを守る為。

少なからずとも、もうカイトはこの気持ちを自覚しているから。

他の人よりもフェアじゃない関係だから。ユウの気持ちを優先にするなら、この気持ちは伝えられないのも分かっているのに、頭では分かっているでも本能は思うように働いてはくれなくて、いつか抑え切れなくなるんじゃないかと、ここ最近はハラハラと葛藤の日々が続いているっていうのに。

——それなのに、無邪気に視線なんか絡めるなよな。

深い溜め息を吐いて、手にした雪の塊を自分の頬に押し付けた。上気した頬に、雪が音をたてた様な気がした。見上げた空は、先程とも寸分変わらぬ様子で、壊れた蓋から溢れた想いを地上にこれでもかという程降らせているから、何だか切ない。

「お前はいいよ。勝手に降って勝手に溶けるから——」

溢れて、溢れても、ここに在るのは溶けない気持ち。

底を尽きる様子も見せない、無限に広がる気持ち。

誰にともなく呟いた言葉は白雪に絡め取られ、そこに哀切だけが残った。

<21>お互いの感情

何それ、何それ、何それ。

一目、見た瞬間に誤認識してしまいそうな関係というのはどういう事なのだろう。二人は双子の姉弟であって、恋人ではないはず。と、言うより、それは有り得ないのだから。

それなのに、白いきらきらと輝く雪の中で、寝そべって視線を絡めて見詰め合う様は、恋人——想い合う男女にそれにしか見えなくて、マリは絶句する。

ユウに会いに来て、それでカイトが好きな事を話して、認めて貰おうと思って、わざわざ寒い中ユウを探して校庭まで来たのに。何だが見せ付けられた様な不快な気分。

この間は少し遣り過ぎた感が否めなくもなかったから、少し反省して謝ろうかと思ったのに、姉弟二人であんな雰囲気醸し出して見詰め合ったりして。わざわざ足を運んでそれを見せ付けられて、こっちが馬鹿みたいだとマリは嘆息した。

少し遠巻きに、マリは二人の様子を観察する。

今度は、あんなに見詰め合っていたのに、視線を交わす事無く何かの作業を始めた二人は、不自然を絵に描いたよう。

その様子に、マリの脳内で鳴っていた小さい警報が徐々に大きくなっていく。だって、そんなの無いと思う。カイトとユウは姉弟でしかも双子だ。家族としての好きなら分かるけど、今の二人はその家族愛だけでは片付けられない程の恋情を滲ませていたように感じられた。

この前のユウがムキになったのは、何故だろうと思う。

もし、ユウの感情がカイトに向かっていたとしたら、それで全ての辻褄は合うのではないか。

「……そんなのって、有り得ない」

啞然として呟いた吐息は白い世界に溶け込んでいった。

先にその存在に気が付いたのは、ゆっくりとした動作で振り向いたカイト。

鋭い眼光を向けられて、一瞬動く事が出来なかったのは、もしかしてカイトも同じ気持ちをユウに抱いているのかと思ってしまうから。息を吞む。

だけど、邪魔をするなと言う様に鋭かった眼光は、ほんの一瞬で緩まりいつものカイトに戻ったのだけど、マリの中で生まれた疑心は、目の当たりにした局面が焼きついていて晴れはしなかった。

「どうしたの？」

カイトの声にユウが振り向く。その瞳に落胆と拒絶の色が浮んだ気がして。

「ユウ先輩に用があって」

ユウの瞳の色に怯まない声音で告げなければ。

「え？ あたし？」

ユウは手にした雪の塊をぽとりと落した事にも気付かない程、驚いた様子で。

どんな事実がそこに在るのか確かめたくて。カイトを想うこの気持ちも簡単には諦められないから。マリはユウの事を真っ直ぐに見

据えた。それが事実なら、そんな不純は間違っているのだから、ユウにはカイトを渡したくない。

「少しだけ、ユウ先輩お借りしますね」

マリはカイトに向かってお辞儀をし、そのままユウに向き直した。

「お時間は取らせませんから。ユウ先輩いいですか？」

「……あ、うん」

気まずい空気が垂れ込めたその場を、ユウと二人。ますます重い空気を連れ立って離れた。

外は寒いからと、一旦校舎の中に戻って、それでも人の多い所は避けたかったから、結局昇降口。

お互いに張り詰めた緊張感。冷たくなった手を片方の手で擦りながら、まず先に言を発したのはユウだった。

「用って、何？」

相手の出方を探る様な声音。

「あたし、カイト先輩が好きです」

だから、ユウから目を逸らさず、気持ちを超えないという位に込めて伝える。

ほら、やっぱり。

と思って仕舞うほどに、ユウの表情は落胆と激しい激情が交差す

る。マリが言わなくてもユウは知っていた筈で。それでも、この反応って事はマリの一抹の懸念は的中してしまっていたのかもしれない。

「知ってる」

一定の間の後にユウは重々しい表情と声音で吐き捨てた。

「それ、伝えたくて。本気だから、認めて欲しかったんです。それと、ユウ先輩に確かめたい事も」

今度はマリがユウの出方を窺う番。少し上目遣いになる。意見を決して発した言葉は、

「ユウ先輩。カイト先輩の事、どう思っているんですか？」

＜21＞お互いの感情（後書き）

いつも読んでくれてる皆様、そして初めて読んでくれた皆様。お付き合い頂きありがとうございます！

一話毎が短くてすみません（汗）それでも精一杯努力しますので、気長にお付き合い頂けたら嬉しい限りです！

ご指摘やコメント、感想評価ございましたら宜しく願いますね。励みにします！それでは、また次話で！

<22>交差する思い色

鳩が豆鉄砲を食ったようという表現は、まさにこういう状況の事を言うのだろうな。

と、マユは大きな目をぱちくりとさせたまま、そんな事を思う。だから、暫くサクの顔から視線を逸らす事が出来ず凝視していた。サクがマユに言った一言は頭を真っ白にして、思考力を奪ってしまいう程威力は絶大で、瞬きをするのも忘れてしまう。

「もう一度言おうか？」

「や、もういいです」

あまりの沈黙の長さに、止まってしまった時間をサクが動かす。その申し出を片手を突き出して、マユは制止する。

カイトがユウを好きで、ユウがカイトを好き。

別に至って問題ないではないか。なぜなら、二人は家族だから。じゃあ、こんなにも言葉に詰まってしまいう原因はもちろんサクの言う恋愛感情をそれに当てはめて考えているからである。

家族愛ではなく、恋愛感情となれば、その想いの種類や質は大幅に違うし、簡単に受け止められるものではなくてしまう。

幼い頃からの二人を知っているから尚更戸惑いも一層大きい。仲睦まじい二人だったけど、いつからかその想いは家族愛から発展してしまっただろうか。過度な親密さは双子の特権であり、激しい依存だって家族愛から来ているものならおかしくない。

そう、今までは思っていたのだけだ。

だけどサクの言う様に恋愛感情にもそれは当てはまってしまいうし、なんだかその方がしっくり来てしまいうから。

だから、紡ぐ言葉が喉につかえて出て来ない。

ユウが好きなのはカイトで、カイトが好きなのはユウ？

「はじめは気のせいかとも思っただけだな。だって一般的に道徳的にも間違ってるし、そんなの。だけどユウちゃんがカイトを見てる目は、ただの家族愛にしては切なすぎるし、カイトだって不自然。そしたら、やっぱりそうなんだろうな……と」

サクの視線の先には、雪の降り積もる校庭。その瞳でユウとカイトを見ているのだろうか。その瞳に含まれる哀切に、なんだかマユまで切なくなってしまうそうで、慌ててサクから視線を逸らす。

「……でも、二人は姉弟なんだし」

「姉弟だから、それはない。って、言い切れると思う？ 普通に考えればあり得ないけれどな。じゃあ、二人がお互いの気持ちを認めて受け入れてしまったら？」

サクの射抜く様な挑戦的な眼差しに、マユの心臓が飛び上がる。そんな事になったら、どうすれば？

きっと幸せになんかなれっこない。周囲には奇異の目で見られ、不道德と罵られ、祝福なんて誰からもされないのは目に見えている。マユとしてはやっぱり幼馴染にはそんな思いはして欲しくないというのが本音。

「俺は認めない」

強い意志の籠った低い声。

いつもの陽気な口調はまったく垣間見る事の出来ない程、サクの真剣な声にマユは声を失う。

「俺は認めない」

自分の意志を奮い立たせるかの様で。

内に秘めたる想いは如何程だろうか。こんな事実が本当だったら、そう簡単には受け入れられないのに、自分の想い人が姉弟で想い合っているなんて。殊更、気持ちは複雑だろうなとマユは思う。

思うけれど、正直今は自分の考えを纏めるのに精一杯で、気の利いた事は言えそうになくて――

「じゃあ、俺行くわ。俺が本気だって事、ちゃんと分かってくれたデシヨ？」

最後に見せた笑みが少し弱々しくて、それでも十分に気持ちは伝わって来た。

小さく頷くと、サクはにこりとしそのまま教室を後にした。

残された教室に一人。静寂の中に自分の鼓動だけが響いている様で。

あまりの衝撃の大きさに、しばらくそこを動く事が出来なかった。

――本当の好きって、どんなだろう？

以前のユウの声が何処かから聞こえた様な気がした。

＜23＞交差する思い色

「ユウ先輩。カイト先輩の事どう思ってるんですか？」

その質問の意味を理解する前に、一瞬で頬が上気するのが分かった。思考より先に反応する身体は時として、心より正直だったりするから。

どう思っているんですか？

と、聞かれて何と答えればいいのかだろう。何て答えれば納得するのか。そして、何で上気する程に心が騒ぐのか。これじゃあ、誤魔化しが利かなくなってしまう。

そう思ってユウは自分の気持ちに呆氣に取られる。

誤魔化しって、何を誤魔化したいの？

「ユウ先輩？ やっぱりカイト先輩の事……」

「だ、大事な弟だと思ってるけど、それが何？」

頬を赤らめて、上擦って言う科白じゃないな、とユウは心中ひとりごちる。カイトの事になると、こんなにも自分をコントロール出来なくなってしまうのは、やっぱりそういう事なのかもしれない。マリの事が気に入らないのも、カイトの言動に翻弄されてしまうのも。

「本当に弟だと思ってます？ 本当に姉弟だけの気持ちだったら、あたしがカイト先輩と付き合っても問題ないですよね？」

下から目を光らせるマ리에ユウはきつく睨み返す。

この、人を試すような処が余計に癪に障るのだからマリは性質が

悪い。

「問題大有りだから!! 付き合う付き合わないは、カイトが決める事!! だけど、その前にあたしが認めた子じゃなきゃダメって決まってるんだから!」

「……は? 何言ってるんですか?」

「何って、今言った通りだけど!」

徐々にヒートアップしていきそうなやり取り。また、映画館の時の様になりそうな雰囲気が始めて、ユウは内心ひやひやする。

「なんでユウ先輩が、カイト先輩の付き合う人をはじめに選ぶ必要があるんですか? まったく意味が理解出来ない!」

「そんなのあなたには関係ないでしょ! あたしとカイトがそれで納得しているんだから、口出ししないでよ!」

「じゃあ、あたしを認めて下さい!!」

「何だよ!?!」

今にも跳び付いて来そうな勢いで食って掛かって来るマリに、負けじとユウも張り合う。

カイトとの約束と言っても本人が覚えているかどうかも分からないような曖昧な約束だけど、二人の約束をタテに少しでも有利になりたくて。それは立場も心の位置も。

こんな気持ちになるのはカイトだけだから、誰にも渡したくないって思ってしまうのも仕方ないから。

半ば開き直ってでもユウはマリに勝たなければならぬ。

「……分かりました。本当はやっぱりカイト先輩の事、好きなんですよね? 弟なのに!」

「……! そ、そんな事、一言も言っていないじゃない!! 勘違い

しないでよ!!」

こんなに赤面して、否定してもそれは肯定にしか見えなくて、ますます一層焦る。焦るからまた体温が上昇して赤面。結局、悪循環。

「信じられない！ 自分の弟にそんな感情抱くなんて!! 気持ち悪い!!」

気持ち悪い――

昇降口に響き渡るマリの声。

そんな事、言われなくたってちゃんと分かっているのに。他人に言われると、自分で思ってる以上にショックが大きいなんて。ただ、カイトが大事でそれだけなのに、そう思う事自体が醜態を晒しているかの様な言われ方。

上昇していた身体の前から急激に冷えが駆け上って来て、小刻みに手足を震わす。引き攣った頬が否定の言葉を発する事さえも拒む。

「なに……やってんの？」

突然背後から聞こえた声は、あまりにも知り尽くしていて、聞き間違えようにも、それすら許されない相手。

一気に、血の気が引いた。

どうしよう、今の聞かれた？

今までのマリとのやり取りが走馬灯の様に頭の中を駆け巡る。

振り向くより前に、先に足が出ていた。その場にいる事なんて出来ないし、壊れた水道の様に溢れ出した涙をマリにもカイトにも見

られなくて。

ユウは真相を確認する前にその場を駆け出していた。

＜24＞交差する思い色

全力疾走で校内を駆け抜けて息も絶え絶え。上がった呼気はこれでもかという程乱れて、溢れた涙は留まる事を知らない様。

もうどこをどう走って来たのかさっぱり覚えていないけれど、ユウはお氣に入りの渡り廊下にいた。

真っ白な雪が積もっている。雪が降る日に誰も雨晒しの渡り廊下を使用する筈もなく、まだ誰も踏み締めていない新雪の上をユウは覚束ない足取りで歩み出る。

寒さを感じないのも、呼気の息苦しさを感じないのも、会話が聞かれてしまったかもしれないという恐怖心がユウの五感のすべてを浚ってしまうから。

後ろから聞こえたカイトの声。

どんな声色だった？ ついさっきの出来事なのに、手繰り寄せた記憶は真っ白な雪の様で。何もユウに確かな情報は与えなかった。

「……気持ち、悪い……と思うよね……」

俯いて零れた言葉はますます自身を傷つけて、小刻みに身体が震えだすのは、けして寒さのせいだけではなくて。

押し寄せる不安に潰されそうになる。

カイトに拒絶される事を考えるだけで、頭がどうにかなりそうで、どんな顔して家に帰ればいいのかすら分からない。

こんな筈ではなかったのに。

カイトに合う子がいつか現れればその手を離す事が出来ると思っていた。寄り掛かる依存もそのうちなくなつて、ユウにも好きな人が出来て、普通の姉弟になれると心の中では思っていたのだ。それなのに、気が付けば頭の中はいつだってカイトで占められていて、依存では片付けられない程に気持ちは膨れ上がっていた。

それでも気付かないふりをして、気持ちを押し殺し、平気なふりをして来たのは簡単な事ではなかったのに。こんな気持ちはおかしいって分かっていたから認めることも出来ず、だから目一杯足掻いた。

こんな形で伝わってしまうのは不本意でやり切れない。

もういろんな感情がごちゃ混ぜになったまま、ユウは雪の中ただ呆然と立ち尽くしていた。

「また、そんな顔して、カイトの事？」

不意に聞こえて来た声は、前回もこの渡り廊下で聞いた声。俯いた顔を上げた先には、洪面のサクがいた。

「……なんで泣いてんの？」

一瞬弾かれた様な表情をしたサクは、窺うようにユウを覗き込む。

「……ほっというて下さい」

顔を背けてユウはか細い声で言う。語尾が震えていたのをサクが聞き逃すわけもなく、無性に哀切が込み上がる。

そのままユウの目の前までサクは歩み寄り、勢いに任せてユウの細い腕を掴んだ。

「泣くくらい辛いんだろ？ 何でカイトなんだよ。弟だからそんな思いしなくっちゃならないんだ。自分で分かってるんだろ？」

サクは言い含める様に掴んだユウの腕に力を込める。その力の強さにユウの顔が苦痛に歪む。

「前に言ったよな。俺はそんなのが理由じゃ納得出来ないって。そんなのおかしいだろ？ ユウちゃん、まったく幸せになれねーよ。何でカイトなの？ どうして俺じゃ駄目なんだよ、なんで血の繋がってるカイトなんだよ」

俯いていたユウはサクの言葉に視線を上げて、そこで真剣な視線とぶつかり狼狽える。

サクの言っている事は尤もであって、ユウだってそんな事は百も承知。だけど、気持ちは考えだけでコントロール出来るものではないから、サクの言葉に苛立ちを隠す事が出来なくて。

「なんでそんな事サク先輩に言われなきゃならないの？ あたしの気持ちなんて知らないくせに！」

思わず飛び出した言葉は思いの外大きな声で。

敬語なんてものは知らないかのように噛み付いた。ますます溢れた涙は情動に比例しているかの様で、悔しくて唇を噛み締めた。

「分かんねえよ。だけど、ユウちゃんだって俺の気持ち分かんねえだろ？ 好きな女が自分の弟を好きなんてな。どんな気持ちだと思うよ？」

冷たい挑戦的な黒い瞳に、一瞬呼吸を奪われる。サクの気持ちなんて、確かに今まで考えた事はなくてユウはハッとした。

全てを見透かす瞳に耐えられなくてユウは俯くしかなくて。

「こっち、見て。ちゃんと答えろよ」

外気に冷えたサクの手がユウの顎を捉える。顔を上げさせられ、そのほんの一瞬に何が起こったのか咄嗟には理解する事がユウには

出来なかった。

塞がれた唇に、目の前にあるサクの顔。その温もりに漸く事に気付く。

慌ててサクの胸を押し退けようと、掴まれている方の腕で押し返すけれど、逆に力強く抱き込まれまったく身動きが取れなくなってしまう。

きつく合わされた唇に羞恥と怒りで頬が上気する。

なんでこんな事をされなければならないのか分からなくて、ユウは合わさった唇から嗚咽を漏らした。

「カイトなんて止めとけよ。辛いだけだし、俺にしときなよ。カイトの事忘れる為でいいよ。ユウちゃん……」

人の気持ちも考えない事をして、勝手な事を言うくせに、その声音は驚くほど優しく哀切を含んでいて、頬を伝う涙を拭う手はもっと切なくて。怒るタイミングを逃してしまう。

だけどサクの気持ちを簡単に受け入れることは出来ないから。ユウはそっとサクの胸を押し退けた。

今度はすんなり離れて、だけど掴まれた腕だけは離れない。

「明後日、またここで待ってる。それまでに、ちゃんと考えて」

真剣な面持ちでサクは告げ、踵を返す。呆然としたユウを残し、校舎の中へ消えて行ってしまった。

「明後日……」

唇に残る感触に、無意識に指をあてて。

十二月二十五日が明後日だと言う事に気が付いた。

<25>嫉妬と焦燥

ひどく苛立った。正直ここまで苛立ったり、ダメージが大きいとは思ってもみなかったから。

人から楽天家だと言われる事はよくある事で、少なからずその自覚はあった。けれど、自分で思っていた以上に軽く考えていたんだと気付いた時には既に遅かった。

カイトは苛立ちを抑え切れず、足元に積もった雪を蹴り上げた。柔らかい粉雪は遠くまで飛ぶ事無く、きらきらと飛散する。

自分の心情とあまりにそぐわない雪の美しさにますます苛立つ。でも、ただの八つ当たりだとも理解していて。

ユウがマリと連れ立って目の前から姿を消して、直ぐに胸騒ぎを覚えて後を追った。

柔らかい雪を蹴る様に走って校舎に向かったのに、その何処にも二人の姿を見付けられず、慌てて反対の東校舎へ進路変更。まさか、三年生の棟にいるとは思わずユウ達を発見するのに手間取ってしまった。

やっと見付けたと思ったのに、なぜか走り去ったユウに呆気にとられたけれど、後ろ姿から逃げられた様にも感じられ、急に覚えた焦燥感。

近寄って来たマリが何かを言っていたようでもあったけど、カイトは全くそれを聞いてはいなかった。

マリが何かをユウに言った事だけは間違えないだろう。と、察してカイトはマリを無視してユウの後を追った。けれど、それが間違った選択だったのかもしれないと、カイトはざらりとした思いを抱く。

出来れば見たくなかったから。こんなにも自分が嫉妬深いと思っていなかったから、こんなにも辛いという事をはじめて思い知った。

ユウとサクのキスシーン。

思い出して、また、雪を蹴った。

こんな苦しいとは思ってもみなかった。心が引き裂かれそうな程。人が楽天家と評するだけあって、こういう事態は心の片隅にあった筈なのに、それを捉えて真剣に考えた事はなかったから。そんな自分にも腹が立つ。

「くそ……誰の許可得てキスしてんだよ、あのヤロー……」

俺の許可を取れ、と心中毒づきながらカイトは通学鞆を乱暴に雪の上に投げつける。

ポスっと、軽い音を立てて鞆は景色の一部となった。

具体的に目撃してしまうと、それはリアルなだけに心にくるものがあった。

「俺だって我慢してたのに……」

どれだけ耐えたと思っているのか。双子に産まれついてしまっただけに、想いを易々伝える事も出来ずに。一つの屋根の下で、それがどれだけ忍耐を強いられる事か。

悔しさに、唇を噛み締めた。

「ただいま」

珍しく無愛想な我が子に母カナコはきよとした顔を向ける。
「おかえり」と、様子を訝しみながらリビングの扉を開けた。

後に続いて部屋の中に入ったカイトは、中の暖かさに少し落ち着き、悴んだ手を擦った。そして、徐に天井を仰ぎ見て、

「ユウは？」

その声は少し焦っているようで、ますますカナコは小首を傾げる。また、喧嘩でもしたのかしら、なんてのほほんと思いつながら、カイトがソファの上に放り投げたコートをハンガーに掛けた。

「帰って来てすぐに自分の部屋に戻ったわよ？」

「……そ」

天井を見上げたまま静まり返った我が子を怪訝に思いつつも、カナコは薬缶に水を満たし、火をかけてお茶の準備を始めた。

暫し流れる沈黙。

暫らくすると、食器の音を立てながらカナコはカイトの前にトレイに載ったティーカップを二つ運んで来て、

「ほら、これ持って早く謝って来ちゃいなさい」

にっこり笑う。

喧嘩したと勘違いされたか、と天然の母に苦い笑みを返し、カイトは素直にトレイを受け取って。そして、ティーカップに視線を落とす。

そこにはいつもユウが飲んでいる甘い香りのする紅茶。お気に入りのティーカップ。ユウを思い出させる香りに、少しどぎまぎしながらカイトはリビングを出た。

二階への階段を上りながら、カイトはふと足を止め、物思いに耽る。先程の局面がフラッシュバックして。

「やべ……普通に出来るのか？」

自問したりして。

先程より落ち着いて少しは冷静になったと思ったけれど、ユウの顔を見てもいつも通りに振舞えるのか、あまり自信が持てなくてカイトは重い吐息。

止まってしまった足を無理矢理運んで、まずは自分の部屋へ戻って、後少しだけ落ち着く為にも制服から着替えた。

だけど実際落ち着こうとすればする程。サクにユウを奪われてしまうかもしれない焦りと、苛立ちに逆に落ち着かなくなる。

ここまで耐えて来たのに、どうして今になって我慢が出来なくなってくるのか。やっぱりあんな所を見てしまったのが原因なんだろうなと、顔を顰めた。

＜26＞嫉妬と誘惑

らしくない、とは思うもののなかなか踏ん切りがつかなくて落착がなく部屋の中をうろろしていたら、湯気の立っていた紅茶もいつの間にか冷めてしまった。

これ以上冷めても困ると、意を決して隣の部屋の扉の前に立って、暫し数分。

いい加減自分が情けなくなってきた、カイトは息を大きく吸って強張った手でユウの部屋をノックした。

小さいノック。何の返事もなく、もう一度。

それでも返事がなくて、カイトはそっと部屋の中を窺うように扉を開けてみる。照明の落された暗い部屋の中、ベッドの膨らみからそこにユウがいるのが分かった。

「寝てたのか……」

なんだか少しホッとして、カイトはユウの為の紅茶をそっと机の上に置いた。きつと、起きた頃には冷たくなってしまうだろうけれど。ユウの為に持って来たのだから、その証を残しておきたくて。

それは、いつでも気に掛けているって意味合いが含まれてはいるけれど、気付いて欲しいか欲しくないかは別で。

小さく絞られた照明の薄暗さに目が慣れてきて、カイトはそっと眠るユウの横に立った。

無造作に広がったさらさらの髪に、色艶のいい唇。しっかりと閉じられた瞳の上に血色のいい目蓋。その下に薄っすらと浮ぶ涙の痕。思わず、手を伸ばして、はっとする。伸びた指先がなぞろうとしていたのはもちろん涙の痕。

やっぱり、マリとも何かあったんだ。

と、重たい溜め息と共に行き場のなくなった手で自身の頭を掻き回す。

独りで泣かせるなんて、まじで自己嫌悪だ。

カイトは自分の気持ちにどんどん余裕が無くなっていくから意気消沈気味になる。

ユウの寝顔を見ながら思うことはいろいろあって、やっぱり可愛いなとか、どうして巧い事務事が進まないんだろうとか、キスしたいだとか。

だけど、その内どれか一つでも打ち明ける勇氣はなくて。ほろ苦いを遥かに超越した想いを常に抱いているのだから、恋煩いからそのまま病気になるような勢いだ。

締め付けられる想いとは裏腹に、視線は無意識にある一定に固定されてしまう。口紅もグロスも取れてしまっている唇。それなのに、何故か艶めいていてカイトはどきりとする。

連想されるのは今日見たキスシーン。

「……なんで、双子なんだよ……」

ぼそりと漏れた言葉は口の中に苦味を広げて。

こうやって上から見えて、現状を考えると、もうどうでもいいような気もして来て。だって、現実には柵が多すぎるから。姉弟だとか、道徳だとか、モラルだとか。もう、考えるのに疲れてしまう。

このまま落ちて行ってしまうれば、とは思うのに、それを実行に移すことが出来なのは、自分の思いを知ったユウに拒絶されるのが耐えられないからで。

いつからこんなに想う様になったのか、自分でもはっきりとは分か

らない。けれど、何時の間にか、その想いはコントロールするのが難しい程膨らんでしまったから、伝える事が出来ないのなら耐えるしかない。

愁然たる面持ちでカイトはユウの髪の一束を手にする。

その一本一本が愛しくて。

規則正しい寝息を耳にし、確り眠っている事を確認する。先程からちらつくキスシーン――

自分は一体何をしようとしているのだろう、と頭の冷静な部分でもう一人の自分が傍観しているのが分かる。それなのに、止めないのは何故だろう、止まらないのは何故だろう。

妙に冷静な中、とつくに嫉妬と誘惑に囚われたカイトは自制だけが利かなくなっていたのに気付いてはいなくそつと、唇を重ねた。

重なった一瞬――

感じたのは罪悪感に背徳感。そして、それ以上の切ない幸福感。たった数秒、けれど、この一瞬だけは確かにユウはカイトのものだった。

<27>逃げる理由

きらきら、きらきら――

昨日の降雪が嘘かの様な晴天で、降り注ぐ陽光が見事なまでに白雪に反射し、至る所に敷き詰められたダイヤの如く煌めいている。いつもの見慣れた景色は、昨日に引き続き普段とは違う姿を見せて、人の目を楽しませてくれていた。

けれど、そんな大自然の天恵すらも、ユウの沈み込んだ気持ちの浮上には何の力も発揮しなくて。

「……はあ……」

朝から何度吐いたであろうかという溜め息。これ以上幸せが逃げてしまったら、一体どうなってしまうだろう？

ますます憂鬱に囚われて繰り返す溜め息。

これじゃあ、メビウスの輪、堂々巡りもいいところだ。

冷たい空気の中、窓から差し込む陽の暖かさに、睡魔が忍び寄る。椅子に深く腰掛けたユウは、ひと気の余らない図書室にいた。

少しずつ押し寄せる睡魔に、うつらうつらと背を押す陽光。どうして、こんなにも身を委ねてしまいたいそうになるかと謂えば、今朝、いつも以上に異常な程の早起きをしたからであって。

朝の七時頃にカイトは起床する。

その時間は早かったり遅かったりとまちまちだけど、絶対に顔を合わせられないと思ったユウは、机の上に置かれた冷めた紅茶から逃げるように六時には家を出た。

クラスが違うから、家と休み時間だけ逃げ延びればいいと思い、余り人のいない図書室を選んで、危険な時間帯を遣り過ごしていた。だけでも、こんな事が全く無意味だって事もちゃんと理解している。同じ家に暮らす家族だから、帰る所は同じなのだ。

こればかりは避けようがない。

なのにこの期に及んで悪足掻きしてしまうのは、考える時間と覚悟を決める時間が欲しいから。

「……はあ……」

溜め息ばかりが淀みなく出るのに、自分の考えはうじうじしていて澱みまくってる。

ユウは目の前の机に突っ伏して、両手も投げ出した。

「明日、あーしーたー？」

十二月二十五日。言わずと知れた、クリスマス。

差し当たって、ユウはまず、選択しなければならぬ事がある。

一つの約束と一つの誘い。

「もう、どれも選べない？」

自問する。

また、あのクリスマスツリーをクリスマス見に行こうと約束した。今年のクリスマスも一緒だと、心の底から嬉しかったのに。今では、こんなにも不安に押し潰されそうなんて、あの時は思いもしなかった。

この約束だって、もしあのマリとの遣り取りを聞かれていたとしたら、実現するわけもない筈で。仲良し姉弟で見に行くのとは明らかに意味合いが変わるし、それ以前に気持ち悪いと思われるのがおちだ。

クリスマスツリーをカイトと一緒に見られない辛さもだけど、それ以前に拒絶される事が耐えられない。

では、どうする？

もう一つの誘いに思考を巡らす。やっぱり正直乗り気にはなれないのだ。こんな現状で、打開策も見付からないのに、カイトに向けてられた気持ちは留まる事がなくって、こんな気持ちを抱えたままサクと付き合うなんて。

それでもいいと言われても、それは何だか嫌で。

サクの言う事もよく理解はしているつもりだった。双子で恋愛したって幸せにはなれない、みんなそう言うだろう。だけど、ユウは実際にそんなところまで想像した事はなくて、気持ちがばれないように隠すので精一杯だったのに。

それなのに、サクとマリにけし掛けられた事に因って、気付いてしまった。

好きだって認めてしまえば、どんどん欲が出て来てしまう事。好きだから、拒絶されるのは本当に怖い。でも、それ以上にカイトの心が欲しくて堪らない。こんな状況下で、こんな事を思ってしまう自分が思いの外強かで、それがユウには少し笑えた。

この衝動に任せて、カイトを選べば、どう転んでも後戻りは出来ないから。

ユウは深く息を吸い込んで、椅子から立ち上がった。

先程と変わらぬ雪景色はきらきらと煌めいて、それを見詰めるユウの瞳にまだ揺れる決意を見た。

＜27＞逃げる理由（後書き）

アクセスして頂いてた方、久し振りの更新ですみません（汗）いつも読んでくれている方も、初めてお読み頂いた方も拙い文章にお付き合い、有難うございます！

更新、スローペースとなってしまうてますが、お暇な時にでも立ち寄って頂けると、とても嬉しいです。

<28>揺ぎ無い決意

「マユ！」

「残念。一步遅かったね、ユウはもういないよ」

今日で三度目の遣り取り。

「どうして、引き止めてくれないんだよ。頼んだじゃん」

がっくりと項垂れたカイトは、らしくもなく情けない声。

どうやら、朝からずっと避けられている様だ。という事は、さすがに楽天家のカイトでも自覚した。朝はおいて行かれ、何度教室を訪ねてもユウは既にいない。

もしかして、昨日の奇行がバレているのかと内心どきりとしたが、それでもどうしてもユウの声が聞きたいし、顔が見たい。

もう、バレたってバレてなくなたって、どっちでもいいんだ。

少しばかり投げ遣りな気持ちもあるけれど、バレたってバレなくたって気持ちは一つだし、もうサクにだって他の誰かにだってユウは渡したくない。

昨日自分がとった奇行は、もちろん浅はかだと思う。思うけれど、それでもっと大事な事に気付いてしまったから。やっぱり、このまま見守って、この気持ちを諦めて、今まで通りに過ごすなんてもう出来やしないんだって、こんなにもユウが好きなのに。

「なあ、マユ。ユウがどこにいるか教えてよ」

恨めしそうな顔付きで、拗ねた様な口調のカイトにマユはちらり

と意地悪な視線を寄越す。

「だって、あたしも知らないもん」

「じゃあどうして、引き止めてくれないんだよ」

責める口調ではない。ただ、不貞腐れているだけなのは付き合いの長いマユには分かり切っていた。

正直、マユはユウを引き止めようか迷った。ユウが何も言わず、休み時間になると同時に、誰よりも早く席を立ち走って教室を出て行くのを見て、何かあったんだと理解した。

けれど、サクからあんな話を聞いたばかりだし、逃げるユウに追うカイトを見て、自分が何処まで関わっていいのかが分からなくなってしまうのだ。

ユウの気持ちもカイトの本音も聞いていない以上、どうする事も出来なくて。

本当のところが分からないから。

マユは思案顔で、カイトを見遣る。

「なあ、マユ。俺は絶対にユウを見つけ出す。だから……」

何かを秘めた厳かな瞳でマユを見詰め、そこでカイトは言葉を匂切った。

マユは黙って先を促す。

「もし、ユウが泣いてマユを頼って来たら、力になってやって」

真摯な眼差し、怯む事のない声音。そこに揺ぎ無い決意を垣間見る。

きっと本当はマユにだって譲りたくないであろう、カイトのポジション。

ああ、やっぱりそうなんだ。

サクの言葉が脳裏の蘇る。マユはそっと目蓋を閉じて、サクの言葉を裏付ける様にカイトの声を反芻した。

もう、今までの二人とは一緒にいられなくなるという事。ユウがどんな答えを出そうと、もう今までの様な時間は流れなくなるから、カイトが覚悟を決めた様に、マユも覚悟を決めなければならない。

正直マユにも、この双子がくつつくのは望ましい事ではないと思う。けれど、それと同じ位別々の二人は想像出来ないし、何だか嫌だ。

だけど、事態は動き出すのだから、それを受け止めるくらいはきちんとする積もり。

ユウとカイトがどうあれ、二人はこれまでもこれからマユにとっては大事な友人だから。

マユはゆっくりとカイトに向かって顎を引いた。

その様子にホッとしたように、小さく微笑みカイトも一つ頷き、その場で踵を返し去って行った。

「もう、何だか複雑だなあ」

マユは頬に掛かった髪を耳に掛けながら、薄っすらと笑みを浮かべて呟いた。

追いかけるカイトに逃げるユウ。いつも、じゃれ合っている二人らしくて、こんな状況下でも傍から見ているマユには微笑ましくて、そして思う。どんな二人でも一番に理解して、力になれるのは自分だけだから。

少しだけ、カイトに味方してやるかと、マユは教室の入り口に向かって、

「カイトなら、食堂に行ったけど？」

そこにぺこりとお辞儀を返して、ふわふわの髪を靡かせた一年生。

「……あたしからの、クリスマスプレゼントだからね」

立ち去った一年生——マリから視線を窓の外にやり、きらきらと煌めく雪に向かってマユは一人呟いた。

この煌めく雪粒の中から大事な大事な宝物を見つけられますように。

それがどんな形で、どんな色や香りをしているのかは分からないけれど、今日はクリスマスイブだから。どんな形や、結果であつても。

親愛なる双子へ——幸せが訪れますように。

<29>擦れ違い

走って、走って、やっと見つけた。

ほっそりとした後ろ姿。佇む背中に無性に愛しさが込み上げて来る。

カイトは上がった息を整えながら、ユウの他に誰もいない図書室の入り口で、ユウの後ろ姿を暫し見詰めていた。

まさか、図書室なんて、と思いながら来たのだ。それほどまでに図書室は二人には縁遠い場所だったりする。

呼吸が落ち着いて、カイトが一步中に踏み出した直後、背中を見せていたユウが不意にこちらを振り返った。

咄嗟にカイトは「ユウ」と呼び掛けようとして、そして、押し黙った。あまりに、動揺したユウの表情に、怯えるようなその雰囲気——ああ、やっぱりばれてしまったんだ！ それをカイトの全神経が認識し、体中を強張らせた。

諦めないと決めたのに、今更何を恐がるのだろうか。

この期に及んで、嫌われたくないなんて——

二人して固まったまま、重い沈黙。重みに潰されてしまいそうな程の、凄く長く感じられる空間は、以外に短かったのかもしれないけれど。

「ユウ」

カイトが声を掛けたのと、ユウが弾かれたように踵を返したのはほぼ同時。

入り口にカイトがいるので、ユウは本棚の羅列する迷路に逃げ込む。それを、カイトが追う。

見つけてまで、追いかけてっこのだ。

それでも、もう、ユウを追い続けると決めたから。逃げられても、

避けられても、拒絶されようとも。だから強張る身体に叱咤して、びびる心に檄を飛ばす。

いつまでだって追ってやる。

「待って、ユウ!!」

後少しで手が届く、というところで、ユウはひよいと身軽に柵と柵の隙間を縫うように、カイトの手をすり抜けていく。ユウが入り口に向かわないように配慮しながら、奥へ奥へと追って行く。

後少しでユウに触れる事が出来る。

何だか切ない気持ちに急ぎ立てられるように、胸の鼓動は早鐘を打ち、カイトの中はユウで満たされる。

もう、ユウの事しか見えないし、ユウの事しか考えられなくて。だから、もう、この気持ちに蓋をするのも止めにするし、気付かないフリも止める。だって、欲しいものは欲しいから。

一度踏ん切りをつけてしまえば、カイトはそう簡単には諦めない。思いつ切り手を伸ばして、ユウの逃げる右手を掴んだ。

「ユウ！ 待ってって！ 何で逃げんの？」

肩で息をするユウは、黙って俯いたまま。

その表情が量れなくて。

「ねえ、ユウ黙ってないで。こっち見て」

あまりの反応のなさに、カイトの中に不安と苛立ちが頭を擡げる。既に、嫌われて軽蔑されたか――不安。それに答えてくれない、苛立ち。もどかしさ。

溢れかえる感情に翻弄されそうで、カイトはそれを振り払うかの

ように空いている手で髪を掻き上げた。

「ごめん、昨日の事は謝るから。お願いだから、こっち見て」

びっくりと、ユウの肩が反応する。

「昨日の事って……やっぱり知ってるんだ……」

その声はとても小さくてカイトには届かなかった。聞き逃してしまったカイトは、ハッとしてユウを掴む手に力を込めた。

「何、もう一度言って？」

「気持ち悪いって、思ったんでしょ？ そんなのおかしいって！」

「待って、ユウ、何の……」

「何で話濁そうとするの？ 正直に言え方がいいじゃない！」

一体何のことを言っているのか、おかしい、話が噛合わない？と、訝しんだ時にはユウを掴んだ手は振り解かれていた。訳が分からぬまま、それでも震えるユウの肩に手を置こうとしたカイトはユウの頬を伝う涙に一瞬にして身体の自由を奪われてしまった。所在無げに浮いた手を戻す事も、進める事も出来ない程に。

また、泣かせたのか――

もう諦めないし、誤魔化さないと決意した気持ちだが、突如不安に包み込まれる。自分が傍にすることが、気持ちを隠さないことが、もしかしたら今まで以上にユウを泣かせることになるのかもしれないから。

その涙に揺れる。揺れて、途方に暮れそうな気持ちに灰色が注す。だけでも、兎に角今は、噛合わない話の誤解を解かなければ。

考えが纏まらない戸惑った表情でカイトはユウを見詰めていた。シンと静まり返った、たくさんの言葉たちがひっそりと眠るこの場

所がひどく寂しく感じられる。その中でユウの涙だけが胸を締め付けた。

<30>擦れ違い

声も出さずに小さな肩を震わせ、悲しい表情はそのままでぼろぼろと頬を伝う涙。

ユウが泣いている。

どうしてこうも泣かせてしまうのだろうか。もしかして、今までも気付かず泣かせていた事があるのだろうか。

後悔と不安の入り混じった面でユウを見つめるカイトは、ユウの透明な涙に痛い程動揺していた。

きつと何かを誤解していて、それが泣く程辛いという事は理解した。そして幸いな事に、昨日の愚行がバレていないという事も。

それだったら、話しは早い。ただ誤解を解けばいいだけ。

なのに、ユウの涙に妙に胸がざわついて、息苦しいし、胸苦しい。好き過ぎて自分の感情のコントロールなんて、とてもじゃないけど舵を取れない。

締め付けられる気持ちに溜まらず、情動に任せてカイトはユウを抱き寄せた。耳元で、ユウの息を呑む音が聞こえた。

「ごめん。どうしていいか、分からないから。もう泣かないで。俺……何かした？ ユウが怒るようなこととか、傷付くようなこと」

ユウにだけ、聞こえるような囁き声。甘やかすように、宥めるように、右手でそっと何度も何度も髪を撫でる。同じ洗髪剤を使っているにも関わらず、ユウにじっくりくる程の甘やかな香りに心拍数が急上昇するのが分かり、心持ち焦った。

やばい、このままじゃ歯止めが利かなくなりそうで。

カイトは理性を総動員して、自分の中の欲を抑えこみ、それを悟られまいとユウの反応に全神経を集中させた。

腕の中で小さく身じろぐユウを、もっと強く抱き締めた。

「……ずるい。いつもずるいよカイトは」

胸の辺りから、くぐもった声。

「昨日、マリちゃんにカイトが好きって言われた」

抱き込んだユウの肩が小刻みに震えている。

「それで、俺のこと避けてたわけ？」

小さい頭が左右に揺れる。

「違う。話……聞こえた？」

やっと合点がいった。そういうことか、とカイトは鼻から息を吐く。要するに聞かれてはまずい話を聞かれたと誤解していたのだから。

早とちり。

それで勝手に避けて、泣いて、怒って、振り回されっ放しなのに世話が焼けるのに、胸いっぱいにユウへの愛しさが広がっていく。そして、不安だった気持ちにシュンと萎えて、安堵感から腕に込めていた力を抜き、ユウの泣き顔を覗き込み、

「話なんて聞いてない。だいたい俺が駆け付けた途端に、ユウが逃げたんだろ」

「……本当に聞こえてない？」

「嘘ついてどうすんの」

「うん……だけど」

「そんなにまずい話？　ていうか俺、正直マリとは付き合うとか、

そういう気ないから」

カイトは正直に告げる。

ユウのことが好きだから、他の子と付き合うとか、そんなことはもう考えられないから。姉とか他人とか、そんなこともうどうでもよくって、ユウがユウだからこんなにも惹かれてる。

だから他の人と付き合うなんて出来っこない。

そんな想いに駆られて思わず腕の中のユウをきつく抱き締めた。

「ねえユウ。約束して。絶対に俺のこと避けないって。その代わり、ユウが聞くなと言え何も聞かないし、知られたくないと思ったら知ろうとしない。知ってたって知らないでいて欲しいと思えば、俺はその事実ですら曲げてあげるよ。だから、俺の傍からいなくならないで」

こんなにも好きだから。愛しくて胸が張り裂けそうだから。その姿をこの眼で逐一確認しないと不安定に、その姿を追い求めてしまう。

自分でもびっくりするくらい、愁然たる面もちに声。悔しいし、切ないし、情けないけどカイトの隠しきれない本音。

もうマリとのやり取りの内容なんて、どうだっていい。気にならないといえ嘘になる。けれどそれをユウが隠し通したいと言うのであれば、そのようにする。

避けられるより、知らない方がマシだと思う。

この場所に納められている多くの書物たちの言葉を借りたって、表現し切れない程に——もう、ユウしかいららないから。世界で一番大切な片割れであって、大事な人。

だから、お願い——「うん」と言って。

切なる想いで、カイトの瞳が揺れていた。

＜31＞君の選んだ今

無意味に季節が巡って、春の優しい香りや夏の心躍る陽光にも、秋の憂いの彩りと冬の厳しい強さにも何も感じない無味乾燥の日々。いつだって心裂かれるような重苦しい寂寥感に苛まれて、ただただ意味もなく繰り返し返される毎日に、生きる喜びどころか楽しみさえ見出す事が出来なくなって早三年が経つ。

「今日、何食べたい？」

心此処に在らずだったユウは隣を歩く、このユウの無意味な三年の間で驚く程に背の伸びた人物――サクの横顔を見上げた。

ただでさえ背の小さいユウは首を反らしていつもサクを見上げる。大分、見慣れた整った顔。隣にいることに少しずつ薄れた違和感。けれど、全ては拭い去れない違和感に、いつもの憂鬱がユウの全てをやりわり包み込む。

「何でもいいよ。でも、マック以外ね」

「はいはい。マックとオムライス以外ね」

いつものユウの口癖を先回りし、サクは小さく溜め息を吐いた。そんな溜め息をさらりと聞き流し、

「やっぱり、冷やし中華が食べたいな」

ユウはサクの方を見ずに言った。

夕食時の店内は一日の内で一番賑わっているらしく、人々の喧騒

や食器の触れ合う音で溢れている。

三年間の間に何度か訪れた中華料理店。けれど、これといった思い出にもならず、味も評判も上々なのにユウにとってはその他多くの店と同等にしか感じられなかった。

サクの手を取って三年。これといって楽しく思うこともなく、ただただ毎日が過ぎた。

「次の休み、どこ行きたい？」

「どこでもいい」

「……マユちゃん元気してる？」

「うん」

どうにも会話が弾まないのはいつものことで、サクも半ば諦め気味だったりする。サクはいつだって強制はしないし、ユウのしたいようにさせてくれるから。そのことはユウも承知で、その優しさに無条件に甘えているところがある。

途切れた会話の合間の沈黙がむしろ居心地が良かったりするから。それは確かに、無言が耐えられないという関係は通り過ぎ、ある意味穏やかとも言える関係にまでなった証拠でもある。

気を張る必要もないし、これといった不満もない。でも、正直に言ってしまうユウにとってサクが心から大事な存在になったとはとても言い切れないのも事実で。

暫く黙って箸を動かしていたユウは、徐に冷やし中華から視線を上げた。

「サク先輩、今日バイトは？」

「いや、今日はないよ。家に来る？」

さっさと食べ終えたサクは、いつもの動作で脇に置いてあった煙草を取り上げ、馴れた仕草で火をつけた。

吐き出した紫煙の先を辿りながら、ユウはぼんやりとした面持ちで左右に首を振った。

無言で頷いたサクの方を見ることもなく、ユウはじつとサクの煙草の紫煙の先を見つめていた。

ユウの食事が終わるのを待って、二人は連れ立って店を出た。ユウの大学の近くの店で、ここから電車に乗って帰ることになる。サクの家は同じ線のユウの大学と家の中間の駅なので、サクが先に降りることになる。サクの大学は、これまたユウの大学と真逆に位置していて、ユウと会うにはサクは自分の降りる駅を乗り過ごしここまで来るという手間が掛かっている。

始めの頃は、わざわざ大学まで迎えに来てくれることに申し訳なく思うことも、少しばかり嬉しいという思いもあった。なのに、慣れとは怖いものでこれが習慣付いてしまうと当たり前になってしまふ。

電車のシートに隣り合わせに腰掛けたユウは、そんなことを考えながら向かいの窓に映り込んだ自分とサクの顔を見ていた。

優しいサク。自分を一番に考え、大事に扱ってくれるサク。

端から見れば自慢で申し分ない彼氏なのはユウも百も承知。

なのに、どうしてあの焦がれるような気持ちが続いてこないのだろう。なぜ、あの頃自分の片割れに抱いたような想いがサクには持てないのだろう。

ああ、でももう考えるのも面倒くさい。

いつだって答えの出ない苦悩に、ユウは窓に映る二人から逃げるようにそっと瞳を閉じた。

＜31＞君の選んだ今（後書き）

お読み頂き有難うございます！更新スロースペースでいつもお読み頂いてる方すみません！この＜31＞から第二部に入ります。宜しければまた読みに来てやって下さい。感想などありましたら宜しくお願いします。それを励みに精進して行きたいと思えます！

＜32＞君の選んだ今

送って行こうか、と言われて、大丈夫と答えた。

いつも思うことは同じでこれ以上優しくしないでということ。

重苦しい気持ちを抱えたまま、電車を降りるサクの背中に小さく手を振りながら見送った。

スローな動作でユウを乗せた電車が滑り出す。ホームから遠ざかって行くなか、サクの背中とカイトの背中を重ねてみる。

やっぱり、うまい事重ならない。そんなことはじめから分かり切っているのに、双子の姉としてカイトの傍にすることを選んだ時から。弟としての優しい手を離したくなくて、選んだ道。

それなのに、皮肉なことにサクのくれる優しさはユウの心が必要以上に消耗させる。それがどういうことなのかも分かっているから、そんな自分に嫌悪を抱くしサクの想いを踏みにじってまでカイトの呪縛から逃れることの出来ないユウのことを今でも好きでいてくれるサクに申し訳が立たなくて、苦しい。

時々思う。

今のこの苦しさ、もし、あの時カイトにすべてを打ち明けていたら変わっていたであろう未来と、どちらがより苦しかったのだろう。

その答えはもう知りようもないけれど、ユウにも一つだけ分かっていることがある。

それは、双子の弟であって肉親のカイトを好きになってしまったという罪科。一生かけても消せそうにないこの想いへの天罰。

だからきつと、一生苦しくて、切ない。

自宅のある駅で降りてすぐ、マナーモードにしていた携帯がカバン

の中からユウを呼ぶ。緩慢な動作で取り出してフラップを開く。

「あっ……」

サクからの受信メール。そこに打ち込まれた無償の優しさ、気遣い。

——気を付けて、帰れよ——

サクのさりげない心遣いに、しくしくと心が張り詰めていく。

「こんな、薄情な女のどこがいいのかな……」

ポツリと呟いて、携帯のフラップを閉じた。

優しさを重さとしか取れなくて、心遣いを煩わしく感じてしまったり、好きになろうと努力をしているなんて、どれだけ失礼な女だろう。

握り込んだ携帯を片手に、ユウは歩みを止めて、自分の足元を見下ろした。

この道の先に続いているのはいったいどこなのだろう。

サクのもとに続けばいいのに、と思う。それはきつと続いているいのをユウが一番知っているからで。

スケープゴートにしたのは自分なのに、これ以上傷付くのが怖くて、また優しいサクに逃げている。

こんなに酷い女いる？

自虐的に笑って、うつすらと涙の浮かんだ瞳で夜空を見上げた。そこに広がる夜の闇には、朧気な月と瞬くことを忘れた星が些細な光でもって、ユウの道を照らしていた。

「帰りたくないな……」

胸が苦しくて、もうよく分からなくて、それなのに焦がれる程にカイトに会いたいと思ってしまう。今だに消えない気持ち。

だから帰りたくない。これ以上サクを貶めるような気持ちを抱きたくない。自分勝手なのは誰に言われるまでもなく、だけど家に帰れば自分の片割れがいて、いつものように笑って迎えてくれる。

こんな自分勝手な女にも、心から笑って、欲しい笑顔を与えてくれるから。カイトに会うことで、ますますサクを裏切ることになる。でもそれは、カイトのせいでもなく、もちろんサクのせいでもないから、ユウはさっぱりした夏の夜にも冬の空に垂れ込めた暗雲のような気持ちで家路を辿る。

全て自分で選んだ道なのだ。カイトから逃げたのも、サクに飛び込めないのも。この血にいつまでも縛られたままなのも。

＜33＞悪夢から続く現実

寝苦しい夜じゃなくとも、軽いうたた寝の時だって、悪夢を見ることはある。誰にだってそんな経験はあるはずで、それはカイトだって例外ではない。

ただ、例外なのは同じ夢を繰り返し見ることだろう。

今日もまた、ほんのうたた寝だった。

大学から帰り、居間のソファに軽く寝転がって、帰り掛けに買ってきた雑誌をペラペラ捲っていた。連なる文字は流すだけにおさめて、カラーの写真ページだけを飛ばし見したりして、ユウに似た子が載ってたりすると少し狼狽する。なんてことをしているうちに、いつの間にか、とろとろと半睡状態に陥っていた。

夢の中で、これは夢だから、何でもないそんなことないと言い聞かせる。言い聞かせるようにして飛び起きて、そしてこれが現実なのだと思い知る。悪夢から続く現実。カイトにとって、今もその夢も現実以外のなにものでもなかったのだから。

嫌な汗を全身に纏い、どれほど自分の心と体がその現実を拒んでいるかが分かる。だけど、そればかりは変えようもない現実で、また事実であるから、いつまで経ってもカイトは夢をみる。

あの日の夢を――

かちり、と小さな音がして、玄関口に人の気配。

ユウが帰って来た。未だに薄れることない双子のシンパシー。夢で乱れた心拍数が更に散り散りに乱れ、このまま止まってしまうのではないかと思う程。

少し落ち着こうと、深く深呼吸をして、気持ちを誤魔化した。

「おかえり」

何事もなかったかのように、ユウを迎えた。双子のユウでも欺けるくらい自然に。

「ただいま」

浮かない表情のユウはそっとカイトから視線を逸らした。手にしたカバンをきつく握っている。

頑なな態度。解かれない警戒心。空気中を漂う粒子のように纏わりつく拒絶の壁。

あの日から、カイトとユウの間に生まれてしまったものだ、カイトは常日頃感じていた。

「今日は二人とも外食してから帰るって」

カイトはもう一度ソファに寝転がり、戸口にいつまでも佇むユウに言った。

両親の外食。家にユウと二人っきりで、本当だったら嬉しい時間の筈なのに、この三年間二人きりであるのが辛いと感じないことがなく、でもそれを表に出すカイトではないから、自分の配慮にしくじりないよう注意する。本心をさらけ出すことが今は怖かった。

「あたしは外で食べて来ちゃったけど。カイトは？」

「まだ。じゃあ、適当に何か食ってこようかな」

「うん。そうしたら？」

ぎゅっと心臓を鷲掴みにされたようないたたまれない痛みが走る。素っ気ない態度より、そのほっとしたような顔をされることに、いっつになくカイトの気持ちはやせ細る気がした。

ユウも二人きりを恐れている――

どうしても拭い去ることの出来ない違和感。取り払おうとしても、霧のようにいつの間にかそっと漂い、そこから先の視界を奪い去ってしまう。

ただユウが欲しいと望んだだけだったのに。
何がどうねじくれて、こうなってしまったのか、まったく分からなかった。だってまだカイトの気持ちすら打ち明けていなかったのに。

「出かけるわ。戸締まり宜しく」

なるべく自然体を意識して、本当のような笑顔を見せて、戸口に未だ佇むユウとすれ違った。

甘い香り。あの頃と何も変わらないのに。それなのに変わってしまったのは二人の関係で。恋に落ちるのが不自然で避けずまれる関係なら、今のこの不自然なぎくしゃくとした双子はどんな存在なのだろう。

望んだのはこんな状態じゃなかった筈だ。

玄関の扉を閉めて、大きな溜め息一つ吐き、そっと夜空を見上げた。

＜34＞悪夢から続く現実

「最近のカイトって、ちょっとうざい」

そう、ハッキリと言われるといくら楽天家だって、ずきりとくるものがあるわけで。

片頬を引き攣らせながら、どこが、と萎れた声で問い返す。

夕時のファミレスは人の声で溢れている。これだけの人が溢れて、並んでいる食事の量も多いのに、夕時に町を歩いている時のような、懐かしい家庭の匂いは全くしない。

「もう、いい加減諦めたらどう？ もう、三年以上経つよ」

「うざいって、その事について俺は何も言っていないけど？ 今も、そして今までも」

オリーブオイルに絡めて、少量のパスタを口に運んだマユはげんなりとした目でカイトを見た。

カイトは手元にキープしたコーヒークップを遊びながら、マユの言葉を待った。

「確かにね。カイトの口から具体的な事をさ、聞いたことはないわね。でもさあ、そんな全身から陰気なオーラが出てれば誰だって何かしら思うところがあると思うけど」

「それは、マユだからだろ」

「ああ、そうね。そう、あたしだから、全部気付いてるし、知ってることもある」

頷いた表情は至って満足げなマユ。

マユに隠すつもりはさらさらなかった。けれど、自分からも打ち

明けるつもりもなかった。だから、今までカイトはユウへの気持ち
をマユに伝える事はしなかった。どうせ、言っても言わなくても気
付かれるのだ、ということは長い付き合いだし端から分かっていた。
だから、この話題に触れられるのもついに来たか、と言うよりは
やつとか。という思いも強い。なんたって三年越しだ。なぜ、マユ
は今まで気付いていて黙っていたのだろうか。

「なあ、本当の好きってどんなだろうな？」

半ばぼんやりとした面持ちでカイトは言ったのだが、なぜがマユ
は息を呑むような素振を見せ、軽く目を丸くした。

そして、微かに口元を綻ばせながら、

「双子って面白いよね。その答えはユウもカイトも、もう見つけて
いると思うけどね」

「意味が分かんねえよ」

双子が何の関係があるんだか、さっぱり理解出来ないカイトはつ
まらなそうに横を向いた。それでもマユは何だか心底楽しそうに目
元で笑っている。

本当の好きと、嘘の好きと、どれだけの違いがあるのだろうか。大
体、嘘の好きってなんだよ。カイトは考えながら自分に問い掛ける。
嘘の好きがどんなもんで、どのような時に抱くのかなんてカイトに
は想像もつかない。想像もつかないけれど、それ自体は否定したく
ないのだ。嘘の好きであって欲しいから。未練たらたら、何年経っ
ても薄くもならないユウへの気持ち。ユウの気持ちが本当の好きだ
何て思いたくないのだ。自分以外に向けられた想いが、本当の好き
だなんて。

「俺って欲張りなのかなあ」

「さあね。でも、好きなら自分の傍に置いておきたい、傍に居たい、と思うのは普通なんじゃないのかな。それと同時に相手の気持ちを独占したくなるのも当たり前じゃない」

「だよなあ。なんで俺だけなんだろ」

「そりゃ、自分と同じ想いを相手にも思ってもらうって簡単なことじゃないから。そんな都合良く全てが運ぶわけじゃないじゃない。特に、カイト達はそうでしょ？」

カイト達は――

いつだって、この血が邪魔をする。血が繋がってなければ、双子でなければ――なければどうというのだろう。だって、双子じゃなくたって全てが自分の望むように都合よく運ぶとは限らない。だったら、本当はそんなことはどうでもいいんじゃないか。という気すらしてくる。でも、そういう訳にも行かないのだ。周りはそれを認めない。それが世間というものであって、道徳というものだ。それは、カイトも痛い程感じている。でも、このままじゃこの昇華されない気持ちにどうけじめをつければいいのかすら分からない。あまりにも分からないことが多すぎて、今に消化不良の気持ちに押しつぶされそうだ。

急に情けない思いに駆られ、それを振り切るようにカイトは玩んでいたコーヒークップを口元で傾けた。ファミレス特有の薄い味と薄い香りは、それらを消してくれる事はなかった。

＜35＞悪夢から続く現実

薄いコーヒーを口の中で転がす。まるで中途半端加減が、自分の気持ちのようで、カイトは長いため息を吐く。

マユは見かねたような表情で、手にしていたフォークを皿の上に戻した。

「ユウが、サク先輩と付き合いだして、カイトはどう思った？」

「どうって、やっぱり嫌だよ。正直、気分わるい。けどさ、半分信じたくないからか実感薄いんだよな。それより、なんだかユウに半歩置かれた態度が俺は寂しいよ」

自分で言っていて、余計に侘びしくなる。カイトは長椅子の背もたれに身を崩した。

「ねえ、ユウは幸せそう？ この三年の間、とても幸せそうに見えたことがあった？」

マユは組んだ手の上に顎を乗せ、真っ直ぐカイトの瞳を覗き込んだ。

ユウが幸せそうだったかだって？ カイトは眉間にシワを寄せながら、無意味に流れるように通り過ぎてしまった三年間の、記憶の回路を辿る。

どうだっただろうか。

記憶に残るユウは、二人きりになると居心地悪そうな感じでカイトの前ではいつでも戸惑っているような雰囲気だった。

どんなにユウが幸せを感じていたって、カイトの前では分からない。薄い皮膜に隠されたようなユウの気持ちなんて。それが分かればこんなに苦しいことなんてない。

「わかんねえ。てゆーか、こんなにユウのことが分からなくなるこ
とがあるなんて昔は思ってもみなかった」

「ああ、あんたたち面白いほどの意思疎通持ってたものね。じゃあ
さ、逆にそれはユウも同じだと思わない？ カイトはユウのことが
分からない。その逆は？」

マユは解いた掌をくるりと反転させ、カイトの方へ向けた。

回答権がこちらへ回ってくる。

「俺のことが分からないってこと？」

「そ。そういうこと。きつとお互い分かってない。なんならきつと、
あたしのほうが知ってるかもね。いい？ カイト。あたしが言える
のはここまで」

マユの瞳の奥深くが、真剣な色を湛える。カイトもつられて真剣
な面持ちになった。

「あたし、ユウからサク先輩の話ほとんど聞かない。聞いてもユウ
は濁す。これって、どういうことかよく考えてみることね。ほんと
のところ、ユウの本心は聞いたことがないから分からないけど。聞
かなくたって分かることはある。そうでしょ？」

マユだから――

分かる事がある。カイトは、じつとマユの瞳の奥を見詰めた。マ
ユの言葉を反芻してみる。確かに、マユにもサクの話をもったくし
ないといのはおかしいと思う。でも、だからと言ってサクのことを
何とも思っていないわけでもないはずで。

そうでないとユウは何でサクと付き合ってるのか分からないじゃ
ないか。

ますます混乱しそうな頭を抱えて、カイトは身を振って机に突っ伏した。

「さっぱりわからねえ」

「……あんたたち、あたしから見ればそっくりだけだね。じゃあ、まずは自分に正直にいきなさいよ。自分が今どうしたいか。どうしたら納得が行くのか。そこから動かなきゃ、何も見えてこない」

呆れたように言ったマユの声音は、思いの外優しかった。カイトは、遠くに人々の喧騒を聞き、食器の奏でる音を無意識に拾いながら、窓の外をぼんやりと眺めた。

自分がどうしたいのか。どうしたら納得が行くのか。

そういえば、ずっとそんなこと考えていなかった気がする。ユウの態度に意気消沈して、これ以上避けられないようにと気を張り、嫌われたくないと尻込みして。自分の気持ちにはセーブをかけて。気付かされてみれば簡単なことだ。

俺はユウとちゃんと話がしたい。昔みたいに、笑って。だって、この気持ちはまったくもって色褪せてなんかいないのだから。寧ろ三年も、もやもやと閉じ込めていた気持ちだ。もう、相当に、膨らんでいる。弾ける前にきちんと話がしたい。

「うん。いい顔になったね」

「目から鱗だった。マユの言うとおりだ。俺がしたいことを考えてなかった」

「したいことが見付かったなら、頑張りなさいよ?」

そう言って、マユはにんまりと笑った。マユらしい笑顔だとカイトは思った。

＜36＞悪夢から続く現実

昼間は唸るような暑さでもって、身を溶かすような気温でも、夜の帳が降りてくれば、その熱も幾分冷める。カイトは、外気とは真逆の一向に冷めることのない想いを抱えて、自宅へ戻っているところだった。

つい今しがた近所に位置するマユの自宅まで送り届け、十分も掛からない家路を辿る。そろそろ両親は帰宅している頃だろう。

きつと、ユウと二人きりではないはずで。

今日、何度吐いたか知れない溜め息。先程、自分のしたいようにする、と決意したのに心の何処かが怯えている。ユウと話したい。そう、望んだのは自分だ。なのに、恐怖する自分がいるのも嘘じゃない。

いつから、こんなに臆病になったんだろう。以前はもう少し前向きで気持ちに忠実だったはずで。

頼りない足取りで踏み出す爪先に視線を落しながら、カイトは亀のような速度で歩く。

きつと、この気持ちが折れてしまうことの恐怖を感じてから、前に進むのも、後ろへ下がることも、現実を直視することも躊躇ってしまったのだ。

サクを選んだユウに、自分の気持ち、存在を拒絶されたことが受け入れられなくて。だから、現実逃避する。暗闇に落ちていくように、独り、深淵の淵を彷徨いながら、悪夢の中でユウを待ち続ける。そんな状態が三年。いい加減、長すぎる。

「手に入れろよ」

カイトは声にならない声で、自分に叱咤した。強く拳を握る。そのまま落した視線を上げて。進行方向に、くるりと背を向けた。

まず、この恐怖心に打ち勝つところから始めなきゃ話にならない。だって、気付いてしまったから。自分のしたいように生きるには、このままじゃ駄目だ。

地を勢いよく蹴って、強い足取りで駆け出した。久し振りに、駆り立てるような焦燥感。でも、なんだか心地よくて、このまま止まらずに走れるかもしれないと思う。

自分でそこに封印を掛けたのだ。だったら、その封印は自分で解くしかない。ずっと、避けていたから、いい頃合かもしれない。リズムカルに両足を出しながら、いつだって心の奥底から消え去ってはいけなかった、苦い記憶が蘇る。

悪夢。

あの、悲しくて、辛い切ない記憶。

ユウと最後に交わした、守られなかった約束の場所。今ならそこに行っても耐えられるような気がした。一緒に見ようと約束したクリスマスツリー。季節はあの頃と違えど、カイトは今まであそこを訪れる事が出来なかった。そんな勇氣はなかったから。あそこに行けば、嫌でも思い知らされる。待てども待てどもユウは来なかった。寒さに悴む手を擦り、いつまでもユウがくるのを待っていた。

図書室でしたカイトのお願いに、とうとうユウは返事をくれなかった。それが答えだったのかもしれない、などと挫けそうな気持ち在必死で鼓舞させて。寒さと心細さ、不安が入り混じって、何度も泣きたくなる。それでも、迎えには行きたくなくて、自分の、ユウ自らの意志でここへ来て欲しくて。独り、あのツリーを眺めていた。

「あと、少し……！」

今でも心を痛いほど締め付ける記憶を片手に、カイトはいい加減悲鳴を上げそうになってきた足を、更に踏み込む。流れてくる汗が目に沁みる。荒い呼気に上手く空気を取り込めない。

それでも、走り続けたかった。

でないと、あの悪夢に——そこから続く現実に負けてしまいそう
で。

自分の力だけで、あの時感じたことをきちんと受け止めて先に進むには、多少の荒療治が必要だから。多少は苦しくっても痛くっても当たり前だ。でないと、なにも変わらない。もう、悪夢から逃げることは止めたから。痛みを恐れていたら、後にも先にも、今にさえも置いていかれるだけだ。

差し掛かった上り坂を、カイトは鋭い視線で挑むように見上げた。

<37>甘い幻想を抱いて

自分以外の誰もいなくなった空間は、真っ白な静寂で波のない湖のように閑散としている。

カイトは行ってしまった。

誰と食事をするの？ 行かないで。傍にいて欲しい。思っても、口にすることは出来なくて。だって、もうそんな権利も立場もないってちゃんと分かっている。

頭ではきちんと理解して、態度でも示せた。なのに、感情だけがついて来ない。

独りきりのこの空間が、重くのし掛かってきて、弱気になる。隠して、隠してきた弱い気持ちをさらけ出して、カイトに全てを晒してしまえたら。そんなこと思っても、全てを壊して誰かを傷つけて、自分勝手になんて出来ない。そんな勇氣あるわけがなかった。

自分の踏み締める足音だけが、静寂を壊し現実となって響く。ユウはリビングの明かりを消して、二階に上がる。

手前の自室のノブに手を掛けて、一瞬躊躇った。そして、徐に隣室へと視線を移す。

いろんな意味で、いけないことだとは分かっている。でも、少しだけ。少しだけでいいから、カイトを感じたい。

ユウは閉じられたカイトの部屋の前に立った。心臓が耳にあるんじゃないかと思うほどの高鳴り。一瞬、サクの無邪気な笑顔が脳裏を過ぎった。高鳴る心音に、軋む音が加わったかのように、ユウの眉尻は下がる。こうやって、カイトのことを想うだけで充分な裏切り行為。

卑怯だって自分を罵っても、止められないのが本能だ。理性を上げる事なんてよくある話だから。だから、言い訳はしない。ユウはそっとカイトの部屋に入った。

物凄く久し振りに踏み込んだカイトの部屋は、以前より整理整頓

が行き届いていて、妙に空寂しい感情が顔を擡げる。ユウがよく訪れていた頃はもっと、雑多な感じで物が至るところに散らばっていたのに。だから、それが歳月の流れを痛いほど感じさせて、ユウは唇をぎゅっと噛み締める。

泣く為に入ったんじゃない。ただ、少し頼りたくて、カイトの幻影に慰めて欲しかっただけ。

ユウは鞆を床に放り出し、部屋の明かりも灯さないまま、カイトのベットへふらりと転がった。

「カイトの匂いだ。懐かしい……」

うつ伏せた顔の下、シーツの香り。懐かしい香りに、昔の記憶がふうわりと蘇る。あの頃は、こんなに近くにカイトがいて、それがいつまでも続けばと願っていたのに。自分の本心に気が付いて、それに耐え切れなくなって、壊れる関係に恐怖を覚えて、逃げ出したのは紛れもない自分だ。

冬が差し掛かる秋風の中。カイトの自転車の後ろに乗って、この匂いに癒された。あれから、どれだけの月日が流れても、一つ一つの記憶の破片ですら薄れることはなくって。月日が流れれば流れるだけ、輝きを増して、彩を強める。より、色彩に香りを伴って胸を締め上げて。こんなに切ない気持ちは誰にも理解できないと思う。

「好きだよ。今でも、きつとこれからね」

笑おうと思ったのに、無理に取り繕うとした笑顔はぐにやりと歪み、込み上げる涙を思わず堪える。止め処なく溢れ出した感情は、瞳から溢れる雫となって、ユウの心中を代弁するかのよう。声を張り上げて、子供のように泣きたかった。

だけど、自分の罪科を思うと、そんなこと出来なくって、必死に涙を堪えて零れ出そうになる声を両手で押さえる。夏なのに、押さ

えた手はひんやりと冷たくなってしまっていた。

どうして、カイトに想いを打ち明けて縋らなかったのだろう。今、こうして、溺れるような苦しみに呼吸の仕方を忘れ、溢れ出そうな感情に振り回されて、ボロボロに擦り切れた自制心を抱えて、自分の感情もサクの優しさもカイトへの想いも裏切って、得たかったのはこんな未来だったか。違う。そんな筈じゃなかった。

だけでもう、後悔したって、何もかもが手遅れだから。

この血を全部抜き取って、誰かの血と総入れ替えが出来るのなら、なんてそんな甘い夢に浸る。幻想のなかでしかもう生きれない。そうやって自分を守って。これから時をやり過ごしていくのだから。

ユウはそっと瞳を閉じた。

＜38＞甘い幻影に縋って

どの位、うつ伏せたままカイトの幻影に縋っていたのだろうか。判然としないまま、うつらうつらと睡魔に魅了され舟を漕ぎ出そうとした頃。それを遮るかのように、床に放り投げた鞆から床に伝わる微震動がする。突然、たゆたうような静寂が破られてユウは驚きのあまり飛び起きた。

慌てて壁に掛けてある時計を仰ぎ見る。まだ、そんなに長い時間は経っていなかったようで、安堵の息を吐きながら、床に放り投げた鞆を探り携帯を取り出した。

手に伝わる振動が、暗闇のなかに浮き上がる文字が、ユウの中に微弱の電流を流す。

サクからの着信だ。出ようか出まいか逡巡する。甘い幻想に浸っていたのに、荒波に押し流されるかのように現実へと引き戻されて、ユウの胸の中に苦い細波が広がる。

現実には、この携帯を頻繁に振動させるのはサクであり、カイトじゃない。これが現実。

「はい……」

ユウはなんとなく抑えた声で答える。

『ちゃんと帰ったよね？』

「うん。ありがとう」

『無事に帰りついたならいいんだけどね。今日のユウちゃん、あんな元気がなかったからさ。なんか嫌なことあった？』

いつだって優しいサク。ユウがどんな態度で接しても、崩れることのないサクのスタイルにますます裏切りものの烙印を捺されてる

ようで。ユウは鈍い痛みを堪える。ましてやここはカイトの部屋で。まさかこんなところで電話に出てるなんて、サクはきつと思ってもないはず。ユウのカイトへの想いを知っていて、それでもいいかと、忘れる為でもいいからとまで言ってくれた人なのに。

どうして素直にこの優しい声、優しい気持ち、優しいサクを受け入れられないのだろう。なんでカイトじゃなければならぬのだろう。この、今のやり取りが電話であることがせめてもの救いだった。後ろめたさに、苦渋に満ちた顔を見られなくて済む。

「なんもないよ。心配してくれてありがとう」

『そう？ だったらいいんだけどさ。近々、気晴らしにどっか遊びに行こうな』

また、連絡するから。そう言って、サクはあっさりと会話を終わらせた。

無理強いしない優しさで。サクはいつだってユウのことを待っていてくれる。ユウが打ち明けるまで何もかも根気強く、時に後ろを振り返りながら、手を差し伸べて待っている。こんなに想ってくれてるのがちゃんと伝わってきてる。昔のサクは、軽くて、付き合っても遊ばれるだけなんて噂もあって。だけど、実際付き合ってみてそんなのが全くの嘘だったとすぐに気が付いた。さり気無い気遣いにさり気無い心配り、時にはそれが軽く見えてしまうのかもしれないけれど。押し付けけない優しさが、大事にされているんだと実感する。普通の女ならば、きっとこの上ない幸せを感じてるのだろうとユウは思う。

「サク先輩。普通じゃなくてごめんね」

ユウは握った携帯電話に向かって、掠れた声を出した。今度は、止め処なく溢れる涙を抑えることがどうしても出来なかった。こん

なに、人の感情に敏感な人だから。もしかしなくても、きっと気付かれているんだと思う。こんな、ユウの本心に。

この三年もの間、どんな気持ちでいるの？

口にするこの出来ない言葉たちはユウの胸のうちを棘をもって這い回る。全て、自分が選んできた道なのに。どうしてこんなにも傷つけて、傷ついて、望んだ通りに進まないのだろう。

こんな卑怯なことない。いつか、カイトへの想いは時間が掛かっても薄れていくものだ、それだけを支えに、押し寄せる不安に負けないで、サクと過ぎ去る時間にしがみ付いてきたのに。それなのに、秘めたる想いは薄れる気配さえ見せずに、過去の記憶に煌めきを添えてこれでもかというほど膨らんでいく一方で。もう、どうしようもない。

ユウはベットのシーツを強く握り締めた。抑え切れない哀切が止め処なく零れる口を、シーツに強く押し付けて今だけ、縋る。

大罪を抱えて、愛しい幻影にしがみ付いた。

＜39＞この場所に宣誓

全身が心臓になってしまったのかと勘違いしそうなほどの動悸。全身から噴出す汗は、まるでサウナの中にいるようで。吐き出す呼吸は、これでもかかってほど激しい。

でも、もの凄い充足感だった。

カイトは荒い息を吐きながら、滴り落ちてくる額の汗を乱暴に片手で拭う。あの、上り坂までもを疾走した。諦められない気持ちを抱えて、焦がれる想いを糧に死に物狂いに。今まで溜め込んでいた不安や孤独、苛立ち全ての感情が疾走と共に新しい感情に柔軟に作り変えられる。そんな感じに、走り切ることに意味があると思った。禁忌に、不道德に、背徳に、そして自分自身の臆病さに。負の要素は、カイト自身の中で作り変えられるものだから。世間での見解なんてもう、気にしていられない。誰彼の意見なんて、これっぽっちも必要としないのだから。

大事なものは、カイト自身の気持ちに、ユウの気持ちだ。ただ一目散に、この場所を目指して疾走して感じた気持ちが大事なことだ。固めた握りこぶしに力を入れて、カイトは丘の上の公園に足を踏み入れた。

三年ぶりに訪れた。あの頃と変わらないまま、あの約束の場所はひっそりと、だけどカイトのことを待ちわびてもいたかのように受け入れる。広がる眼下の夜景に、そんな風に思えた。胸の中にそっと広がる感傷。けれど、思ったよりは平気だ。

もう、二度とこの場所へは来れないと思っていた。あまりにも切な過ぎる記憶に、きつと耐えられないとも思っていて。見上げるツリーは今でもあの頃と変わらず、夜景という煌びやかな電飾を背負ってカイトの前に立ちはだかっている。あの頃と変わらぬまま美しい、荘厳な存在感でもってカイトを圧倒する。

やっぱりユウと一緒に見たい。

心の奥底からそう願う。カイトは、そよぐ風に身を晒しながら尊ぶべき存在を敬服の眼差しで、自然に出来上がったツリーを見上げていた。

こんなに素晴らしい光景だから。一番大事な人と見上げたい。そして、一緒に感じたい。ありのままの感情を、隠すことなく、他人から蔑まれることなく。しっかりと手を繋いで。

「一緒に」

言葉にすれば、より叶えられそうな気になる。微妙に置かれた距離がなんだ、それでも俺はユウの傍に一生いたいんだ。

開き直る。なんだか、とても清々しい気分だ。

走る風。そよぐ葉。零れる光彩。ここには、こんなにもカイトの心を励ますものが溢れていて。今まで恐れていた過去が、本当の過去に変わって行く。きつと、もう、悪夢にうなされる事はなくて。過去を認めて今を生きる。だからこそ、また頑張れるのだろう。

諦められる程度の気持ちだったら、過去から逃げることもなかったはずだから。遠回りした分だけ、本気なのだ。諦めることができなかったから、こうして今、この場所にいる。

「絶対、連れてくるからな」

カイトはツリーの幹に掌を押さえつけて誓う。ツリーへの宣誓。過去の悲しい記憶を埋め替える。独りで、寒さと心細さに震えながらクリスマスツリーを見上げた記憶を。不安に押しつぶされそうで、大切な存在が離れていく恐怖の記憶を。この場所からやり直して、全部幸せな記憶に塗り替えてみせる。

今までだって、今まで以上にユウのことを想っているから。

双子で、同じ血が流れていて幸せになんか出来るわけない。そんなの、世間が敷いた倫理だ。双子で、同じ血が流れていても、こんなにユウのことを想っているのは世界中を探したって自分しかないないとかイトは思う。だったら、ユウのことを世界一幸せに出来るのは自分しかないわけ。それが、カイトの出した結論。

ユウの反応を恐がっている場合じゃないって気が付いたから。避けられても、退かれてもそれは至極当然のこと。だって、血が繋がった双子だから。だけど、それでも好きなんだから、胸が軋むほど愛しいのだから仕方がないじゃないか。

嫌われたって、こっちを振り向かせてみせる。

カイトはツリーを見上げ、きゅっと口角を上げた。幹に触れた掌が、ほんのり、温かかった。

<40>至福の時間

外から自宅を見上げたら、部屋という部屋の明かりは全て消えていた。

そうだな、もう深夜だから、みんな寝てるか。カイトは独白し、そっと玄関の鍵を開けて、大きな音を立てないよう細心の注意を払ってするりと入り込んだ。なんだか泥棒のような気分だ。込み上げるニヤリとした笑いを隠す必要もなく、そのままバスルームへ直行。走って走って、久しぶりに体を酷使した。汗だくになった全身は丘の風に、かいた汗を浚われたがそれでも気持ちが悪い。

バスルームに入り、豪快にシャワーを捻る。迸る刺激に、くたくなになった体が染み入るように癒されていくようで。カイトはその場に座り込み、少しぼんやりした。

全てを洗い流す湯に、不安をきれいさっぱり連れ去って貰って。残ったのは愛しいこの想いだけ。

なんだか幸せな気分になりながら、わしわしとバスタオルで濡れた髪を拭いて、そのままタオルを肩から掛けた。暑い。体から湯気が立ち上っている。

カイトはキッチンに回り込み、冷蔵庫の中から夏場の北極のように冷えた缶ビールを取り出した。満足げな足取りで、自室への階段を上る。行儀が悪いけれど、我慢しきれないからビールを咀嚼しながら喉を潤す。

そして、何の気なしに自室の扉を開けて、危うく缶ビールを取り落としそうになった。あまりの驚きに心臓が全身に散らばってしまった。部屋を間違えた。そう思って慌てて扉を閉めようとしたが――いや、違っただろ。頭を振った。

カイトの部屋に間違いはなく、いつもと違うのは、そこにいるユウだ。

真っ暗な部屋の中、カーテンを開け放たれたままの窓から差し込

む僅かな月光。空気が止まったかのような、全ての時間が過去に遡ってしまったようで、カイトを酷く混乱させる。昔にも、こんな場面があった。でも、あの時はユウの部屋で、カイトの部屋ではなかったから。動揺を隠せない。そして、あの時ユウにした卑怯なことを思わず思い出し、ビールで冷やした湯上りの身体が、また火照る。記憶の底から浮んでくるユウの唇の感触に、咄嗟に掌を口に押し当てた。

ユウはカイトのベッドに横になり、シーツに顔を埋めるようにして寝ていた。規則正しく上下する肩。広がった髪が、月明かりに照らされて艶めいている。足を丸めて、猫みたいな寝相。可愛いなんて、やっぱり思ってしまう。

「どうしようもねえな。俺」

小さく呟いて、カイトはベッドのすぐ脇に腰を下ろす。

カイトの前に、ユウがいる。こんなにユウの近くにいたことが久しぶりで。手を少し伸ばせば触れられる位置。こんな些細なことで嬉しくなる自分が、なんて単純なんだって思うけれど。綻ぶ口元は抑えようがない。

カイトの方に背中を向けて、小さな手は確りとシーツを握り締め。一体どうしてここにユウがいるのだろう。なぜカイトの部屋で寝ているのかと、訝しがる疑問点は多々あるけれど。理由が何であれ、傍にいられるこの空間が、時間が、物凄く至福。

手にしたままの缶ビールをくいと傾けて、喉に勢いよく流し込んだ。喉の奥に染み渡る炭酸が、全身に駆け巡るように、ユウへの想いが血管の隅々まで満ちる。可愛い、愛しい、眩しい、上げればきつと限がない感情。カイトは冷えた缶ビールを頬に押し当てた。火照った頬に、気持ちがいい。

ベッドの上へそっと手を伸ばす。もう少し。手が触れるぎりぎりの距離だ。

――触れたい。けど、触れちゃいけない。

これは意外ときつい葛藤だと、カイトは悟る。傍にいれることは単純に嬉しい。けれど、傍にいれば触れたくなる。触れてしまえばきつと、抱きしめたくなつて。この欲には際限が無さそうだから、必死で押さえ込む。好き過ぎておかしくなる。このままおかしくなつてしまえば、感情のまま振舞えるのに。だけど、それをやってしまえば、ユウを傷つけてしまうかもしれないから。目の前の誘惑に耐えて、理性の味方になるしかなかった。

ここ数年の双子の微妙な距離を思えば、こんなにも近くにいられるだけで、今は充分だ。カイトは自身に言い聞かせる。微妙な距離を敷いていたのに、どうしてこんな無防備にユウはカイトの部屋で寝ているのだろう。頭の中を色んな疑問が飛び交うけれど、難しいことは明日考えよう。今は、この至福の時を心の底から味わいたかった。

カイトは目を細めて、ユウの小さな背中を眺めた。

＜40＞至福の時間（後書き）

ここまで読んでくれた方、とても感謝です。展開が遅くてすみません。まだまだ、頑張りますので、ご指摘、ご感想などあれば励みになりますので宜しくお願い致します！

＜41＞掌の不安と幸せ

とても心地いい香りに包まれた、とても幸せな気分の夢を見た。
窓から差し込む朝日もいつもだったら、眠気との格闘に参戦してユウを苛立たせるというのに。目蓋の内に眩しさを感じても、今日は苛立つこともなく、凄いいちやかで爽やかな目覚め。

あまりの心地よさにユウは頬をシートに擦り付けて、そっと目蓋を持ち上げる。そして――一瞬で事の重大さに気がついた。それこそ朝の爽やかな目覚めなんて、光の速さで何処かへ行って仕舞うほど。

やっちゃった！　なんて焦っても、もう、それは後の祭で。

目を開けた時、真っ先に視界に飛び込んできたのは、亜麻色の柔らかな髪質のふわふわした頭。もう、状況証拠はこれだけで充分というくらいだ。だって見間違えようがない、悩める種なのだから。

ユウがカイトのベッドを占領してしまったせい、カイトは床に座ったまま、ベッドの縁に頭と腕だけを乗せた無理のある体勢でぐっすりと眠っているようだった。

寝起きのぼんやりの代わりに混乱が、ユウの中でこれでもかというほど自己主張している。

まさか、あのまま寝てしまうなんて。そんなオチ、自分がしてしまふなんて思ってもみなかった。

どうしよう。なんて言い訳すればいいのか、分からない。

焦りに焦って、手足に汗をかいて気が付いた。驚きと情けなさで身動きなんて取れなかったけど、カイトの投げ出された右手にしっかりと繋がった自分の左手。

伝わってくるくる掌の温もりに、思考回路は洪水にでも見舞われたかのように言葉の断片で大嵐だ。

一体全体、何がどうなって手など繋いでいるのか、きっと混乱していないでも分からない。

このままカイトが起きないうちに、この場を去ってしまおうと、繋がった手を解こうとしたが、思いの外強く握り込まれていて解けない。

これ以上無理をすればカイトが起きてしまう。なんたってユウより断然寝覚めがいいのだから。

ほとほと困り果てたユウは体を横たえたまま繋がったお互いの手に視線を向ける。カイトと手を繋いだのなんて、いつ振りだろう。

繋がれた手。

この手から自分の想いがカイトへ伝わってしまったらどうしよう。なんて、有りもしないことを考える。

でも、そんな気持ちと裏腹に妙に鼓動の高鳴りを感じるし、そんな風を感じる自分に嫌悪感も覚えて。知らず内にユウは唇を強く噛み締めていた。

頭の中のごちゃごちゃを追い払って仕舞えば、残るのは至って単純な感情だけなのに。

繋がっているのはこの手だけじゃない。一番強い繋がりはお互いの体の中の隅々まで活動が続けるこの血だ。だから、欲しがってはいけない。この、一時の手の繋がりを。

分かっていたのに、分かっているのに。

激しい程の欲しがる衝動に、抗うように、ユウは焦って上半身を起こした。だって自分がここまで欲を抱いてるなんて、予想以上だ。サクがいるのに。未だにこんなにもカイトが欲しいなんて。

やっぱり、ここにいてはいけない。

気持ち良さそうに眠るカイトの顔を見つめて。諦めるように、一つ頷いた。

ユウは、そっと握られた手を再度解しにかかる。先ほどよりもカイトの力が抜けていて、後少しで解けそう。ユウが安堵の息を吐い

た矢先、解かれ掛かったカイトの手が再び強くユウの手を握り締めた。

驚きに、ユウの肩が跳ねる。

「おはよー、ユウ」

これでもかって程明るい微笑。寝起きの人間とは思えないほどで、ユウの気持ちを更に刺激する。

頬に全身の血が集中してしまったのではないかと思うくらい、熱くて。

ユウは咄嗟に顔を背けた。

「ごめん。あたし、カイトの部屋で寝ちゃったみたい。すぐ出るから」

ああ、最悪の事態だ。カイトが目覚めてしまった。内心焦りでいっぱいで、目を見てなんてとても話せそうにない。

ユウは言い訳もそこそこに、立ち去ろうとベッドから起き上がるうとした。その瞬間、繋がった手をぐんぐんと引かれ、バランスを崩してまたカイトのベッドに逆戻り。

何が起こったのかよく分からなくて、カイトを見る。整った眉が心持か下がっていて、それは少し悲しそうに見えなくもなかった。

＜42＞掌の不安と幸せ

重なった視線。どちらも話すタイミングを見つけられなくて、絡んだ視線を逸らすことも出来ない。その顔を見ているだけで、胸いっばいに広がる哀切。こんなにも愛しいのに。世の中の倫理に阻まれた気持ちが一途に悲鳴を上げるかのように切ない。

ユウは止まった時間にしがみつきたいで、カイトを見詰めていた。先に時間を動かしたのはカイトで、その時間が長かったのか短かったのかはユウにはもう分からなかったが、繋いだ手がきつく握られたことで我に返った。

白昼夢を見てでもいるかのような時間。朧気な意識の中、カイトの瞳がゆっくりと瞬いたのを視覚が捉える。ゆっくりと開いたカイトの唇は思ってもみないことを紡ぎ出し。

「もう少し、もう少しだけ、こうしていてよ」

甘い、甘い、砂糖菓子よりも甘い表情。そして子供のような無邪気な表情なのに。微妙な声音に含まれる不安定な感情に、ユウは何かを発することも出来ず、ただただ呆然。

ずるいと思う。口説き文句だけならまだしも、態度まで。そんなの逆らえる訳もない。だって、カイトが好きだから。本能に逆らえるほど、出来た女じゃない。

ユウは慌てて顔を背けた。きっと、真っ赤になっているはずで。高鳴る鼓動は、力強く叩きつける太鼓のよう。何も考えられない頭で頷くのが精一杯。

駄目だってことだけは、こんな頭でも理解しているのに、感情に流される。いい訳ない。姉弟なのに、双子なのに、家族なのに。

「よかった。もう少しだけこうしていよう。一緒に寝坊しよう」

安堵したかのようなカイトは、ユウの手を握ったまま上体を起こし、ベッドの端に左手だけで頬杖をつく。優しい表情。うっすらと持ち上がった口角に、うっすらと細められた目。

もう、心臓がうるさ過ぎて周りの雑音なんか耳に入らない。視覚がカイトを捉えるからいけないんだと、ユウは慌てて目を伏せた。

「あのさ、ものは相談なんだけど……隣、行ってもいい？」

「……え？」

とんでもないことをあっさりではないけれど、言っただけのカイトにユウの心臓は心配停止したかと錯覚する。

カイトなら、確実にユウの息の根を止められるんじゃないだろうか。カイトの言葉を完全に理解出来ないまま、ユウは思う。だってこんな顔でそんなこといわれたら、全身の血が沸騰してしまう。

姉弟で一体何を考えてそんなことを言うのか。カイトの気持ちさがっぱり分からないし、動転してしまった自分が取るべき態度も行動も正常に判断出来ないまま、ユウは固まったまま動けないでいた。

「ダメ？ 昔はよく一緒に寝たじゃん」

「む、昔って一体いつの話よ……子供の頃じゃない」

おねだりするカイトが何だか、その子供の頃を彷彿させる。確かに、昔は一緒に昼寝などよくしたが、さすがにこの歳で姉弟仲良く一つのベッドはまずいと思う。それは双子以前の問題で。

ユウはぶんぶん頭を横に振りながら、拒否権を誇示した。

一緒になんて寝たら確実に死ぬんじゃないか。いやいや、それ以前に親にでも見られたら何かがなくてもまずいだろうし、それよりも、自分の感情を抑えられなくなって仕舞いそうだし。

産まれてきてこれまで生きてきた中で、今ほど脳内が高速で回転

したことはないんじゃないかというほどフル回転。ユウは色んなことを逡巡する。

だけど、カイトはお構いなしで、

「たまにはいいじゃん？　ね？」

「や、だって。おかしいじゃない。何で一緒に寝なきゃならないのよ。あたし、ちゃんと自分の部屋に帰るから。カイトにベッド返すから……」

焦って勢いよく反論。だって、カイトのペースに乗ってしまったら、都合良くさせられてしまうのは目に見えてるから。ユウも必死になる。その真意が分からなくて。カイトの眼差しは暖かいのに、考えてることがこれっぽっちも分からなくて。覚える不安定な感情に、暖かい朝なのに、手足の先が冷たくなる。

＜43＞掌の不安と幸せ

ユウは無理に上体を起こし、そのままカイトの手を振り解こうとしたが、力では適わず。

困り顔でカイトを見やれば、そこにはふてったような表情。

「それじゃあ、このままでいられないじゃん。嫌ならいいよ。隣にはいけないから、ここにいて」

「で、でも……その体勢じゃ寝るの辛いでしょ？」

「だから隣に行かせてって言ってるのに」

墓穴を掘るとはまさにこのこと。ユウは返す言葉も見つからず、そのまま押し黙った。

妙に気まずい沈黙が流れる。なのに、繋がった手は離れることはなくて。逆に意識がそこに集中してしまう。

意識し出すと、カイトの言葉は頭でぐるぐる回るし、体内温度も急上昇。

もう、本当にどうしていいのかさっぱりだ。

「ごめん。困らせるつもりじゃなかったんだけど。ユウと一緒に過ごすのなんて、随分と久しぶりだったから」

気恥ずかしそうな殊勝な態度でカイト。ふいと逸らした視線が、床の上を彷徨っている。

こういうところ、誰にでも見せないで欲しいんだけど。なんて、ユウの胸裏は沸々と煮立つ。こんなカイト見たら誰だって落ちてしまっただろうから。

未だに沸き起こる嫉妬心に、カイトの口から漏れた言葉に、操られたかのようにユウの手は無意識にカイトの手を握り締めていた。

何をしようとしているのだろう。駄目だと、頭が最後の自制心で止めているというのに、震える唇が紡ぎ出すのは自分の素直な気持ちでしかなかった。

「おいでよ。一緒に寝よう」

もっと焦ったり、上擦ったりしても良さそうなのに、さりと出てくる言葉。真っ直ぐカイトを見る。表情を見れば、言った自分よりカイトの方が驚いたようで、色素の薄い瞳が大きく見開いた。揺れる瞳。うっすらと半分開いた口。

何もかもが愛しくて。誰よりも欲しくて堪らない人だから。理性なんか、カイトの前では塵に等しい。

カイトが深い意味を持って言っているかなんて、分からないけど。ユウがどうしたいか、なんて単純なこと。塵と化した理性が風に流されれば、残るのはカイトへの情熱だけだから。いつだって傍にいたい、寄り添っていて欲しいという冷めることのない熱だ。

頻りに瞬きをして、緩慢な動作でベッドに這い上がるカイトを、その動作の一つだっで見逃したくなくて、ユウはじっと見据える。脳裏に一つ一つを焼き付けて。

この身を焦がす、片割れをいつでも傍に感じれるように。

この瞬間を一生忘れないように。ユウの左手に伝わる温もりは、紛れもなく大好きなカイトのもので、横たわる自分の重み以外で沈むベッドのスプリングが、夢じゃないと教えてくれる。

こんなに近付くのは何時かの図書室ぶりだ。

「シングルだとちょっと狭いな」

そう言ってカイトは首だけユウの方へ向けてはにかんだ。

「だからあたし帰るって言ったのに」

ついさっきまでの緊張やら、動悸やらが嘘のように普通に喋れて、ユウは自分に驚く。正直、背徳とかサクのこととかも考えないようになっているかもしれない。

こんな状況、もう一生ないかもしれないから。今だけ、幸せを感じたい。

「今日、講義あるの？」

「午後からあるよ。カイトは？」

「俺？ まあ、あるっちゃあるかなあ」

「いつ？」

「んー……内緒」

「あ！ もしかして朝一からあるんでしょ！」

慌てて半身を起こしかけたユウをカイトが繋いでない方の手で押さえた。どうやら、全く行く気がないらしい。

ユウは少し嬉しく思いながらも、口先を尖らせた。

「単位落としちゃっても知らないんだから」

「んー、いいの。今はユウに添い寝して貰う方が大事だから」

添い寝。

言われて気が付く。一緒に寝坊しようと言われたが、確かに言い換えれば添い寝でもある。そんな言葉の遊びに気が付き、自分でも恥ずかしくなるくらい頬が熱くなった。

カイトに添い寝をするなんて。全ての煩いことを省けば、幸せの極みにいるみたいで。恥ずかしいやら嬉しいやら複雑怪奇な気分。

照れくささに、向き合った顔をさっと逸らす。

カイトは何が可笑しかったのか、小さく肩を震わせた。

<44> 掌の不安と幸せ

「じゃあ、ユウの講義まで寝てよう。今日は大学まで送ってあげるから」

優しい笑顔で、カイトはそっと瞳を閉じた。長い睫に縁取られた瞳にどきりとする。ユウは暫くその寝顔を眺めていた。

こんな状況じゃ、寝るに寝付けそうになくて。瞬きするのですら勿体無い気がする。どんなに欲しくても、勇気すらなくて諦めた存在が、今日の前にいて。依存だけだったらどれだけ楽だっただろう。カイトの匂い、温もり、かつて独り占めしたくて躍起になっていたことをふと思い出す。

だけど、拒絶されることに恐怖して、それを諦めたのはユウ本人の意志だから。今更後悔したってどんなにか手遅れで。今ここにゐる時間は特別なんだと、自分自身に言い聞かせる。あの時の気持ちを呼び戻し、足掻いたって駄目なものは駄目だ。余計に傷つけてしまふ人だっているのだから。

だから今、この時間を大切にしなければ。

「ユウ。眠れない？」

「え、あー……うん」

まさか、勿体なくて眠れないなんて言えやしないし。

「カーテン閉めようか。眩しいよね？」

遮光カーテンなんて引かれたらカイトが見えなくなってしまう。なんて思ってもそれは口には出せず。ユウは内心だけで小さくがっかりだ。

しかもカーテンを閉めに起き上がったカイトは、繋いでいた手を、あっさりと離して。

妙に切ない気持ちだが、零した水のように広がっていく。カイトの傍にいと、気分が上がったり下がったりで、こんな忙しいことはない。

カーテンを引く音と共に、差し込む夏の眩しい陽光が、少しずつ細くなっていき、最後にはその筋はなくなった。いくら遮光とはいえ、全てを遮ることは出来なくて、部屋は真っ暗にはならない。ならないけど、十分にカイトを観察するには不十分な暗さ。

仕方ないか。小さく息を漏らしたところで、ベッドの空いてるスペースが軋んだ。ふわりと漂ってくるカイトの香り。

そっとユウは目蓋を閉じた。

どうせ、カイトが見れないならこの香りに包まれて寝よう。だって、今朝の寝覚めはとても良かったから。

きっとまたカイトの匂いに包まれれば幸せな夢が見られるかもしれない。

現実では叶わない願いも、夢の中でなら――

そのくらい許されてもいいと思うから。ユウはそっとカイトのシヤツの裾を無意識に握り締めた。その上から衣擦れと共に重なる柔らかさに、心の底から湧き上る安心感。伝わる体温に、絡まる指先に、頭の中が次第に霞み掛かる。隣存在に、眠れそうにないと思っただのに、隣存在の安心感でたゆたうようなまどろみが訪れる。

このまま一生時が止まってしまえばいいのに。

そんな叶わぬ願いを抱きながら、ユウは暫しのまどろみに包まれた。

「おやすみ」

優しく髪が梳かれる感触。

温かく絡まる指先。

懐かしくて心地よい匂い。

深く愛しい声。

その全てを抱きしめて、ユウは意識を手離した。

＜45＞巡る日々に感じて

気が付けば、もうそろそろ夏休みで、日々上昇する気温が月日の移り変わりの早さを物語っている。それに頻りに、これでもかと短い一生を全力を掛けて鳴き続ける蟬の存在も加わって。

もう、こんな季節なんだなあ。なんて、少し感慨深くなる。

大学の食堂で購入したパンと紅茶のパックを片手に、ユウはマユと学内を移動していた。今日の抗議は終わりで、後は食事して帰るだけだ。

「なに、溜め息なんかついちゃって」

「うん。もうすぐ夏休みかあ、って思ってる」

「溜め息つく理由がないじゃない。夏休みなんて最高でしょ？」

訝しげに目の前のマユは小首を傾げて、ユウの顔を覗きこんだ。

単に、夏休みというだけならユウにだって大歓迎だ。ただ、カイトに添い寝した日以来、やたらとカイトと過ごす時間が増えて。意識して接触しないようにしてるにも関わらず、部屋にいればカイトは何の前触れもなく訪れるし、ユウ一人が避けようとしても同じ屋根の下じゃ限度がある。

こんなに近くにいられたら、ユウの決心なんか無残に打ち砕かれてしまいそうで、自信がない。いつだって心はカイトに捕らわれているのに、この状態はかなりきついのだ。

傍にいたい本心と、自分の選んだ三年前の決断の狭間で揺れる揺れる。意志薄弱って言われればそれまでかもしれないけれど、これでも必死の抵抗戦なのだ。だって、欲に負けて何もかも吐露してしまえば楽にはなるかもしれないけど、何もかも無くしてしまう。

全てを無くすなんて勇気があれば、三年前に想いを告げていたわ

けで。

ユウは一頻り考えて、やっぱりもう一度盛大な溜め息を吐いた。理由なんて、マユにだって言えない。

「夏休みかあ。そうだね、講義がないのは嬉しい」

「それだけー？何か楽しいこと考えなさいよ。どこかに行く計画とかさ、何もないの？」

そう言ってマユは盛大に不景気な顔をした。綺麗な顔が歪んでいく。

「なんも計画してないなあ」

適当な芝生の上に木陰を見つけて、ユウは腰を下ろした。隣りにマユが座るのを確認してユウは紅茶のパックを開ける。

「サク先輩とどこか行けばいいじゃない？ 海とか山とかさ」

「んー……」

サク先輩と。

意識し過ぎなのかもしれないけれど、カイトと親密な時間を過ごしてしまっただけから、サクと接するのが心苦しくて。

言わなければバレるわけもないのに。自分の本心を優先したからか、なんだか後ろめたくて、まともに接することが出来ない。

彼氏なのに。三年以上付き合ってるのに。ユウ一人のせいで縮まらない距離。ぎくしゃくした関係。

「何を思い悩んでるのか知らないけど、後悔しないように毎日送らなきゃだよ。ユウ？ 夏休みだけじゃなくてね」

「……うん。心配してくれてありがとう」

いつだってマユはユウを気に掛けてくれている。言わなくても察してくれる心優しさに、堅くなった気持ちを解してくれる。有り難い気持ちに、自然に笑顔が零れた。

「カイトは元気？ ああ、カイトとどっか行けばいいじゃん。あいっユウが行きたいとどこでも連れて行ってくれるでしょ」

「ええー、弟だし。だったらマユがどっか連れて行ってよー」

突然出てきたカイトの名前に、話題に、少し焦る。今はあまり話題にはしたくなくて、ユウは慌てて話を逸らした。

真っ直ぐなマユの視線に本心を見透かされそうな気がして、誤魔化すようにユウは手にしたパンにかじり付く。

何故かマユは、真っ直ぐな視線を柔らかくし、口元だけで微笑んだように見えた。ユウは紅茶のパックを口に運びながら、青々とした芝生に目を走らす。

夏の眩しいほどの陽光に煌めき、美しく生命に満ちてる様は、双子の弟を彷彿させる。その中で沈み込んでる自分の情けなさに、ユウは肩を落とした。

<46>行き違う心情

周りをぐるりと見渡せば、どの学生も心底楽しそうに笑っていて、とても屈託のない笑顔だ。過ぎ去る日々を、爽やかに吹く夏の風に背中を押されながら、目の前を通り行く学生たちが眩しく感じてならない。

それに比べて自分はどうだろう。カイトのような芝生の上に居たって、一緒に煌めくことは適わず、一人辛気くさい。

人生で一番楽しいと世間では言われているこの時期に。抱えるのは誰にも相談なんか出来ない、胸の張り裂けそうな想いで。もう、いっそ張り裂けてしまえば楽になれるのに。なんて、弱気になる。周りの陽気な雰囲気の中でられて、なんだか妙に落ち込む。なくした食欲に、口元まで運んだパンを下ろし、残り少なくなった紅茶のパックを持ち上げた。

「あらら。姫君の騎士がお迎えにおいでだわ」

今まで黙って食していたマユが唐突に、背筋を伸ばして、遠くを指差す。ユウは意味が分からないまま、マユが示した方角を目を凝らして見た。そこに見つけたのは他学内の通路を、いかにも我が物顔で歩く長身の男。

「……サク先輩」

思わず、小さな呟きが漏れる。なんでここに？ 疑問に思ったそばから、マユに「待ち合せてたの？」と聞かれ、ユウは首振り人形のように頭を横に振った。

「ふうん。じゃあ、本当に騎士様のお迎えね」

「でも、どうしたんだろう？ 連絡もなしに来ることなんて今までなかったのに」

何となく解せなくて、ユウは小首を捻る。それに、正直今は会いたくなかったのに。

妙に引っ掛かる気持ちを処理出来ないまま、ユウは無意識に眉をしかめて、マユを振り返った。マユはサクの方を見たまま、何の感慨もそこからは探れない表情。

「呼ばなくていいの？ 無駄に学内探させるのは大変よ？」

ぼんやりしていたユウは、はっとしてマユからサクへ視線を移す。確かに、無駄に探させるのは申し訳ない。サクがこの場に訪れる理由なんて、ユウ以外に思い当たる節がないし。

それに、このまま知らん顔を決め込むこともマユの手前不自然だから。諦めたように、覚悟を決めて、ユウはサクを呼んだ。

呼び止められたサクは一瞬驚きをその表情に浮かべたが、すぐさま明るい笑顔になって、真っ直ぐにユウたちの方へ進路を変える。

最近ろくに会ってもいなかった。電話をしていても気はそぞろで、弾まない会話はいつものことだったけれど、拍車を掛けていたのも事実で。どのような顔で迎えればいいのか、何の心構えの出来ていない頭じゃ咄嗟に判断しかねる。普通、彼女だったら嬉しそうに迎えるだけでいいのに。強張った頬の筋肉は、巧いこと動かなくて。

堅くなった頬を隠すかのように、ユウは掌を方頬に押し当てたまま、サクを迎えた。

「マユちゃん、久しぶり。元気だった？」

サクはにっこりとした笑みをユウに向けてから、型通りの挨拶をマユにした。マユもそれに笑顔で返している。二人のやり取りを、

早速投げやりになった頭は脳内処理速度を落としたまま映像とだけして飲み込んでいく。

興味のない映画のワンシーン。そんな味気ない感じ。

「サク先輩……どうしたの？」

無意識に口から発した言葉は必要以上に味気なかった。二人の会話を遮るように発してしまったというのに、その口振りは興を削ぐほど。わざわざここまで来た人に聞かせる声音じゃなくて。

発した自分に驚き、サクとは正反対に思い遣りのない自分に羞恥心を抱くには充分で、ユウは顔を伏せた。

その場に立っていたサクが動く気配がして、徐にユウの前にしゃがみ込んだ。伸ばされた両手がユウの俯いた頬を捉え、そっとサクの方へ向けられる。

重なった視線に、逸らすこともままならず、ゆらゆら揺れる感覚のまま見詰めた。強い眼差しで、射るような瞳。引き結んだ形のいい唇がふと持ち上がった。

「ほら。ユウちゃん、最近そんな様子だからね」

そう言ったサクの目は先程の鋭さが嘘かのように優しさに満ちていて。小さな自分がもの凄く恥ずかしくなる。

<47>行き違う心情

様子がおかしいということが、敏感なサクに分からないわけもなくて。それでわざわざユウに会いに足を運んでくれたわけだ。それなのに、ユウの胸を締め付けるのは、苦渋に満ちた感情ばかりで。サクの優しさに素直に喜べればこの上なく幸せな気分に含まれるのに。そんな簡単なことがユウには果てしなく難しくくて、サクとの関係にも停滞する秋雨前線のように晴れない。

ごめんなさい、なんて感情は、ただただ失礼なだけなのに。苦しいのは自分だけじゃない。きっとユウ以上に、サクはユウの気持ちに振り回されているはずで。

寛大なサクの前では、兎の毛の先程の存在でしかない自分に嫌気が差す。羞恥心に、自虐的になったところで、隣のマユが口を開いた。

「じゃあ、あたしは先に帰るね。サク先輩、お先に失礼します」

「ああ、なんだかごめんな。横取りしたみたいで」

「いえいえ。ユウの彼氏さんからいつもユウを借りてるのはあたしですから」

相手を立てる笑顔をマユは湛えて、その場から腰を上げた。淀みない動きに、咄嗟に引き止めようとしたユウにマユは先手を打つ。

「ユウ。後悔しないように日々過ごすって話。忘れてないよね？」

優しいが、ふんだんに厳しさを含む声音に、ユウはマユに手を伸ばすことさえも出来なくて。

遠回しにだけど、それは、逃げるなということ。

幼なじみの親友は、事情を知らなくても的確にユウを導き、背中

を押す。弱った心に、勇気を分けて貰ったようで、ユウは人知れず強張った肩を下ろした。ひきつりそうだった頬が上がり、笑顔で見送った。

「光陰、矢の如し。だからね」

立ち去り際に、マユが落として行った言葉。それに反応したサクはマユの背中を見送りながら小さく笑った。

「マユちゃんって、本当にいい子だよな」

「うん。マユは昔から」

マユのお陰で柔らかくなった空気にも感謝しながらユウは返事をする。

サクはマユの座っていた辺りに腰を下ろすと、足を投げ出して晴れ上がった空を見上げた。整った顔は何の表情も湛えず、ただ青い空を見詰めている。

「で、最近のユウちゃんは一体どうしちゃったのかな？」

徐に振り返ったサクは眉尻の下がった笑顔。何も言えずユウはまた俯いた。

「言いたくないなら、無理に言わなくてもいいけどね。ユウちゃんが元気になってくれれば俺はそれが一番いいんだけど」

「元気ないわけじゃないんだけど、あの、心配掛けたならごめんね」
「心配くらいどうってことないよ。でも」

サクはユウから目を逸らし、伏し目がちになった。言葉を途切り、少し言い淀む。この先は、この人に言わせてはいけない。咄嗟にそ

んな気がして、ユウはサクの腕に手を置いた。温もりが掌を通して伝わってくる。情けないほど、胸が締め付けられた。

「あの、なんて言えいいのか、まだ分からないんだけど……とにかく、大丈夫。心配掛けてごめんね」

あげたいのはこんな言葉じゃない。サクが欲しいのだってきつとこんな言葉じゃないはずだ。頭では分かっている。だけど、心はそれに伴わないのだから、好きって一言がサクには言えなくて。

自分の愚かさに気付きながら、サクの優しさに甘えたまま、自分はこのまま逃げ続けるのだろうか。つい、先程のマユの声が浮ぶけれど、やっぱりまだどうしていいのか分からない。

思わずサクを掴んだ手が震えそうになるのを必死で堪え、ユウは努めて自然に見えるように笑顔に向けた。こんな笑顔で騙されるサクではない。でも、サクは誤魔化してくれるのを知っている。とことん卑怯な自分に反吐が出る。

「分かったよ。分かったから、もうそんな無理して笑うなよ。ごめん」

ずっと伸ばされたサクの長い腕がユウの上半身を包み込む。耳元で囁かれたサクの声は、オブラートの中に苦しさが包まれているような、優しい声だった。

こんなに大事にされているのに、苦しめてばかりで。泣きたいのだって、きっとサクの方だ。それなのに、また気持ちを受け取るのはユウの方ばかりで。もう、これ以上苦しめたくないのに、それを解決する言葉が出てこないし、態度も示せなくて、ユウは声にならない声を発して、涙にならない涙で顔を歪めた。

<48>行き違う心情

強い西日が差し掛かる駅のホーム。上りの電車が滑り込み、仕事や学校帰り、所用を済ませた人々を吐き出してまた、それらの人々を飲み込んでいく。下りのホームでそんな光景をぼんやりと眺めていた。ホームに備え付けられた古びたベンチに浅く腰掛け、隣に同じく腰掛けたサクの存在を陽炎のように感じる。こんなに側にいるのに、遠い存在に感じているのはきつとお互いで。でも、その原因はユウの方にあるから、結局何も言えなくなる。

何本の電車を見送ったのだろうか。オレンジ色に染まるホームの喧騒の中で、行き交う人々に取り残されたような空気を先に動かししたのはサクだった。

「このまま、二人きりで遠くに行きたいね。誰もいない、誰も知らない町で、知ってる人もそれこそほんとうの二人きりで誰もいないところに」

そう、サクは言って眉の下がった笑みを零した。こんな悲しい笑い方は、他の誰からも見たことがなくて。そんな顔をさせてしまう自分の存在が恐ろしいほどに忌々しい。ユウはサクを直視することも阻まれて、つと視線を逸らした。

「この世の中に、俺とユウちゃんとの二人きりだったら……そんなに苦しめないで済んだのにな。俺、全然役に立ててない。ごめんな」

足下が崩れ落ちていく感覚に、ユウは全身が痺れていく。それでも、サクにそんなことを言わせてしまった自責から強くサクの手を取って、手が白くなるくらい握り締めた。

「サク先輩のせいじゃない！ ごめんなさい、あたし、サク先輩のこと苦しめてるって分かった。分かって、それでもどうにも出来なくて、いつまでも甘えたまままで」

徐に、サクは空いてる方の手を上げ、ユウの口元に押し当てた。

「うん。それ以上は言わなくていいから」

サクは手を下ろし、その手でユウの髪を梳く。

「悪い。こんなこと言うべきじゃなかったよな。この状態を選んだのは俺だよ。それでもユウちゃんの側にいることを望んだのは俺だ。それは、俺の勝手なエゴだから……だから、それを気に病んでいながら、気にするなって言いたくてさ」

カイトのこと忘れる為でいいよ――

蘇る記憶。雪に覆われたあの、渡り廊下。それを望んだのはサクでも、あの日のなかに閉じ込めてしまったのは紛れもなくユウだ。あの日から動けないでいる。臆病な自分のせいで、サクを雁字搦めにして何方付かずのまま。

頬を伝う感触が、溢れ出した涙だということに暫く気付かなかった。

「焦らなくていいよ。ユウちゃんが俺の傍にいてくれればさ。いつまでも待てるから。ユウちゃんには重く感じるかもしれないけどね」

そう言ってサクは口角を引き上げて、悪戯でもした子供のような

顔で笑った。

深くて、この強い西日のオレンジですら染め上げることの出来ないサクの気持ち。この強い気持ちに一体どれほどのものを返してあげられるというのだろう。きつと、見返りなんて求めてはいないのは分かっているけれど。それでも、このサクが存在を、気持ちを、独り占めする資格なんてユウにはない。本当は、始めからそんな資格はなかったんだって、気付いたのに。

サクが望むように、この世に二人きりになってしまえばどれだけいいだろう。そうなれば、サクをこれ以上苦しませてなくて済むのに。サクの不安は少しだけでも薄れるかもしれない。

だけど、それはユウ自身が口に出しては一番いけないことも分かっている。だって、そんなことを言えば、またサクは氣を使う。

自分が言った言葉に後悔すら覚えてしまうかもしれないから。

サクとユウしかない世界。たった二人きりになってしまったって、きっとユウはカイトを探してしまっだろう。どこにもいなくて、その姿を見つけるまでは死に物狂いで歩き続ける。こんなに近くにいて、慈しむような気持ちをくれるサクよりも、愚かで貪欲な自分は、惨めにも血の繋がった片割れを探して果てるのだろう。

サクが、そんな想いに気付かないわけがない。だから、ユウは黙って俯くことしか出来なかった。

そっと拭われる頬の涙は乾く気配がないほど後から後から止め処なく零れて、まるでユウの業の深さの象徴のように思えた。嗚咽を必死で噛み殺し、優しく抱き締めてくれたサクにしがみつく。髪を梳く仕草に、心が凪いでいく。

凪いだ心で、想うのはカイトのこと。

凪いだ心で、考えるのはサクのこと。

いつか、それが反転する日が来るのだろうか――

<49>愛しい記憶

ひんやりとした食感がこれでもかってほど気持ちがいい。熱を持った口内に、抗う術を持たない無色透明なそれは、シロップという名の衣装を纏い、華麗に散っていく。黄色、赤、緑、青と、様々な衣装があるがユウは赤い色をしたいちご味が一番好きだ。ほんのり甘くて、ひんやり冷たい。

「かき氷機なんてうちにあったんだね」

シロップをかき氷に混ぜ合わせながらユウは、自家用のかき氷機を使い、氷を削るカイトを見た。大して力も入れなくても削れる、その便利な機械を真剣な表情で、取っ手を回しているのが可笑い。そんな姿までも愛おしく感じてしまう。

胸が、ずきりとした。

「キッチンの収納を片付けてたら出てきたのよ。昔貰ってすっかり忘れてたのね」

隣に腰掛けた、母――カナコはにっこりとユウに笑い掛けた。カナコが見つけだしてきたかき氷機に真っ先に飛びついたのはカイトで。子供のようにはしゃいでシロップを買いに行ったのを、ユウは微笑ましく見送った。

そのカイトはというと、真剣に氷を削っていて自分は食べてもいない。ユウは首を傾げた。

「カイトも食べなよ？」

「これはユウたちのおかわり分」

「あら、お母さんはもういいわ。さすがにお腹壊しちゃうもの」

「あたしも！　だってそれ食べたら四杯目だし」

どれだけ食べさせる気だったんだ！　と、突っ込みたいところをぐっと我慢してユウはカナコと同じく遠慮する。

カイトは一瞬削った氷に視線を落とし、悲しそうに目をぱちぱちとさせた。

「もういないかあ。じゃあ残りは俺が食べるか」

「じゃあお母さんはお茶入れるわね」

カナコはキッチンへ足取り軽く、鼻歌交じりで歩いて行く。ユウはそちらを出来るだけ意識するようにして、カイトからの視線を遮断する。さつきから、不躰過ぎる、と言っても過言じゃないほどの視線をカイトは何度も投げかけて来ていた。意図が測れなくて、どぎまぎする。こちらが意識してしまっているのを、カナコにもカイトにも気付かれて仕舞うわけにはいかないから、ユウは緊張しっぱなしだ。

ただでさえ、一緒の空間で過ごすことに後ろめたさを感じているというのに。この弟ときたら、真っ直ぐで、こちらが照れてしまうくらいの視線を寄越すから、ユウの視線は真逆に泳ぎまくりで。邪な気持ちだが、見透かされないか不安になる。

「俺、このかき氷機覚えてる」

シロップをたっぷり掛けたかき氷を口に運んだカイトは、徐に視線をユウから逸らして言った。

ユウは、カイトが視線を逸らしてくれたので、安堵しながら「覚えてるの？」と聞き返す。

「俺が削るって言ったら、ユウも削るって言い出して取り合いのケ

ンカになった」

口の端を持ち上げ、端正な顔を意地悪くカイトは歪めて笑った。ユウは、そんなことあったかなと記憶を辿るが、靄が掛かったかのように思い出せない。握ったスプーンを口に加えながら、思案に耽っていたら背後からカナコの明るい声が響いた。

「そんなことあったわね。二人して取り合いしちゃって、挙げ句の果てに二人して同時に泣き出しちゃうから、お母さん取り上げて隠しちゃったんだったわ」

懐かしそうな表情を浮かべて、カナコはお茶を淹れた急須と湯呑みを盆に乗せ戻って来た。ユウはカナコが急須を傾けてお茶を淹れるのをぼんやりと眺めながら記憶を辿るが、やはり覚えていない。

「泣いたっけ？」

「二人して大泣き。お母さん困っちゃって」

可笑しそうに微笑むカナコにカイトは、口の端を上げてはにかんだ。

「双子だから、よくタイミングが重なっちゃうのよね。子供の頃は風邪引くのも一緒だったし」

そう言ってカナコは熱いお茶を啜った。ユウは複雑な心境で、双子という言葉で心で反芻しながら視線を上げると、やはり同じような表情のカイトと目が合う。とん、と軽く跳ね上がる心臓を余所に唐突に家の電話が鳴りだした。

<50>愛しい記憶

けたたましく鳴り響く電話に、「はいはい」と呟きながらカナコが席を外し、電話まで小走りで寄る。どうやら知人からだったようでカナコはそのまま世間話に花を咲かせてしまった。

たった二人きりのテーブル席に、気まずい思いでユウは熱いお茶を一口啜り、如何にどのタイミングで席を外すか思案して小さく唇を尖らせる。

急に、二人きりになってしまうと、サクの悲しさを含んだ笑みが目蓋の裏側に浮かんできて、いたたまれない、苦い気持ちに支配されるようで。どうしようもなく、逃げ出したいという焦燥に駆られる。最大限に、視線を合わせないように意識し、俯いたまま話し掛けられないよう差し向けたが、カイトはそれを気付いてか素知らぬ振りが、明るい口調で話し掛けてきた。

「俺さ、一つ小さな夢叶っちゃった!」

無邪気な、あどけない笑顔。心底幸せそうなカイトに、何の予防接種も施していないユウの脳内は呆気なくやられてしまいそうになる。

否応無しに高鳴り始める胸に、手を当てて、無視するわけにもいかないから、

「夢って? どんな?」

ちよつと怪訝な態度をとってみる。それでもカイトは歓喜に溢れた表情でユウの顔を真っ直ぐに見詰める。

「さっき、かき氷機取り合いしたって言ったじゃん。何で取り合い

になったか分かる？」

「？ かき氷作りたかったからじゃないの？」

「うん。ユウはね。でも、俺は違ったんだ」

じゃあ、どうして取り合いになるのだろうか？

カイトの意図するところが理解出来ず、ユウは首を傾げた。そんなユウの反応を面白がっているのか、カイトは満足げに口の端を持ち上げて柔らかく笑うと言った。

「ユウはかき氷機でかき氷を作ってたかった。でも……俺は、そんなユウにかき氷を作ってあげたかった」

言葉を理解する前に、頬に熱が集まる。頭が理解を示す前に、体が反応するなんて。

そんなの子供の頃の話じゃない！ なんて自分に言い聞かせても火照る頬の熱はなかなか下がりがりそうもなくて。嬉しいんだか、ユウの気持ちを知らないカイトがそんなことを言うのが恨めしいのか、複雑だ。

だけど、体だけは素直に反応してしまうからたちが悪い。複雑な感情を抜きにしたら、これはやっぱり嬉しい反応ってことだから。

何も言えなくて、ユウは目を見開いたままカイトを見つめていた。

「今日、俺がユウにかき氷を作ったから。幼い日の俺は夢を叶えたことになるでしょ。それって、凄い幸せだよな」

ああ、こういう瞬間が一番好きなんだ。

駄目だ、駄目だと、どれだけ言い聞かせたって、こんな自由で奔放な、真っ直ぐな性格に惹かれないわけがない。半ば恍惚とした気分になりながら、ユウは知らず微笑んでいた。似ているようで、似ていない。双子だって、同じ人間じゃないから。惹かれることだった

であるわけだ。

だって、ユウ自身はこんな魅力的に笑うことなんて出来ない。

「それ、貸して」

「これ？」

徐にかき氷機を指差したユウに、カイトは呆けた顔で聞き返した。
無言で頷くユウに、そっとかき氷機を差し出す。

ユウは何も言わず、その取っ手に手を掛けて、残った氷を削り出す。

くれた気持ちに、気持ちを返したくて。

この気持ちを伝えるわけにはいかないけれど、この気持ちを込めて、カイトにかき氷を作ってあげるとは許されるだろうから。

「子供の頃のカイトにお礼を言っておいてね」

照れ隠しに、そっぽを向いて差し出したかき氷は、甘い甘いシロップをたくさん塗して。

＜50＞愛しい記憶（後書き）

お読み頂いた皆様、季節外れの話ですみません！

＜51＞心占めるのは

どれだけ嬉しくて、束の間の幸せだって、このちっぽけな頭では分かっていても、比較するならユウに添い寝して貰った時並みの効力で。

ただのかき氷。だけど、ユウがカイトの為に作ったかき氷ならば、それはされどかき氷なのだ。

かつて食べてきたあらゆる食事が一瞬にして色褪せて、味気ないものと誤認識してしまっても、脳内がきちんと働かなくなったらカイトは抗わないほどの歓喜に満たされていて。どれだけ単純なんだって、マユあたりは眉間に皺を寄せそうだなと思いつつ、浮かれた脳内をそのままにカイトは終始だらしない笑顔を浮かべていた。

「美味しい？」

訊ねるユウに、無言で頷き返す。

食べるのが勿体ないとかこの際言わない。この気持ちだが、一緒に溶けてしまわぬよう、形あるまま体内に納めてしまいたくて。カイトは黙々とスプーンを運ぶ。

そんなカイトを尻目に、ユウは空になってしまった湯飲みを流しに運び、そのままカイトに背を向けて部屋の扉に手を掛けた。それに気が付いたカイトははっとして、

「どこ行くの？」

カイトは早口に聞く。

「え？ 部屋に戻ろうかと思って」

何故か俯いたままユウは小さな声で呟いた。急に素っ気無い態度。胸の中に小さな風が吹いたようにざわめき出すのを、カイトは感じて残ったかき氷を抱えたままユウの後ろ姿を見送った。

少しだけ、ユウの心の中に潜り込めたかなと思ったのに。

先程の自分の高揚した気分が嘘かのように、思い垂れ込めた雲がカイトを包む。素っ気無く、傍を離れて行かれるだけで苦しくなる。こんなに好きだからこそ、気持ち振り回される。でも、カイトはもう決めていたから。

残りのかき氷を口の中へ放り込んで、溶ける前にカイトのものにしてしまう。

振り回されるのは、覚悟の上。

何度擦れ違おうと、何度避けられようと、何度拒否されたって、諦めない。この心がどんな風に掻き乱されても、それを許す相手はユウだけなのだから。貰う痛みだって、至極の幸福だ。

「ごちそうさま！」

カイトは電話口のカナコに言って、使った食器を賑やかに鳴らしながら流しに放り込む。そのまま、廊下に飛び出して、二階への階段を二段飛ばしで駆け上がった。何度も立ち入ったことのあるユウの部屋の前に立つ。今日はなんて理由をつけて、部屋に入り込もうか。なんて、少し逡巡して。ノックしようと挙げた手が、止まった。カイトは怪訝に小首を傾げながら、ユウの部屋から聞こえてくる、くぐもった声に耳を澄ます。暫らく聞き耳を立てているとどうやら、誰かと会話しているようだということが分かった。きっと携帯で話しているのだろう。扉をすり抜けて聞こえてくる声はくぐもって、不明瞭なユウ一方だけの声だったから。

邪魔しては悪いから、と一歩後退しかけて、カイトは足を止めた。急速な速度で、胸底を埋め尽くしていくのは耐え難い、辛苦に不安。

——会話の相手は誰？

一度、広がってしまった疑問と不安はそれを解決するまで、カイトの思考を埋め尽くして苛む。相手がマユとか、同性の友達なら如何といったこともないのだ。ただ、カイトの心を掻き乱す存在といえば、今のところ独りしかいないわけで。

かつて、カイトから想い人としても、姉としても存在を奪っていつて、今でも離さないその人。どんなにカイトが羨んでも、カイトが手にすることが出来ないものを持っている、他人。サク先輩だったら——そう思うと、心臓を基点に、手足の先にまで熱が迸ったかのように、熱くなる。同時に、頭の中が長湯でのぼせ上がったかのようになり、カイトはいてもたってもいられない衝動に、抵抗する術もないまま駆られるしかなかった。

＜52＞心占めるのは

止められない衝動にまかせて、カイトはノックすることも忘れたまま、ユウの部屋へ転がり込む勢いで扉を押し開けたのだった。締め付けられる胸の痛みに、笑顔を浮かべる余裕もなく、嫉妬に歪んだ顔を隠す余裕もない状態で。

格好悪い、なんて思ったって、取り繕う余裕なんかこれっぽっちもなく。情動に任せて飛び込んだ部屋。そこに、驚きに目を見張ったユウが携帯を耳に押し付けた状態で、啞然とこちらを見ていた。呆然としたまま、身動きの取れないユウを見ながら、また、カイトも同じく固まっていた。

頭の隅々まで埋め尽くした不安と情動に突き上げられるままに、飛び込んだ方がいいが、カイト自身そんなことをするつもりもなかった。ので、どうしていいのかわからない。戸惑いをお互いに表した瞳で見詰め合う。訳のわからない状態で、驚いた時に醸し出す表情が、なんとなく自分に似ているな、などと考えたり。でも、そんな状態は長く感じるようで、きつと短かった。

次の自分がしなければならぬ、然るべき行動が見出せていた訳ではなかった。ただ、電話越しから聞こえてきた沈黙を不審がる相手の声に、いてもたってもいられなくて。カイトは座ったまま硬直しているユウの肩を軽く押す。不意の行動に面食らったのか、ユウはあっさりバランスを崩して、床の上に背中からころり、と転がった。ユウの伸びた手から、「ユウちゃん？ どうしたの？」と頻りと喚き立てる声がある。

我慢がこの世に存在することなんてとうに忘れ去ってしまった。悔しくない訳がない。こんなに好きなのに。

世界がひっくり返ったって、ユウだけは守れる自信もあるのに。誰よりも好きだって、誰よりも大切だって。

どうして、誰からも認められない関係なんだろう――

気持ちちが沸騰してしまいそうで、カイトはそつとユウから携帯を取り上げる。床に転がるユウに圧し掛かるようにして、カイトはユウの顔を覗きこんだまま、手探りで通話終了のキーを押した。操作音に、ユウの表情がはつと息を呑む。覗き込んだ瞳の奥が、不安げに揺れている。

「……カイト、どうして……？」

そう呟いたユウの唇は細かく震えていた。疑心に満ちた瞳に、醜く歪んだ自分の顔が映っていた。

そりゃ、そうだ。きつと訳が分からないに違いない。カイトは皮肉な笑みをも薄っすらと浮かべて、心の中でそつと吐き出した。

こんな浅ましい感情を抱えているのは、自分だけなのだから。

急激に、高ぶっていた気持ちが冷蔵庫にでも押し込められたかのように、冷えていく。少し、冷静になってカイトはユウの上から退いた。

「ユウ、出掛けよう」

「……は？」

「いいから！ 来て！」

ぐるぐると色んな感情が入り混じった気持ちのまま、カイトはユウの手を掴んで起こす。全くの想定外の展開に目を丸くしたユウを無理矢理立たせ、カイトはそのまま玄関口まで、早歩きでユウをひっぱって行く。何かを考えている訳ではなかった。なぜなら、さっきからカイト自身が自分の行動が想定外だったのだから。自分の行動にけじめを付けられるほど、大人じゃない。

「ねえ、カイト！ 待って、待って……」

後ろで、ユウの切羽詰った声がする。カイトは意図的に無視して、唇を噛み締めながら玄関口にある、サンダルを無造作に引っ掛けた。ユウがミュールに足を通すのを確認して、カイトは玄関の扉を肅々と押し開いた。まるで、ここから先は神聖な世界にでも繋がってでもいるかというような、願うような気持ちを不思議と込めたくなくて。

「カイト、どこへ行くの？ あたし、先輩に電話しなくっちゃ……ねえ、何怒ってるの？」

「怒ってる？ 何も怒ってないよ？」

「うそ！ 怒ってるじゃない」

「何で、そう思うの？」

「それは……」

カイトに引っ張られるまま喚いていたユウの言葉は、最後は口の中でもごもご言っているようにしか聞き取れなかった。だけど、言いたい言葉はカイトには確りと理解することが出来ていた。――双子だから、分かる。

それはユウに改めて言われるまでもなかったのだ。ユウは何も悪くない。悪くないけれど、確かにカイトは苛立ち、怒っていた。胸裏に広がる灰色な暗い感情を押さえ込めない程に。双子だから、リンクしてしまう。なんて、嫌だった。カイトだってユウの感情をリンクすることもある。けれどそれは、双子という事実ではなくて、好きだから。双子の事実よりも気持ちの問題だ。

でも、そんなことを考えたって、それは甚だ今の出来事には大して関わりがない。色んな感情が入り混じるけれど、カイトが今困惑しているのはなんでこんな行動に出してしまったのかということだ。

＜53＞心占めるのは

「待って、カイト。本当にどこへ行くの？ 一体どうしたのよ？」

何で怒ってるの。言ってくれなきゃ分からないよ」

「どこでもいいよ。行き先なんか決まってるから」

「じゃあ、どうして……」

訝しげな声音。困らせたかった訳ではなかったのに。早くも、不安に包まれた後悔が押し寄せて来る。歩む速度を落して、カイトはユウの隣に並んだ。

「たまには俺と出掛けてくれないじゃん」

「それは構わないけど、あんなことしなくてもいいじゃない」

ユウの言うことは尤も過ぎて、カイトは開きかけた口を仕方なく噤んだ。カイト自身も顛末に動揺していたから、ユウに如何言っているものか分からなくて、思わず遣り切れない溜め息が漏れる。隣から睨むように見上げているユウの視線が痛くて、カイトは反対を向いた。押し黙って、歩いていると、ユウを掴んだ手が引っ張られ、

「ねえカイト。もう、本当にいい加減にして。どうして黙っちゃうの？ どこへ行くの？ あたし、サク先輩に電話しなくっちゃ。携帯も置いて来ちゃったし、きっと先輩困ってるから」

早口にユウ。そわそわと視線が泳いでいるあたり、相当に困っているのが容易に窺い知れた。けれど、そんな態度でそんなことを言われれば、カイトだって黙って引ける訳もなくて。嫉妬心剥き出しに、否定してしまいたくなる。

正直な感情で言ってしまうと、他の男の話なんか聞きたくもない

し、関わって欲しくもない。そんな可愛い顔して、他の男の心配なんか。自分の考えでまた、感情を煽ってしまうカイトは我慢という脆い線も先程の通話と一緒に切ってしまったのだった。

「サク先輩の話なんかするなよ。いいから、ついて来て」

「……どこ行くの？」

「どこでも。誰も知らないところ！　サク先輩のいないところ！」

「ねえ、なんで怒ってるの？　サク先輩がどうして出てくるの？」

「怒ってないってば！　ユウはそんなにサク先輩がいいの？　俺と一緒にじゃ、嫌なわけ？」

苛々に任せてカイトは吐き捨てるように言ってしまった。こんなこと言ったら、ユウは怒ってしまうかもと、はっとしてユウの表情を窺ったカイトは少し拍子抜けしてしまった。ユウは、困ったように、目を伏せて、唇を噛み締めている。どういう反応なのか推し量ることも出来なくて。カイトも眉を顰めた。暫らく、どんよりとした気まずい雰囲気包まれて、辟易する思いで、カイトは黙ったままユウの手を引いて歩いていった。

こんな状況でなければ、きっとこの上なく幸せを味わえたはずなのに。わざとではないけれど、偶然勢いで引っ張る為に繋いでしまった手。まちのほとりを、ユウと手を繋いで歩くなんで、子供のとく以来だ。それなのに、こんな状況じゃ素直に喜べない。

自分で招いた結果なのに、何もかも上手く行かなくて、苛つくし不甲斐ないし情けない。色んな細かい交ぜになった気持ちを重ね受け止めながら、それでも少しづつ冷静さを取り戻してきたカイトは、ユウのほうは見ずに言った。

「無理矢理でごめん」

小さくて聞こえたのか不安になる。ユウは、何の反応も示しては

くれなかった。

「今だけでいいから、一緒についてきて？」

ユウの機嫌を窺うように、カイトはそつとその瞳を覗き込んだ。結局は、ユウに嫌われたくない一心で、機嫌を取ってしまうのだ。情けないけど、それでいい。それだけ、好きなのだから。

「カイトはズルいよ。今だけでいいとか、毎回じゃない」

「そう？ そんなこと言ったっけ？」

「言ってる！」

「でも、ユウは優しいからお願ひ聞いてくれるんでしょ？」

何とかいつもの調子を取り戻して、カイトはお調子者らしく聞いた。

ユウは不貞腐れたように唇を尖らせてそっぽを向いている。それでも、先程よりは機嫌が良くなっているような気がして、カイトはそつと胸を撫で下ろした。

<54>心占めるのは

初夏の照りつけるような暑さなんて、いつもだったら煩わしくて仕方ないのに、隣と一緒に歩く存在が愛しいというだけで、こんなにも気だるい熱気も爽快に感じるなんて。どれだけ、ゲンキンなんだよと、思わず自分に突っこみたくなる。

少しずつ、自分のペースを取り戻したカイトは、もうすでにいつもの楽天家ぶりを発揮していたりして。それに振り回されたユウが、困ったように大人しく後をついてくる様が、また更にカイトの気持ち大きくなる。さっきはサクの声を聞いて、柄にもなく嫉妬心に取り乱してしまったが、落ち着いて漸く今の状況を考えてみれば、ユウは今、カイトと一緒にいるのだという事実。

それに一気に気分は上昇したのだった。

サクの彼氏というポジションに比べれば、まだまだカイトは遅れを取っているのは否めない。が、諦めないと決めた以上、どんな手段だって選ばないし、使える要素は全て使う。もちろん、双子で弟という立場だってフル活用だ。

「さて、どこに行こうか？」

機嫌よく振り返ったカイトは、ユウの顔を覗き込んだ。ユウは、訝しげな表情を湛え、口元を尖らせる。

「どこって、カイトがついて来いって、さっきから散々言ってたんじゃない。ほら！ やっぱり、行くところなんかないんじゃない！

あたし、やっぱり帰る」

「はい、却下。家はなし」

「そういうことじゃなくなつて……」

恨めし気に、睨んでいるユウの表情まで恐ろしくかわいく見える。おもわず頬が上気しそうになるのを必死に堪えて、カイトは少し視線を逸らした。そして、徐に尻ポケットに手をつ込み、今度は一気に蒼白になる。

「てゆうーか、俺財布とかみんな置いてきた……！」

慌てるカイトを見て、ユウは大きな溜め息を吐く。そして、堪えきれないともいうように、小さく肩を震わせ笑い出した。

「カイト、ばかじゃん。財布がないとどこも行けないよ。あたしだって、無理矢理連れ出されたから何も持っていないし」

「だよなあ。ごめん。大したこととしてあげられねえや。まあ、取り敢えずどっか行こう。徒歩で」

「じゃあ、散歩だね」

そう言って、ユウはカイトを置いて先に歩き出した。

ユウの右側斜め後ろからついて歩く。微妙な距離感が、微妙に擦ったくて、カイトは口を尖らせた。今はまだ、隣を歩くのは弟としての立場だ。サクの恋人というポジションにとって変わったとしても、白日の下に堂々と歩けるような関係には到底なれないのは分かっているけれど、後ろ指さされたって隣を恋人として歩きたい。

迫り上げる熱い恋情に、カイトは心底思う。

暑い日差し、青く茂る街路樹、澄み渡った空が、この背徳を含んだ恋心さえも包み隠してくれるような気になる。何もかも忘れて、ユウと二人きりでいることを噛み締める。

でも、包み隠したままではいられないのだ。だって、カイトは諦めないと決めたのだから。少しずつでも、ユウをサクから取り返す。

それには、この気持ちは隠してしまっではいけないのだから。

斜め前を歩く、小さな後ろ姿が欲しくて堪らないから。背徳に怯えてこの気持ちを隠してしまうことの方が愚かに思えてしまうくらい、ユウは眩しい存在でもって、いつまでもカイトを魅了し続けるのだから。

「あ、この公園！」

物思いに耽っていたカイトの思考を遮ったのは、ユウの弾んだ声。弾かれたようにカイトは視線を上げて、ユウの指し示す公園を見た。

「ああ、懐かしいな。こんな小さな公園まだ残っていたんだ」

「小さい頃、ここによく遊びに来たよね。カイトが、あのシーソーに嵌まっちゃって毎日のように付き合わされた記憶がある」

遠い記憶を呼び起こしでもしたのか、ユウは可笑しそうに小さく笑う。

子供心にも小さい公園として記憶していた公園は、大人になった今からしてみれば本当に小さくて、申し訳程度に中央に添えられたシーソーに、端に長老のように構えた色のはげたベンチが懐かしさと共に、流れ去った時として切なく胸に広がった。

確かに、カイトの記憶の中にも残っている思い出の一部。

「俺も覚えてる。毎日、何回も何回もユウを付き合わせて、仕舞いにはユウが嫌だっていつて泣き出したんだ」

「確か、そんな気がする」

はにかんだように、ユウは口の端を持ち上げた。

執拗にユウをシーソーに誘った記憶も、その理由すらカイトはは

つきりと覚えている。確かに、シーソーは楽しかったのだけれど、何がそのカイトの心を奪ったかと言えば、やはりそれもユウでしかないのだ。

初めてシーソーに乗ったユウは笑い転げるくらいに、喜んだのだ。カイトが激しく勢いをつけて、ユウを跳ね上げると、「空に飛んでいく！」と言って、小さな顔を空に向けて目一杯振り仰いで喜んだ。そんな様が、子供ながらに嬉しくて、カイトはシーソーに夢中になった。

＜55＞心占めるのは

「懐かしいな」

カイトは笑みをこぼしながらシーソーの側に歩み寄った。

黄色い色で塗られたペンキは、ベンチと同様に年月を感じさせる。けれど、彷彿と思い出される記憶は少しも色褪せてなんていなくて。ユウとの愛しい記憶で満たされている。

「シーソーってさ、案外小さいんだね。この、跳ね上がる高さも実はたいしたことなくて。昔は凄く高くまで昇ってく気がしたよ」

ユウはそつと、優しい仕草でシーソーに触れた。

「大人になるって、物の大きさから、何もかも変わっちゃうな」

「うん。なんだか寂しいな。子供の頃は、このシーソーで空まで飛んで行きたい！むしろ行ける、って思ったのに。今きつと同じ感覚を味わったら恐くてたまらないかもしれない」

大人になるにつれて、増えていく恐怖心。子供の自由から変化していく感情は、柵でいっぱいの大人の常識と狭い感覚だ。ユウの言う意味が痛いほどカイトには分かる。その恐怖心と柵に何年も縛られてきた。今だって、気を抜けば捕らわれそうになるのは、カイトがもう大人だからだ。

でも、もう、そんな恐怖心に怯えるのも辛いほどにユウが好きで好きで堪らない。大人になっても、勇気を出せば越えられる柵だ。てあってもいいじゃないかって思いたい。常識だけが全てじゃない。常識だって適わないほど大切なことだってある。

「ねえ、ユウ？ 俺とユウは双子として産まれてきたから、大体はいつも一緒に遊んでたよな。学年だって一緒だし、共通の話題だって事欠かなかったし、俺は何してても楽しかった。でも、たまに考えることがある」

「……どんなこと？」

シーソーに触れていたユウの手が、少し力が入ったように見えた。カイトは、そこからユウの顔を真っ直ぐ見つめ曖昧な表情を浮かべながら言った。

「俺たちが姉弟じゃなかったらどうなってたんだろう？ て」

「……え？」

戸惑いの表情が浮かぶ。笑顔だったユウに、陰りの色がさす。当たり前だ。いきなり何を言い出すのか、血の繋がった相手だからこそ不振に思うのが普通で。

それでも、何と思われようともカイトには言わなければならないことがあるから、グッと拳を握り込む。

「俺は何度も思ったことがあるよ。ユウと他人だったら良かったのに」

一瞬でユウの表情が曇る。暑い日差しが急に肌を焼くように熱く感じた。

「どういうこと？」

微かに震えるユウの声。

どんなユウだって愛しく感じてしまうから、もう正直になる。

「ユウと双子で、姉弟じゃなければ、ユウにどんな気持ちを持ったってこんなに苦しいことはなかったんだ。どうして俺がこんなこと思うと思う？ ユウにはまったく理解出来ないかもしれない。俺のこと気持ち悪いって、もしかしたら顔を見るのも嫌になるかもしれない。それでも、もう、これ以上我慢することも黙ってもいられないから……」

カイトは真っ直ぐユウを見る。優しい目が不安げに揺れて、少し開いた口元が小刻みに震えている。きっと、何を言われるのか検討もついていないだろう。カイトは緊張を吐き出すように短く息を吐く。この気持ちを打ち明けたら、もう元には戻れない。良くも悪くも、関係は動き出すのだから。

「本当は、もっと早く言うつもりだった。この三年、ずっと言わなかったことに後悔して、悩んで、あの頃打ち明けていれば何かが変わっていたのかもって、思う反面、この気持ちはいけない、おかしいだろうって無理矢理押さえ込んでた」

「……カイト、よく……分らないよ」

「うん。回りくどくてごめん。俺らしくないよな。でも、駄目なんだ。俺はいつだって、ユウのこととなると、自分を見失ってしまう。それくらい、ユウの存在は大きくて――」

息を呑む。

二人を残して、周りの空気が一斉に止まってしまったかのよう。何もかも告げて、あの子供の頃のように、空に飛んでく勇気を持つて――

＜56＞心占めるのは

三年前に戻ってやり直すことが不可能なら、それは今やり直すしかないってことで。込み上げる不安や、拒絶の恐怖が全くないってわけじゃない。いろんな縋い交ぜになった感情で、指先は情けないけど震えそうになるのが現状だし、喉に声が詰まってしまったかのように思い通りにならない。

それでも、カイトは誓ったのだから。

あのツリーに。また、ユウをあそこに連れて行くって。

だから、これはその宣誓を本当にする為の第一歩だ。簡単にうまくいくなんて始めからさらさら思っていない。この第一歩から、止まった時間を動かす。あの、雪に包まれた渡り廊下から――

「ユウが好きだ」

今は全て受け止めてくれなくてもいい。

この感情を拒否してもいいよ。

もしかしたら、ユウは嫌悪感すら抱くかもしれない。

それでもいい、必ず振り向かせてみるから――

カイトは真っ直ぐユウの瞳を覗き込む。ついに、言った。もしかしたら、声が震えていたかもしれない。でも、正直そんなこと自分でもはっきり分らないくらい、鼓動が激しくて混乱しそうになる。ちゃんと伝わっただろうか不安になりかけて、それは杞憂だと知る。ユウの薄色の瞳がこれでもかってほど大きく見開かれた。その様子からもしっかり伝わったことが窺えるし、ユウが動揺していることも容易く見て取れた。

カイトは深く息を吸い込み、邪魔な鼓動を沈めようと試みてから、そっと口を開いた。

「ずっとユウのことしか見てなかった。こんな気持ちはおかしいってちゃんと分かってる。俺たちは双子だし、姉弟だから……でも、そうやって自分を諫めても駄目なんだよ。気が付けばユウのこと考えて、ユウのことを探してる自分がいる。この気持ちに依存じゃないって気が付いた時にはもう、遅かった」

「カイト……」

「こんなこと言われても、ユウは困るんだろうな」

動揺を貼り付けたままのユウにカイトは優しく微笑んだ。

「今は、サク先輩が好きかもしれないけど……必ず俺の方、向いてもらうつもりでいるから」

本音の中の真剣。これが、何も飾らなくて、何も偽らないカイトの直球な気持ちだ。

長年、溜めに溜めた思いをやっと打ち明けられた。あんなに怖かったことだったのに、意外にすっきりするもんで。

少し安堵の息を吐き、ユウの反応を窺う。

「あ、あたし……」

ユウの上擦った震える声音。無意識だろうけど、スカートの裾を握り締める手が震えている。カイトはごくりと喉を鳴らして続きを待つ。

熱気を押し退けるように、風が吹いてユウの髪を揺らす。

「どうしていいか……分からないよ……」

細々とした小さな声。その一言でカイトの全身から冷や汗が噴き

出す。そして、腹の底から小さな笑いの渦が広がって、本当の意味での安堵がカイトを満たし始めていた。一番恐れていた反応ではなかったことが、少しカイトに余裕を取り戻させた。

「うん、いいよ。今は分からなくても」

そう言って、一つ頷いた。だって本当にそれで今は安心したから、カイトは心の底から温かい笑みが零れるのをそのままに、ユウに向けた。

最初の一言が、拒絶の言葉じゃなくて良かった――

「ただね、道徳とか、世間体とかそんなので考えて欲しくないんだ。それはもう、俺が散々悩み抜いてそれでも、ユウに気持ちを伝えなきゃって思うほど考えたことだから。だから、それで拒否られても俺は納得しないよ?」

カイトは不安げに見上げるユウの頭にそっと掌を置いた。柔らかい髪の感触に、胸が詰まりそうになる。本当は、抱きしめたい。このまま、自分のものにしてしまえばどんなにか幸せなのに。

ただ、そう思うけど、気持ちを伝えたならやっぱり、自分と同等の気持ちユウから欲しい。

「サク先輩なんかより、ユウのこと笑わしてあげれるし、楽しいことも、嬉しいこともみんなあげるよ? ねえ、だからお願い。俺のことだけ……見てよ?」

カイトの言葉に、ユウは俯いてしまったので、その表情はカイトからは見えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2567b/>

LOVE OF BLOOD

2010年10月10日07時50分発行